「何をって……撮ってるんですよ、柚希さんのいやらしい姿を」
幼いサキュバスは当然とばかりに薄く笑って言った。
「今日は柚希さんの下僕記念日です。きちんと記録しておかなくてどうするんです？」
「やっ……そ、んな事……っ」
身を悶えさせながら顔を赤くした柚希に、
「おや、お気に召しませんかー？　先日、澪さまが刃更さんにされている時の様子を撮ったものを見せてあげたでしょう。あれと同じ事ですよ。柚希さんが澪さまに負けたくないと言うから、私としては気を利かせたつもりだったんですけど」
まあ、
「嫌なら止めましょうか。澪さまもまだ、撮られる事には抵抗があるみたいですしね」
「と、当然でしょ！　大体、こないだのはアンタが黙って隠し撮りしてたんじゃない！」
少し離れた場所から、顔を真っ赤にした澪が叫ぶと、
「ですから――撮られる事を承知で耐えられれば、澪さまに勝てるんじゃないですか」
「そんな……っ」「っ……」
何という暴論。淫魔であるサキュバスの理屈に、澪に続いて柚希も愕然となる。
「別に私はどちらでも良いですよ。このまま撮影を続けても、ここで止めてしまっても。

無理強いするつもりはありません。そうやって無理矢理にでも柚希さんを屈服させるのは、主となる刃更さんのお仕事ですから」

「……っ」

挑発を含んだ万理亜の言葉に、柚希は俯せのまま唇を噛んだ。そんな柚希を見た万理亜は艶めかしい微笑を浮かべ、澪は柚希と同じ位に顔を赤くしながら固唾を呑んでいる。

だから、野中柚希は顔の前で両手をギュッと握って拳を作ると、

「……このまま、続けて」

絞り出すような声で言った。それは刃更と万理亜、二人を受け入れる言葉だ。

そして心の中で、自分自身に言い聞かせる。

……平気。この位、ウチだって平気やもん……っ。

大きくなってゆく催淫の感覚に躰を甘く震わせながら、野中柚希はそう強く想う。

いきなり澪がこれまでに達した回数に追い付く事は不可能でも、少しでも距離を縮めてみせる。そんな柚希に、背後の刃更が優しく諭すような声で、

「お前がそうしたいのなら良いけど……無理して我慢だけはするなよ」

そう言って、再び柚希の尻を滅茶苦茶に揉み始めた。その途端、

「――――」

あっという間に柚希は二度目の絶頂へと押し上げられ――自分が何回達したかすぐに解らなくなった。とてもじゃないが数えていられなかった。形が変わる位に尻を滅茶苦茶にされ、その度に柚希は全身を絶頂にわななかせながら嬌声を上げる。そして、

……っ……腰が、勝手に……っ。

連続で来る激しい快感に、尻を灼けそうな位に熱くした柚希は、己の腰が勝手に揺らめいている事に気が付いた。こんなにも恥ずかしいのに。手の痕が付いてしまう位にキツく揉まれているのに。その淫らな姿を、ビデオにまで撮られてしまっているというのに。

刃更の五指が食い込む度に、野中柚希はいやらしく尻を振ってしまうのを止められない。

「ふふ、素敵ですよ柚希さん……いつもの知的で冷静な姿も綺麗ですけど、圧倒的な快楽を前にそうして女の本能を抑えられなくなっている今の貴女はもっと魅力的です」

耳元で万理亜の声がした。聞こえてはいる。しかし柚希は、万理亜が何を言っているのかよく理解できなかった。今の柚希には、刃更と刃更がくれる快楽だけが全てだった。

それは激しい快楽に何も考えられなくなった女の反応だ。野中柚希の躰がリアルタイムで大人になってゆく。何も知らなかった少女から、甘い快楽の味を知る女へと。

――だが、それでも柚希は耐え続けた。澪に負けたくない。その強固な想いだけが柚希の意識を必死に繋ぎ止めていた。すると、

「頑固ですね……あんまり時間を掛けると、躰に負担が掛かってしまうというのに」

やれやれと万理亜が言って、

「刃更さん、少し体勢を変えてみてはいかがでしょう？　そうやって後ろから攻めるのも趣があって良いですが、そのままでは刃更さんが見えません。主となる対象が視界に入った方が、柚希さんも屈服しやすいと思いますよ」

「……そうかもな」

万理亜が発したアドバイスに頷きを返した刃更に、柚希は体勢を変えさせられた。刃更の膝の上に、向かい合う体勢で乗せられたのだ。

縋り付く対象を得られた柚希は、刃更の首の後ろへ両手を回して抱き付いた。そして、

「っ……刃更お願い、お尻ばっかりじゃなくて……」

全身を包む甘い熱に朦朧としながら、野中柚希は懇願した。自分は少しでも澪に追い付きたいのだ。それは何も条件や関係だけでなく、胸のサイズも含まれている。

「……お前がそうして欲しいなら」

すると刃更は左の手で柚希の尻を揉んだまま、右の手で柚希のビスチェの肩紐を片方ずつずり下ろし、露わになったこちらの左胸を揉み始めた。さらに、すっかり張り詰めた右胸の先端を口に含まれ、柚希は刃更に甘く吸われる。

「やっ……んっ、やあぁっ、んううっ、ふぁぁぁぁぁっ！」

何度も絶頂を刻まれ限界まで敏感になっていた柚希の躰は、胸への愛撫も先刻とは比べものにならないほど感じるようになっていた。全身が震えるような快感が来て、

「っ……刃更っ、刃更ぁ……っ」

もうすぐ幼馴染から主へと変わる相手の名前を呼ぶと、こちらの胸を揉んでいた手が優しく柚希の背中を撫でてくれた。そしてその優しい手が下がってゆき、再び両手が柚希の尻を包み込むと、ふと腰の後ろからショーツの中へと滑り込んできた。完全な不意打ちで、これまで布地越しに感じていた刃更の手の感触を、生の尻で感じてしまった柚希は、

「――――――」

さらに一段上の快感に襲われ、刃更の膝の上で激しく躰を跳ねさせた。その拍子に柚希の尻を摑んでいた刃更の両手もまた左右に振られて――図らずも柚希のショーツが刃更の手首の辺りまで下がり、柚希の尻が露わになってしまう。

「っ？　刃更っ……駄目、見えちゃう――」

堪らず柚希が切羽詰まった声を上げた時、信じられない事が起こった。

柚希の姿が、リビングのテレビに映し出されたのだ。

「っ――――？」

ギョッとなりながら見ると、万理亜がビデオカメラとテレビをケーブルで繋いでいて、

「――これでもまだ我慢できますかね？」

笑みと共にそう言って、リモコンでテレビのボリュームを一気に上げた。

……そんなっ！

もう声は上げられない。そんな事をしたら、確実に外にまで声が響いてしまう。一気に追い詰められた柚希は、慌てて眼の前の刃更を見た。すると咎めるような瞳で万理亜を見ていた刃更は、それでも柚希の尻から手を離そうとしない。

そして嘆息を一つすると、刃更の瞳がこちらを真っ向から見据えた。

その口元がそっと動く――ゴメンな、と。

そして柚希の柔肉を鷲摑みにした刃更は、そのまま両手を横に広げ始めた。

『っ……刃更、何を――っ？』

とっさに声を上げた柚希は、テレビから漏れる大音量の己の声に慌てて息を呑む。

その躊躇が、柚希の抵抗を終わらせる事になった。眼を見開くがもう遅い。

熱く火照った尻たぶを一気に限界まで広げられ――次の瞬間、

「――――」

刃更の膝の上でいやらしく尻を割られながら、野中柚希は極まった嬌声を上げた。

万理亜がリモコンの消音ボタンで、テレビの音量をゼロにしたのは全くの同時だった。

柚希が刃更の配下になった瞬間を、その場に同席していた成瀬澪は目の当たりにした。

これまで自分がする事はあっても、他の女の子が絶頂する所を見るのは初めてだった。

……凄、い……。

刃更の腕の中で、柚希はすっかり陶酔を深めた顔で絶頂の余韻に浸っている。ショーツを太股まで下ろし、半脱ぎ状態のビスチェから胸を露出させているその姿は、余りにも艶めかしくて。澪は思わず、口の中に溜まっていたとろりとした唾液を呑み込む。

……あたしも、あんな風だったんだ……。

初めて主従契約を結んだ時や、ふとした瞬間に呪いが発動して楽にして貰った時。

そして先日の勇者の一族との戦いの前や、きっと今日の学校のシャワールームでも。

「っ――――」

その時の自分と刃更を思い出し、澪は全身をぶるっと震わせた。躰は凄く火照っているのに、一瞬だけ気持ちの良い寒気を得たのだ。すると、

「……澪さま、大丈夫ですかー？」「え……？」

ふと万理亜に尋ねられ、澪はようやく自分が床にへたり込んでいる事に気が付いた。柚希が刃更の手で配下へと変えられてゆく姿を見て、いつの間にか腰を抜かしてしまっていた。そんなこちらへ万理亜はふっと笑みを浮かべると、

「ほら澪さま……ご覧下さい」

柚希を見るように促してくる。するとそれまで焦点の合っていなかった柚希の瞳が、徐々に定まってきて——やがて正気の色を取り戻した。そして、

「刃更——…」

そう呟いて刃更の顔を見上げた瞬間——柚希と刃更の全身が光に包まれた。そして柚希の首に浮かんでいた主従契約の呪いの痣が、僅かに赤みがかったものへと変化する。

「え……？　あれってまさか……」

「はい。主従契約を結ぶと同時に強化まで行なえるなんて、柚希さんは将来有望です」

そう嬉しそうに言いながら、万理亜は刃更と柚希の下へと歩み寄ってゆく。

——だが、澪はその後を追う事ができなかった。その理由は、何も腰が抜けていたからだけではない。初めての契約の時に強化まで行なうなんて——無論、澪の時は逆転して発動したトラブルがあり、刃更の事を想う余裕がなかったりもした。だが、自分にはできなかった事を柚希にやられてしまったような気がして、

「……っ」

刃更や万理亜と話している柚希を見ながら、澪は静かに悔しさを得る。

だが、主従契約の呪いが発動する事はなかった。それは刃更に対して後ろめたい感情を抱いている訳ではないから――今の澪が抱いているのは、柚希に対する悔しさだ。すると、

「――では刃更さん。お風呂の準備が整ってますので、柚希さんを入れてあげましょう」

「えっ……俺がかっ？」

「何を焦ってるんです？　このままでは柚希さんは風邪を引いてしまいますし、柚希さんをこんな風にしたのは刃更さんじゃないですか。全く……刃更さんは鬼畜スイッチが入っている時はあんなに凄いのに、素に戻ると純情全開とか二度美味しくって困ります」

万理亜はふふっと笑って、

「めでたく主従契約を結んだんですから、最後までちゃんと面倒を見てあげるのが主の務めというものですよ。しかも戦闘力の強化まで同時にしちゃったんです。先日の澪さまの時は、ちゃんと身体を温めてあげたじゃないですか」

「……そうなの？」

と、柚希に問われた万理亜は頷く。

「ええ。それはもう、刃更さんは優しく澪さまを温めてあげていました」

「……」

「……えっと、柚希？」

むーんと表情を少しだけ不機嫌にした柚希に、恐る恐る刃更が問うと、

「……入れて」「え……っと、それって」「ウチもお風呂に入れて」「……はい」

刃更は仕方ないとばかりに頷くと、柚希を抱き上げて歩き出す。そこへ、

「さあ澪さま、いつまで惚けてるんです？　一緒にお風呂に行きますよ？」

「え――……？　な、何であたしまで野中と一緒に……」

驚いてとっさに問い掛けたこちらに、万理亜はチッチッと人差し指を振って、

「柚希さんですよ、澪さま。柚希さんも、これからは澪さまを名前で呼んで下さい。お二人はもう同じ、刃更さんの下僕仲間なんですから、よそよそしいのは変ですよ」

「いや、下僕仲間って言い方はどうなんだ……」

思わず顔を顰める刃更とは対照的に、

「……」「……」

床の澪と刃更に抱きかかえられた柚希は、互いに顔を見合わせた。そして、

「……良いわ。柚希と一緒に入る」「私も……澪と一緒に入って構わない」

そう言って、相手の呼び方を改めたものにする。それは主である刃更を通して、澪と柚

# プロローグ　嘲笑う因縁の眼差し

## 1

――その部屋は、女の甘い声で満ちていた。
薄闇が下りた室内に生まれる嬌声――それが甘い吐息と共に部屋中を包んでゆく。
広い空間独特の残響は、女に己自身の嬌声を聞かせて興奮させるための舞台装置だ。
響く女の声に言語としての意味はない。だがその声音には、明確な色がはっきりと込められている。陶酔にも似た感情――性的な快楽に、己の全てを委ねた者が得られる悦びだ。
「……」
そんな部屋の中へ、静かに足を踏み入れた者が居た。薄暗い室内に浮かび上がるシルエットには、女の肢体が持つ曲線を見る事ができた。そして女の影は、暗い壁際からゆっく

希の関係が確かに変化した瞬間だった。

だから――それから澪達は、四人で一緒に脱衣所に入った。

こちらに背中を向けて服を脱いでゆく刃更の傍で、恥ずかしげに自身もまた服を脱いでゆきながら、成瀬澪は改めて今の自分が置かれた状況を思う。

八ヶ月前。まだ両親と平穏に暮らしていた頃と比べて――否、両親を殺されて、万理亜から自分が先代魔王の娘だったと知らされた直後と比べてもそうだ。

あの頃の自分からは、とても考えられないような心境と環境の変化が起きている。

元勇者の一族の刃更や迅と家族になって。刃更とは主従契約を結んで、彼の配下にまでなって。肌を見られたり触れられたりするようになって、凄く恥ずかしいけどそれを受け入れられるようになって。そして現役の勇者の一族である柚希とも一緒に暮らすようになって、そして今――とうとう彼女と刃更の配下仲間になった。

かつての自分からは信じられないような変貌を成瀬澪は遂げていた。

――けれど、不思議と嫌な気持ちはしなかった。澪を支えてくれたり恥ずかしい姿を見せても受け入れてくれる家族や、遠慮なく本音をぶつけ合える相手。そうした仲間が居てくれる事が素直に嬉しかった。そんな中、刃更の存在は日増しに大きくなっているが、

……でも。

滔はふと、隣で鼻歌交じりに服を脱いでゆく万理亜を見た

「？　どうしました、滔さま？」「……ううん、何でもない」

キョトンとする万理亜に、滔はそう言って小さく首を横に振った。

自分達の中心に居るのは刃更だが、その関係を取り持ってくれているのは万理亜だ。

刃更に正体をバラした後も、迎えに来てくれた彼との同居生活に戻る事を躊躇っていた滔を万理亜が戻ろうと説得してくれて、だからこそ滔は一緒に帰る事ができた。

それだけではない。両親が殺されてから今までの間にも、万理亜の明るさや賑やかさのお陰で精神的に助けられた事は何度もある。今の滔が居るのは、万理亜のお陰なのだ。

柚希の主従契約の件だって、やり方が少々サキュバスの本能に忠実すぎるし、刃更の下僕仲間という呼び方については聞き捨てならないが、それでも名前で呼び合うように言ってくる辺り、きっと滔に友人を作ろうとしてくれているのだろう。現魔王派の魔族にいつ襲われるか解らないため、仲の良い友人を作る事を躊躇っていた滔にとって、勇者の一族でありながら力を貸してくれる柚希のような存在は、それこそ刃更以上に稀少だ。

……まあ。

刃更に対して無駄に積極的な態度を発揮するのだけは、何とかして貰いたいが。それでも、隣で慣れないビスチェの紐を解くのに苦労している友人の少女を見て、

「やってあげる……」

下着姿になった澪は彼女の後ろへと回り、脱ぐのを手伝ってあげた。すると、

「……ありがとう」

柚希は少しだけ頬を赤く染めて礼を口にした。それは、都心の繁華街で服を買うのを手伝ってあげた時よりも、少しだけ距離が近付いたような雰囲気で。いいよ、と澪は告げると、自身もまたブラとショーツを脱いで裸になり、二人共バスタオルを身体に巻いた。

「さあ、それでは今夜も楽しく裸のお付き合いと参りますよー！」

そう言って、まずは万理亜が一番乗りで浴室へと入り、その後に続いて澪と柚希が入ろうとして——しかし二人で足を止めた。裸になって腰にタオルを巻いた刃更が、未だにこちらを振り返られずに居たからだ。だから澪と柚希は頷き合うと、

「へ――お、おいお前らっ!?」「いいから、早く来なさいよ」「刃更、覚悟を決めて」

二人で挟むように刃更の腕を捕まえて、強引に浴室の中へと引っ張っていった。

## 2

——そんな東城家の様子を、夜の空から視ている者が居た。

月光を背に受けながら東城家を視下ろしていたのは、美貌の女魔族――ゼストだ。

「……」

ゼストは無言で、東城家の様子を窺っていた。

昨夜はマリアの仕掛けた競争に乗せられ、競泳水着姿で刃更に滅茶苦茶にされてしまった澪と柚希は、今夜はお返しとばかりに競い合うように刃更の身体を洗ってあげていた。

――しかし、澪と柚希が仲睦まじくしていたのは僅かな時間だけだった。

程なくしてまず柚希がバスタオルをはだけて自分の身体を使って刃更を洗い始め、それを見た澪が負けじとバスタオルを取り去り、胸を泡まみれにして刃更にくっついて。そのまま両者が、どんどんヒートアップしていったからだ。刃更が慌てて湯船に避難すると、今度はそれをチャンスとばかりにマリアが刃更へと抱き付いて――いよいよ東城家の浴室は混乱の坩堝に陥った。そんな騒がしい刃更達を見ても、

「……」

それでもゼストは無言のまま、無表情に東城家の様子を見詰めていた。だが――たとえ言葉は無くても、たとえ表情が無くても、だからといって感情が無い訳ではなかった。

澪や柚希と同じように、ゼストにも主が居る。

だがゼストと彼女達とでは、余りにも大きな違いがあるような気がした。

今の自分に不服や不満はない――澪や柚希を羨ましいとも思わない。

……ですが。

もし、ゾルギアではなく刃更が主だったとしたら。自分はもっと豊かな感情を得ていたのだろうか。何もかもを当たり前として淡々と受け入れるのではなく、澪や柚希のように時に笑い、時に怒り、時に泣き、時に喜ぶような――そんな自分になっていたのだろうか。

「……あり得ない話です」

ゼストは眼を伏せながらそう静かに結論付けると、もう一度最後に成瀬澪を見た。刃更に抱き付いているマリアを引き剝がそうと、澪と柚希まで同時にお湯の中へと乗り込んだため、浴槽の中で四人がとんでもない事になっている。

そんな状態にも拘わらず、澪の顔にはどこか笑顔にも似た表情があった。だが、

「――その笑顔で居られるのは、あと少しだけです」

冷たくそう告げると、雲が一瞬だけ月光を遮った。

そして再び満月が姿を現した時はもう、ゼストの姿はそこにはなかった。

満月が浮かぶ夜の空を、静かに秋の風だけが吹き抜けてゆく。

# 3

柚希との主従契約を結んだ三日後――東城刃更は聖ヶ坂学園の保健室を訪れていた。
うっかり突き指をしてしまったのだ。
患部は左手の薬指。体育のバスケットボールの授業中の事だった。
――いつもの刃更なら、授業中に怪我を負うような事はない。
ただ、今日の授業は男子も女子も体育館で行なわれた。内容は男子がバスケ、そして女子がバレーボールだ。そして刃更達のクラスには、他のクラスにはない役得があった。
澪と柚希――熱狂的なファンを抱える聖ヶ坂学園でも指折りの美少女達の存在だ。
プール授業は男女別々に行なわれるため、二人の水着姿を見る事は叶わない。だが、同じ体育館で授業がある時は、体操服姿ならば拝む事ができる。そして運動をしている女の子の姿は、それこそ思春期の男子には眼福とも言うべき対象だった。体操服になって肌の露出が増えた上に、運動を行なえば女子の身体の柔らかさを目の当たりにできる。男子がやっても何の面白みもない柔軟体操も、女子がやれば驚く程に色っぽいのだ。よって柔軟体操から実際のゲームまで、澪と柚希はずっと男子達の注目の的だった

刃更はなるべくそちらを気にしないようにバスケのゲームに集中していたのだが、たまたま刃更の方へパスが飛んできたのと、柚希が上げたトスに添がアタックを決めた事で男子達が歓声を上げたタイミングが重なり、僅かに手の位置を狂わせてしまって　結果、数年ぶりの突き指をしてしまった。当たり所が悪かったのか、痛みがそれなりにあったため、体育教師に症状を申告し、授業の途中で保健室へとやって来た刃更は、

「……っ」

現在、キャスター付きの丸椅子に座りながら僅かに緊張を得ていた。

その原因は、刃更の正面――すぐ眼の前にあった。聖ヶ坂学園が誇る美しすぎる養護教諭、長谷川千里が刃更の指の手当てをしてくれているのだが、

……駄目だ、見ちまう……。

刃更はつい、チラチラと長谷川を見てしまっていた。今日の長谷川は、白衣の下にワインレッドのブラウスを着ているのだが、あの添をも上回る豊満な胸が窮屈なのか、ボタンは上から三つ目まで開いてしまっている。そんな長谷川がこちらを手当てするために前傾姿勢になれば、谷間が見えるどころか今にも胸が零れ落ちそうになっており、

「……ん？　どうかしたか？」「い、いえ。何でも……」

ふとこちらの視線を感じた長谷川に問われ、刃更は即座に視線を横へと逸らした。

――アイドル級のルックスを持つ澪や柚希、万理亜と一緒に暮らしているのだ。魅力的な女の子への耐性は、それなりに自分は持っている筈だと刃更は思う。

だが、そんな刃更であっても、長谷川の美しさは鮮烈の一語に尽きる。ただそこに居るだけなのに、思わず息を呑んでしまいそうな位に匂い立つ大人の女の色気。それは、主従契約の催淫の呪いが発動している澪や柚希に勝るとも劣らないものだ。これでもし、長谷川が催淫の呪いに掛かったりしたら、一体どうなってしまうのだろう。

……って、何を考えてるんだ俺は……っ。

おかしな方向へ行きかけた思考を刃更が振り払うと、

「――良し、終わったぞ。これでもう大丈夫だ」

包帯を終えた長谷川が、刃更の指から手を離して姿勢を戻すと、ほとんど恋人のような距離にまで接近していた二人の身体が、教師と生徒に相応しい距離へ戻った。

「関節の捻挫だな。包帯で固定しておいたから、三日はそのままの状態で様子を見ろ。後は、なるべく患部に負担を掛けないよう安静にする事だ。靱帯に損傷はないから恐らくそれで回復すると思うが、もし痛みが酷くなったらすぐに私の所へ来い」

「？　病院に行くんじゃなくて、先生の所へですか？」

養護教諭が行なうのは、基本的には応急手当てだ。本格的な治療は行なわない。よっ

て、もし症状が改善されないようなら、改めて整形外科に掛かるべきだろう。ところが、

「心配はいらない。その辺の医者などより、私の方がよっぽど腕は立つからな。お前に施したそれも、ただの手当てではなくきちんとした治療になっている」

だから、と長谷川。こちらへと向き直り、しっかりと見据える瞳で、

「お前の面倒は私が見る――解ったな？」「……は、はい。解りました」

妙な迫力に気圧されるように刃更が頷くと、長谷川は満足そうに「よし」と言って、

「――しかし、これまで成瀬の付き添いで何度かここには来ていたが、東城自身が怪我をして保健室を使うのは今回が初めてか」

「ああ、確かにそうですね……」

元勇者の一族である刃更は、幼い頃から不用意な怪我や風邪などは避けるように徹底的に叩き込まれて育っている。今回のようなケースはあくまで例外だ。

「だがその割に、お前とは随分と話をしている印象があるな」

「まあ……学校の外でも会う機会とかありましたし」

先日、滝川と一緒に行った焼肉屋で刃更は長谷川と遭遇し、成り行きからテーブルを共にしている。学校内のような互いの立場や節度が何よりも重視される場所ではなく、プライベートな空間を一緒にしたのだ。親近感を得るようになるのは当然だろう。

「そういえば……あの店の勘定を持たない代わりに、お前とは今度どこかに食事へ行く約束をしていたな。覚えているか？」

「え、ええ……まあ。でも、そんなに気にして貰わなくて良いですよ。先生にはあの店の帰り道に、色々と相談に乗って貰いましたし……」

「それとこれとは話が別だ。生徒の悩みを聞くのは、教師としてごく当たり前の事にすぎない。大体、お前の方から私に言ったんじゃないか。『今度、私のオススメの店に連れて行け』と。そして私は『解った』と言ったぞ。あれは私とお前がした約束だろう？」

それとも、と長谷川は珍しく少し拗ねたような表情になって、

「東城……お前は、私と食事に行くのが嫌なのか？」「いや、そんな事は全然……！」

滅相もないと刃更は首を横に振った。

「……本当か？」「ええ勿論。何を食べられるのか凄く楽しみです」

掛け値なしにそう思う。長谷川と食事など光栄すぎる話だ。すると、

「そうか……うん、なら良いんだ。では、楽しみにしていろ」

長谷川はそう言うと、ふふっと楽しそうに笑った。その表情に、刃更は驚きと共に感慨を覚える。いつもはクールで大人な長谷川にも、こんな女の子のような表情をする事があるとは。そんな長谷川のレア顔に、刃更が自分だけが得られた幸運を想っていると、

りと部屋の中央へと歩いてゆく。すると女である事しか解らなかった影が、美しい女魔族のそれへと変貌していった――ゼストという名の女魔族のものへと。

ゼストの視線の先――彼女が向かう先は、薄闇の中でそこだけが明るい。それは豪奢な装飾があしらわれた、天蓋付きの巨大なベッドだった。そしてベッドではひとりの男性高位魔族に、何人もの女魔族達がいやらしい下着姿で群がるように身を寄せている。

そんな中、室内に甘い声を響かせていたのは、高位魔族の腰の上に向かい合うようにして跨がり、自分からいやらしく腰を振っている女魔族だった。

「っ……あぁっ、ん、ふぅ……はぁん、んっ、ゾルギア様ぁ……」

快楽に陶酔を深めている彼女の表情は淫らで、瞳は完全にとろけきっている。さらにその背後には別の女魔族がおり、腰を振っている女魔族の胸を揉んでいた。彼女がより大きな快感を得るために――何よりも、主である高位魔族を楽しませるために。

その様子を、ベッドから少し離れた場所で足を止めたゼストは黙って見つめていた。

――そして腰を振っていた女魔族が、躰を反らしながら一際大きな嬌声を上げた。

達した余韻で恍惚の声を上げる彼女を、他の女達がゾルギアの上からゆっくりと退かし、そして入れ替わりで二名程が彼の太股の間――その根元へと顔を寄せると、途端に淫らな水音が生まれ始める。そんな中、女達に淫らな奉仕をさせていたゾルギアがふと、

「……そういえば。父親が家を空けている間、成瀬や下の妹の面倒をきちんと見てやれるか随分と気にしていたが、少しは気持ちに余裕はできたか？」

「……そうですね」

重い沈黙を挟んでから、刃更は短い答えを返した。すると長谷川は嘆息して、

「やれやれ。その様子だと、私が相談に乗っても余り効果はなかったようだな」

「そんな事は……先生に相談に乗って貰えたお陰で、色々と助かりました」

嘘じゃない。刃更が高志達との戦いを乗り切れたのは、あの時に長谷川から教わったアドバイスや心構えによって助けられたという面は少なからずある。

ただ――あの時にはまだ直面していなかった大きな障害が立ちはだかってきたのだ、

ふと校内にチャイムが鳴り響いた。四時限目の授業が終わり昼休みになったのだ。

早く体育館に戻るべきなのに、刃更は動けなかった、

確かに――ゾルギアが動いていると滝川に教えられてから刃更は気を張り続けている。

不安を拭えないのは、やはり敵が圧倒的な力を持つ高位魔族だという事が大きい、

五年前の悲劇を繰り返すような事だけは絶対に避けなければならない。あの悲劇の場で多くの大切なものを失わせた自分が、それでも生き延びた事に意味があるとするなら。それはきっと、もう二度と大切なものを失わせないためなのだ――だから、

「東城――余り自分で自分を追い詰めるな」「え……？」

突然の指摘に刃更が呆然と顔を上げると、そこには長谷川の静かな表情があって、

「問題が生じる事を恐れてあれこれと思いを巡らせているようだが、どれだけ万全を期し、万難を排しても、それでも問題というものは起きてしまう事があるものだ」

「それはっ……、そうですけど。でも……だからって諦める訳にはいかない事もあるじゃないですか」

と、苦い表情で刃更が反論すると、長谷川は落ち着いた表情で、

「早とちりするな。誰も諦めろとは言っていない。だが、人は追い込まれると、それだけ視野が狭くなる……そうしたら、本当に大切なものを見落としてしまったりするんだよ。確かに、問題が起きないように気を付ける事は間違いじゃない。だが、その事ばかりに気を遣って消耗していたら、いざ問題が起きてしまった時に対処できなくなるぞ」

こちらに諭す口調で言ってくる。

「真面目なお前の事だ。気を抜いてリラックスしろと言ってもできないだろう。だから気を張り続けても構わないが、ならばせめて問題が起きた時にどう対処するかを考えておけ」

「問題が起きてしまった時の事を……」

「そうだ。物事には残念ながら取り返しの付かない事はあるが、それでも取り返せるもの

は意外とある。そして未然に防がなければいけないのは、絶対に取り返しの付かない事だ。それ以外は、問題が起きても状況を取り戻したり改善する方法を考えておけば良い」

忘れるな。

「どんな時でも道は閉ざされていない。選択肢は残されている。だが心を追い詰められた者にそれを見付ける事は難しいんだよ。諦めなければ道は開けるという言葉があるが、あれは間違いだ。たとえ諦めなくても、闇雲に探していては道や答えなんか見つからない。絶対にあると信じて探して、そして初めて見つかるんだ。それでも、望んだ通りの結果が得られない時はある。だから、その状況を想定して対策を練っておけ。限界まで追い詰められてしまった時に、それがお前やお前の大切な存在を助ける選択肢や道になる」

だから、

「見失うなよ東城――お前とお前の大切な存在を守る事のできる道を」

長谷川がくれた言葉に、刃更はギュッと拳を握りしめた。そして決意を込めて頷く。

「はい……」

そうだ。敵の強大さに呑まれて、自分はすっかり冷静さを失っていた。

もう一度、落ち着いて考えてみよう。きっと道はある。

成瀬澪を、成瀬万理亜を、野中柚希を守れる方法が必ず。すると、

「うん。少しは良い顔になったな……教師らしい事ができたようで何よりだ」
「はい……ありがとうございました。じゃあ先生、俺そろそろ戻ります」
ふっと笑う長谷川に、刃更はぺこっと頭を下げると立ち上がった。
そして保健室を出ようと扉を開けたところで、
「――ああ、そうだ東城」
と呼び掛けが来た
「その包帯だが　私が良いと言うまで絶対に外すな」
「？　それは良いですけど、でも絶対に外すなって、俺の突き指って一体結構酷いんですか？」
包帯が巻かれた左手の薬指を見詰める刃更に、長谷川は静かな表情で、
「いいや。だが――念には念を入れておいた方が良いからな」
「……はあ、解りました」
疑問は残るが、専門家の長谷川が言う事だ。従っておいた方が良いだろう。
刃更は了承の頷きを返すと、「ありがとうございました」と礼を述べて保健室を出た
念のため体育館に戻ったが、既に授業はおろか片付けまでもが終了していた。

当然クラスの皆の姿もない。

「……そりゃ、そうだよな」

嘆息しながら呟くと、東城刃更はその足で男子更衣室へと向かった。

――予想はしていたが、やはり更衣室にも誰もいなかった。

現在は昼休み。待ちに待った昼食の時間である。おまけに先程まで体育で身体を動かしていたともなれば、もはやその空腹っぷりは待ったなしの状態だ。弁当派ではない者達は速攻で着替えを済ませ、一目散に購買や食堂へと向かった事だろう。

「まあ滝川が休みだし、こっちの方が気楽で良いか……」

刃更は更衣室の奥へと向かい、自分のロッカーの扉を開けると体操服を脱ぎ始める。

「やっぱり、滝川以外にもツルめる奴が居た方が良いよなぁ……」

すっかり滝川に頼り切りになってしまっている現状を想い、刃更は呟いた。

……でも。

澪が狙われている今の状況で、彼女を守らなければいけない自分が下手に仲の良い友人を作れば、何かの拍子にその人物を危険に巻き込んでしまいかねない。不用意に一般の学生や教師を巻き込まないためには、今はまず眼の前の事に集中しなくては。

――ゾルギアは、必ず澪を狙ってくるのだから。

そう刃更が想いを強くしていた時――ふと男子更衣室の扉が開けられた。自分以外にも、誰か着替え遅れていた者がいたのだろうか。そんな何気ない考えと共に扉の方を見て、

「えっ――？」

やって来た人物を見て思わず刃更は固まった。あろう事か、男子更衣室の中に体操服姿の女子が入って来ていた。しかも澪や柚希ではない。無論、万理亜でもなかった。

「あの……東城君、少し良いかな？」

そう言って、後ろ手に扉を閉めて男子更衣室の中へと入って来たのは、刃更と同じクラスの女子――澪が仲良くしている友人の一人、榊千佳だった。

「さ、榊……な、何だ？　どうしたっ？」

突然の榊の登場に刃更は慌てふためき、取り敢えず急いで制服のズボンを穿いた。

「ゴメンね、こんな所に入って来ちゃって……東城君と話がしたかったんだけど、体育の途中で保健室に行ったきり帰って来なかったから」

そう言って、ゆっくりとこちらへ近付いてくる。

「話って……な、何もこんな所じゃなくて、教室に戻ってからじゃ駄目だったのかっ？」

「うん……他の人には聞かれたくなくて。特に、成瀬さんと野中さんには――」

「澪と柚希には……？」

「……あのね、東城君」

怪訝に問う刃更に、すぐ眼の前までやって来た榊は声を真剣なものに変えて言った。

「東城君って……成瀬さんか野中さんと付き合ってるの？」「――――え？」

透き通るような声の問い掛けに、刃更が思わず訊き返すと、

「だって……東城君、二人と一緒に暮らしているんでしょ？」

「いや、それはそうだけど……だからって、俺達は別に付き合ってるって訳じゃ」

澪や柚希が魅力的なのは間違いない。一緒に暮らしている中でドキドキする瞬間は多いし、主従契約の呪いを解いて楽にしてやる時なんかは、思わず理性が飛んでしまいそうにもなる。それでも、自分達は付き合っているかと訊かれれば、答えはノーだ。

……だって、そうだろ。

幾ら状況的に仕方がないとはいえ、あんな呪いで縛られている今の自分達を恋愛関係とは言えない。強制的な屈服と、圧倒的な快楽によって生まれた感情の中には、間違いなく錯覚が混じってしまうものだ。それを恋愛に含めるのは余りにも卑怯すぎる。

「……そっか。まだ付き合ってないんだ」

すると榊は静かな声で呟くと、

「じゃあ――私、まだチャンスはあるって思って良いのかな？」

そう言うなり、榊は刃更へと身を寄せてきた。正面から触れる柔らかい身体の感触に、

「っ――さ、榊っ!?」

慌てた声を上げる刃更に、榊は顔を僅かに赤くしながら、

「そ、そんなに恥ずかしそうにしないで。東城君はこういう事……慣れてるんでしょ？」

「なっ、慣れてなんかいないって！　誰だ、そんな事を言った奴はっ!?」

「だ、だって成瀬さんが言ってたもん……東城君ってどんな人って訊いたら、悪い奴じゃないけど、でもロクでなしだって。凄くエッチな事を何度もされかけてるって」

「っ……み、澪がそう言ってたのか？」

伸が良いとはいえ、澪が榊や相川に主従契約や催淫の呪いの事を話すとは思えない。

だとしたら、話したのは呪い以外のハプニングについてだろうか。ファミレスの出会いからこっち、刃更は催淫の呪い以外でも、澪の恥ずかしい姿を見てしまっている。しかし、

「……いや、澪がそう言う気持ちも解るんだけどさ。でも、これまで別々に生活していた奴が一緒に暮らすようになったら、思いもしないような事故とか起こるんだって！」

「でも見た事があるんでしょ……成瀬さんの裸」

すると榊は、刃更へとさらに身体を密着させながら、

「ねえ東城君、知ってる？　成瀬さんほど凄くないけど……私も胸、結構あるんだよ？」

「し、知る訳ないだろ、そんなのっ！」
叫ぶように言ったこちらに、
「じゃあ――教えてあげるね」
そう榊が言った瞬間――横へ回られた刃更は、二人一緒に床へと転がっていた。
「なっ……？　い、今どうやって倒れたんだ俺達っ？」
「前に授業で習った護身術。本当は一緒に倒れちゃ駄目なんだけど、今は良いよね」
腰の上に馬乗りになりながら言ってくる榊に、
……クソっ、どっちだ!?
東城刃更は判断を迷わせる。クラスメイト相手に油断していたとはいえ、こんな体勢に持ち込まれるなんて。刃更が最初に思ったのは、榊が何者かに操られている危険性だ。だが、榊の恋愛感情が偽りだと断じるのは性急すぎる　授業で護身術を習ったという話も、あながちあり得ない話ではないからだ。よって、もしこれが榊自身の意思によるものなら、まずは冷静になるように説き伏せれば良い
――だが、もし何者かに操られていたら？　そんな彼女をこのまま放っておく訳にはいかない。そうした思いから、とっさに動けずにいる刃更に対し、
「お願い東城君……私の事も見て」

榊は恥ずかしげに言って、ゆっくりと覆い被さってきた。刃更の上半身に、榊の柔らかい胸が押し付けられる――その時、不意に男子更衣室の扉が開けられた。

「っ――――!?」

東城刃更は刹那に焦燥を得る。榊が操られているにせよ、操られていないにせよ、この状態を第三者に目撃されるのはまずい。校内での不純異性交遊がどうこうの問題ではなく、今の榊の姿を他の男子に見られたら、一番傷付く事になるのは榊だ。

だが――そんな刃更の危惧は外れる事になった。

扉を開けてこちらを見た人物の方が、榊よりもずっとショックを受けていたからだ。

「――――」

扉の方を見た東城刃更の視線の先に居たのは――呆然と立ち尽くす二人の少女。

成瀬澪と野中柚希だった。

野中柚希が、澪と共に男子更衣室を訪れたのは刃更を捜しての事だった。

――最近の刃更は、どこか余裕を欠いている。

こちらを心配させないよう自然に振る舞ってはいるが、それでも柚希には解るのだ。恐

「――ゼストか」

視線をこちらに向けぬまま、しかし名を呼ぶ事でゼストの存在の認識を口にした。

「はい。ただいま戻りました閣下。ウィルベルトの娘　成瀬澪の現在の状況について、一通りの調べが済みました。ご報告させていただいても宜しいでしょうか？」

「勿論だ……そのために、わざわざお前を行かせたんだからな」

主の許可に、ゼストは右の手の中にあった水晶球に意識を集中する事で応えた。すると水晶球が光を発し、ゾルギアの視線の先　ベッドの正面の壁一面に、巨大な映像を照射する。それはゼストが人間界で撮ってきた、先代魔王の一人娘の現在の姿だった。

「ふむ……どうやらこの半年の間に、また一段と美しくなったようだな」

映像の中の澪の姿を値踏みするように見て、ゾルギアが満足そうに眼を細める。

すると、映像が戦闘中のものになった。そして勇者の一族の青年が放った、霊槍による強力な一撃――それが澪を呑み込む直前、澪と万理亜を包むように円球状の重力子フィールドが展開。生じた断層障壁により、霊槍の衝撃から二人を守っていた。

「まだ完全な覚醒とまでは至らないが、それでもその兆しは見えてきているようだな」

「あれがウィルベルト様が遺した力なのですか……？」

初めて目の当たりにした光景に、下着姿の女魔族の一人が問うと、

らくは澪も気付いているだろう。刃更は――ここ最近ずっと思い詰めていた。
だから体育の途中で保健室に行ったきり戻って来ない刃更に、徐々に柚希と澪は不安になっていった。また先日のように、万理亜におかしな場所へ連れ回されている可能性を見過ごせなかったのもあるが、それ以上に刃更の事が心配だったのである。
刃更の居場所はすぐ解った。主従契約による相手の位置特定を使用したからだ。
しかし男子更衣室の前に来ると、中から聞こえてきたのは刃更と榊の会話だった。
青ざめた顔でそれを聞いていた澪がゆっくりと扉を開け――そして、柚希と澪が想像していた通りの光景がそこにあった。そして、
「……っ！」
澪が泣きそうな顔で男子更衣室の前から走り去った。刃更と仲の良い友人が床で抱き合っていたのだ。ショックだったに違いない。そして野中柚希もまた、弾かれたように駆け出す。ただし澪とは異なる方向へ――男子更衣室の中へと向かって。
「ゆ、柚希……っ!?」「――――」
困惑する刃更を無視して、柚希は霊刀『咲耶』を右の手に具現化。そのまま一気に距離を詰めると、刃更の上に覆い被さっている榊へ向かって『咲耶』を横薙ぎに一閃した。
だが――榊の方が早かった。刃更の上に乗っていた状態から、とっさの跳躍で『咲耶』

の一撃を逃れると、そのまま宙で縦の回転を一つ入れて離れた場所へと着地し、

「――もう、乱暴だなぁ野中さん。いきなり斬り掛かってくるなんて酷いよ」

「榊……お前……？」

呆然と身を起こした刃更を背中に庇うようにして前に立ち、野中柚希は淡々と告げる。

「……やっぱり操られてる」

冷静さを失って走り去った澪とは対照的に、柚希は平静を保っていた。

柚希が放ったのは、精霊を宿した霊刀による峰打ちだった。柚希が認めば、『咲耶』は榊を必要以上に傷付ける事なく、彼女を操っている魔法や薬の効果などの元凶を断てるだから、もし榊が何者かに操られていても傷付けずに済むし、逆に正常ならばそもそも霊刀を見る事はできない。

――そして今、榊は常人ではあり得ない反応速度で柚希の斬撃を避け、「斬り掛かるなんて酷い」と言ってきた。ならば――もう答えは出ているだろう。

「……悪い柚希、助かった。でも、いきなり斬り付けるなんて……もし榊が操られていなかったら一体どうするつもりだったんだ？」

「別にどうもしない。その時は少し痛い目に遭って貰ってただけ」

淡々と柚希は告げる。何故ならば、

「彼女は扉の鍵どころか、扉自体を僅かに開けたままこんな真似をしてた、もし正気だったとしたら、わざと他の人に見られようとしていた事になる」

そんな事をして刃更に迷惑を掛けるのは許せないし、それに榊は澪の仲の良い友人だろう。たとえ澪の刃更に対する恋心を知らなかったとしても、友人が同居している家族同然の相手と学校であんな真似をした挙げ句、それを他人に知られようとするような卑怯な女など、クラスメイトであっても許すつもりは柚希にはない。よって操られているにせよ操られていないにせよ、柚希が榊に容赦する必要はなかったのだ。すると、

「ねえ、先刻から二人で何の話をしているの……？」

それに、と榊は少し拗ねたように、

「東城君……告白した私を放って、後から来た野中さんと話すのは酷くないかな」

「……それはお前が正気だったらの話だよ榊」

と刃更は真剣な表情で言うと、柚希の耳元で囁くように、

「悪い柚希……ここを任せて良いか？　榊が操られていると解った以上、敵が澪を狙って仕掛けてきた可能性が高い」

「私もそう思う。早く追い掛けた方が良い　―廊下を走って行く時、澪の首に主従契約の痣が浮かんでた。あの状態で敵と遭ったら、戦う事も逃げる事もできない」

恐らく刃更と榊の衝撃の光景を目の当たりにして、嫉妬を抑えられなかったのだろう。

同じ契約を結んでいる柚希に呪いが発動しなかったのは、勇者の一族として常に状況を冷静に判断する修行を積んでいたのと、仲良くしていた澪と違い、柚希にとって榊はただのクラスメイトでしかなかったからだ。もし、刃更と抱き合っていたのが澪や万理亜、胡桃だったりしたら、今頃は柚希も呪いで動けなくなっていたかもしれない。

「刃更、ここは私一人で平気。自分が操られている事すら解っていない彼女からは、きっと有益な情報は聞き出せない。ここで二人で足止めされたら敵の思う壺」

「助かる――でも無茶はするなよ」

そう言って刃更は開いたままのロッカーに手を入れると、シャツを羽織りながら更衣室の外へと駆けて行った。それを見た榊が、残念そうに嘆息する。

「あーあ。やっぱり成瀬さんが大事なのか……私達、フラれちゃったね野中さん」

「別に。フラれたのは貴女だけ。私がここに残ったのは、貴女の事を任されたから」

そう言って、柚希が『咲耶』を構え直した時だった。

「――おや委員長。男子更衣室で刃物なんか持って、警察でも呼ばれたいの？」

ふと背後から声がした。首から上だけで振り向けば、そこにはクラスメイトの女子がいる。榊千佳と同じく、澪と仲の良い女子――相川志保だ。

この状況で笑みを浮かべ、さらには『咲耶』を見る事ができている相川の登場に、

「……何故ここに」

野中柚希は、解せないと眉を顰めた。相川も操られている事に驚きはない。榊が操られていたのだ。同じく仲の良い相川も操られている可能性は充分に考えられた。だが、

……成瀬さんを連れ去る役は、彼女じゃなかった……？

だとしたら、一体誰が――不意に嫌な予感が膨れ上がり、

「……予定を変更する」

ポツリと柚希は呟いた。

「え？　野中さん、なあに？」「どうしたの？　聞こえないよ委員長」

こちらを前後で挟みながら笑う榊と相川に、

「刃更には無茶をするなと言われた……でも無理」

身体の前に立てるように構えた『咲耶』の力を解放しながら、野中柚希は宣言する。

「貴女達の相手をしている暇はなくなった――だから、この一撃で終わらせる」

そして神速で『咲耶』を一閃した瞬間、男子更衣室を真っ白な閃光が駆け抜けた。

# 4

刃更と榊が、男子更衣室の床であられもない体勢で居たのを目撃した後。
その場を走り去った成瀬澪は、ただひたすらに走り続けていた。
上履きのまま校舎を飛び出し、目指すのは誰もいない場所。
今の自分を他人に見られる事のない、一人きりになれる場所だ。
身体の奥底からは、震えそうな程の甘い感覚が湧き上がってきていた。いつもなら、その場にへたり込み、刃更に楽にして貰わなければおかしくなっているような状態。
だが――成瀬澪はその感覚に耐え、一心不乱に疾走を続けていた。
先ほど見た、刃更と榊の姿が脳裏に焼き付いて離れないのだ。
「何で……っ」
一体、どうしてあんな状況になっていたのだろう。
なるべく誰とでも分け隔てなく接しながらも、魔族に纏わる問題に巻き込まないよう、深く関わるような友人を作る事を避けていた澪にとって、榊と相川は特別な存在だ。
――無論、澪と刃更は仮初めの兄妹として同居しているだけで、付き合っている訳では

ない。それでも共に生活する内に、段々と本物の家族になれてきていると思う。

だけど、榊が刃更に恋愛感情を抱いているのなら、それを止める権利は澪にはない。

澪と刃更の間にあるのは「恋愛関係」ではない――直面している危機に対抗するために結ばれた、戦略的な「主従関係」なのだから。それなのに、

「何で……っ」

都立公園に隣接する別の公園へ駆け込んだ澪は、敷地内に設けられている無人のテニスコートへと辿り着くと、縋り付くようにして外周を囲んでいるフェンスを摑んだ。

解らなかった。どうして自分はこんなに苦しいのか。こんなにも胸が張り裂けそうなのか。これまでにも、柚希や万理亜が刃更に対して何かした事はある。だが、そうした現場を目撃しても、自分は怒りこそすれここまで動揺した事はなかった筈だ。

「なのにっ……どうしてよ……っ」

吐き出すような声で、澪は苦しげに喘いだ。刃更も榊も悪くないと頭では解っている筈なのに、グチャグチャになった感情は当たり前の思考すら許してくれなくて。

間違っていると解っているのに。いけないと解っているのに。

刃更に裏切られたと感じてしまう自分を止められない。

そんな今の澪に主従契約は残酷で――膨れ上がった不審が主に対する裏切りとなり、か

つてないレベルの強烈な呪いが澪を襲う。それは耐えきれるようなものではなくて、

「あ……」

一瞬で意識を朦朧とさせた澪は、そのままふらりと横へ倒れてゆく。だが、

「――――」

そんな澪を、優しく抱き留める存在があった。

……だ、れ……？

刃吏とは異なる温もりに、薄れゆく意識の中で成瀬澪は自分を支えた者を見た。

最早まともに思考を働かせる事のできない状態で、それでもぼんやりとその名を呟いた。

「――――万、理亜……」「……はい。澪さま……もう大丈夫です」

すると万理亜は、静かな声で言ってくる。

そして澪が安堵を得て気を失う瞬間――最後にふと声が聞こえた。

それは万理亜とは異なる、ひどく冷たい女性の声で、

「安心して眠りなさい成瀬澪。貴女のその苦しみは――ゾルギア様が癒してくれます」

その言葉の意味を理解する間もなく、成瀬澪の意識は闇に呑み込まれた。

東城刃更がその現場に辿り着いたのは、澪が意識を失ってすぐのタイミングだった。

澪を追って男子更衣室を出ると、一切の躊躇をせずに主従契約の位置特定を使用し、微塵も迷う事なくこの公園を目指したからだ。

そして視線の先にある光景を目の当たりにし、東城刃更はとっさに叫んだ。

「――澪っ、万理亜っ！」

気を失っている澪と、そんな澪を抱きかかえている万理亜。その傍らにはもうひとり、初めて見る美しい魔族の女が立っていた。万理亜が澪を保護し、傍にいる女魔族は穏健派が寄越した仲間という可能性はゼロではない。だが、家で留守番をしていた筈の万理亜がそう都合良く澪を保護できるだろうか。そして、このタイミングで都合良く仲間の魔族の応援など来るだろうか。そんな筈はないだろう――残念ながら自分達を取り巻く現状は、そのような楽観的な考えが許されるようなものではない。何よりこちらの呼び掛けに対し、

「……刃更さん」

万理亜が見せた反応は、悲しげな呟きと表情だった。よって刃更が事態の全てを確信した瞬間――万理亜達の周囲に変化が生じた。空間が揺らぎ始めたのだ。

……させるかっ！

あちらは澪を攫って逃げるつもりだ。

地面を駆ける速度をさらに加速させ、東城刃更は一瞬でトップスピードへと至った。
己を一陣の風に変え、そのまま、気に距離を詰めると、
「おおおおおおおおおおおおおおおおっ！」
具現化したブリュンヒルドで、敵と思しき女魔族へと斬り掛かる。
駆け抜けざまに繰り出したのは横薙ぎの剣閃。
だがそれは虚空を斬るだけで終わった。向こうの空間転移の方が僅かに早かった。
「クソっ……このまま逃がしてたまるか！」
表情を厳しいものにした刃更は、即座に滞の位置特定を行なう。ところが、
「――っ、そんな……!?」
脳裏に思い浮かべれば、すぐに感じる事ができる筈の滞の居場所が掴めなかった。同じく主従契約を結んでいる柚希がこちらへ向かっているのは解るのに、連れ去られた滞の居場所だけがまるで霧が掛かったように感じる事ができなかった。それでも、
「っ、まだだ……！」
ギリっと奥歯を噛み締めると、東城刃更は声を絞り出すようにして言った。この程度で諦めてたまるものか――刃更はそう己を強く奮い立たせる。
そうだ。諦めるにはまだ早い。

「そうだ。陛下も、穏健派の連中も、誰もがあの力を欲している……あの娘の中に眠る先代魔王の力を手に入れられれば、魔界の勢力図を塗り替える事ができるだろうからな」

すると別の女魔族が、しな垂れ掛かるようにふふっと笑って、

「ならば――この娘を手に入れれば、ゾルギア様が魔界の頂点に立てるのですね」

「そういう事になるな……――ん？」

笑みを深めていたゾルギアが、ふと切り替わった映像に眉を顰めた。

現れたのは、陶酔を深めた澪の顔のアップだった。それがズームアウトすると、同居している青年の膝の上で、メープルシロップ塗れになった胸を滅茶苦茶に揉まれ、腰をいやらしくくねらせている澪の姿が映し出される。それから青年の膝の上で向かい合う体勢になった澪は、自分から彼の首に両手を回してさらに乱れた。青年に、極限まで張り詰めた胸の先を吸われたのだ。そして程なく澪と青年の身体が光に包まれ――直後、澪の首に浮かんでいた首輪のような痣の色が、それまでより僅かに赤みを帯びた色へと変化する。

「ほお……主従契約の強化か。報告は受けていたが、サキュバスの催淫の呪いを受け入れて主従の絆を強められるとは……この分なら、どうやら想像以上に楽しめそうだ。これはいよいよ、何があろうと手に入れねばならないな」

たとえそれが、現魔王に背く事になろうとも。そこでゾルギアは「だが」と言って、

成瀬澪を守り抜くという自分の決意は。誓いにも似た確かな想いは。
たとえどんな絶望的な状況だろうと、決して諦めて良いようなものではないのだから。

## 5

両親が殺された時の事を、成瀬澪ははっきりと覚えている。
惨劇の現場には澪も居て、その残酷な凶行の一部始終を自分の眼で見ていたからだ。
成瀬家を襲った悲劇は、家族の団欒の最中――夕食後の時間に発生した。
リビングで寛いでいた澪達の前に、突如として虚空から魔族の男が現れたのだ。
当時の澪は、まだ魔族に纏わる一切の知識を持っていなかった。そのためとっさに事態を理解できず、ただ呆然とする事しかできなかった。
――だが両親は違った。
現れた魔族の男が澪を狙っていると確信し、即座に戦いを仕掛けたのである。
先に殺されたのは、どんな時でも澪に優しかった父だった。
とっさに双剣を具現化して斬り掛かったが、男が生み出した闇色に輝く刃が煌めいたと思ったら、父の両手は宙を舞っていて　絶叫と共に鮮血が部屋中を紅に染めた。

それを見た母がこちらの肩を激しく揺さぶり、逃げるようにと叫んだが、しかし澪は動けなかった。眼の前で起きている惨劇はまるで異世界の出来事のようで、完全に現実感を喪失してしまっていた。そんな澪を逃がす時間を稼ごうと、両手を失った父が必死に男に立ち向かい――しかし男の手で顔を掴まれると、そのまま全身を内側から爆発させられ、リビング中に血液と内臓を撒き散らして絶命した。

絶望的な実力差。だが母は諦めなかった――男に勝つ事ではなく、澪を守る事をだ。

今の澪でも操りきれないかもしれないような超高温の紅蓮の炎を生み出すと、それを男に向かって迷う事なく解き放った。だが、男の力は残酷なまでに圧倒的だった。母が唱えた炎獄魔法をあっさりと弾き散らすと、お返しとばかりに黒い炎を生み出したのだ。

あっという間だった。全身を地獄の炎に包まれて、母が焼き殺されたのは。

そして、父と母を殺した男がゆっくりと澪へと近付いてきて――そこから先の事を澪は覚えていない。余りの恐怖で気を失い、次に眼を覚ました時には澪は見慣れぬ廃工場にいて、傍らにはこれまで両親の親戚としか紹介されていなかった万理亜が居た。

そこでサキュバスの姿になった万理亜から、澪は己の全てを聞かされる事になって。

そして――この時から、成瀬澪の戦いは始まったのである。

――あれから半年以上の月日が流れたが、未だにあの日の事は夢に見る。

だが、それで良いと澪は思う。今の自分には必要だからだ。あの日の事を決して忘れないためには。燃えさかるような復讐の憎悪を、一時も絶やさぬようにするためには。

しかし――刃更や迅と出逢って、彼らと一緒に暮らし始めてからは、以前と比べて悪夢を見る回数は激減していた。両親の死後、遺言や遺産を管理した弁護士に騙されそうになったり、行く当てをなくして彷徨っていた夜の街で下心丸出しの男達に襲われ掛けた頃は、毎晩のように悪夢にうなされていたにも拘わらずだ。

――その理由を、成瀬澪は理解している。

復讐以外に全てを失くした自分に、新しい居場所が――家族ができたからだと。

……だけど。

それでも成瀬澪は忘れられない。両手を飛ばされた父の絶叫を。白を基調としていたリビングが凄惨な紅色に染まったのを。全身を燃やされた母の焼け焦げた匂いを。

あの日、自分の日常の全てを奪っていった惨劇と、その元凶であるあの男の顔を。

断じて許す事はできない。必ず両親の仇を討ってみせる。

もし生きるという事が、命を懸けた戦いなのだとしたら。

両親の復讐こそが、成瀬澪の生きる理由――命を懸けて戦う理由なのだから。

「ん……」

そして成瀬澪は、ゆっくりと眠りから目覚めた。澪の眼の前にあったのは見知らぬ光景
王城の謁見の間を思わせる、暗い石造りの広々とした空間だ。

「……ここは？」

自分が何故こんな場所に居るのか、澪はとっさに理解できなかった。眼の前の状況と己の思考の乖離に、どうやら自分が意識を失っていた事を理解。微睡みの残る思考で記憶を遡ると、一人きりで男子更衣室に居た刃更と榊の状況が思い出され——脳裏に蘇った衝撃に、澪は震えの走った己の身をとっさに抱こうとして、

「っ……——え？　な、何よこれっ？」

そこでようやく自分の状態に気が付いた。浅く広げた両の手を鎖によって背後の壁に繋がれ、磔のように拘束されている。鎖の長さに多少の余裕があるため、完全に身動きを封じられている訳ではない。だが、それでも身体の自由は完全に奪われていた。そして、

「——気が付いたようですね」

不意に意識の外から来た呼び掛けに、澪はハッと身を固くする。声がした方を見れば、そこには美しい女魔族が佇んでいた。こちらを見詰める彼女の瞳は吸い込まれそうなほど綺麗なのに、どこまでも冷たい色を湛えていた。そしてそれ以上に、

……コイツ、強い……っ。

そこに居る――ただそれだけなのに、そう確信できる程の存在感。
以前に戦った事のある白仮面や、早瀬高志と同等――否、それ以上かもしれない。
そして澪は、とっさに己の状況を理解した。見知らぬ場所で拘束され、見知らぬ女魔族が好意的とは思えない眼でこちらを見ていれば、判断材料は充分だ。
よって澪は完全に思い出す。刃更を捜して訪れた男子更衣室で見た光景に耐えきれなくなった自分は、発作的にその場から走り去り、そのまま学校を飛び出して、
「……そう。それで、あたしは公園で倒れて――そこをアンタに捕まったってわけね」
澪が女魔族をキッと睨み据えると、女魔族は冷たい瞳を湛えたまま言ってくる。
「理解が早いのですね。それにこの状況で取り乱さないとは、意外に肝も据わっている」
「お褒めに与り光栄だわ……アンタ達みたいな連中と戦っていくって決めたんだもの。何かで捕まる可能性くらい想定するわよ」
澪はフンと鼻を鳴らすと、眼の前の女魔族の正体を言い当てるように、
「アンタ――あたしの中にある先代魔王の力を欲しがっている、現魔王の配下ね？」
発したこちらの問い掛けに、
「――いいや、それは違うな」

ふと広い空間の奥――暗い闇の向こうから声がした。その声を聞いた瞬間、

「――――っ!?」

成瀬澪はとっさに息を呑んでいた。平静を保っていた鼓動が一気に跳ね上がる。

……今の声……まさかっ!?

信じられない想いで澪が暗い広間の奥を見ると、石畳を踏む硬質な音が響き始め、

「そこのゼストは、私にだけ忠誠を誓っている。そしてこの私は、確かにレオハルト陛下に仕える身ではあるが……陛下のようにウィルベルトの力のみを欲している訳ではない」

そして、闇の奥から笑みを含んだ声と共にひとりの男性魔族が姿を現した。

「――――――」

日の当たりにしたその顔に――その姿に、澪は自分の全身の血液が沸騰した気がした。

男が放つ圧力にも似たオーラは、眼の前の女魔族をも軽く上回るものだった。それは魔族の中でも選ばれた高位の者だけが備える事のできる強大な力だ。

もし普通の精神状態の時に相対していたら、澪は激しい恐怖に震える事しかできなかっただろう。

だが、今の澪が恐れを抱く事はなかった。

間違いない。絶対に間違いなかった。何があっても見間違う筈がない。

自分から平和な日常という幸せを――優しい両親を奪った、憎い仇の顔だけは。

「ゾル……ギア……っ、ゾルギアァァァァっ！」

澪は一瞬で激情を爆発させると、父が死に際に呼んだ仇の名を叫んでいた。

と同時、ガキンッと硬質な金属音が鳴り響く。ゾルギアへ向かって突っ込もうとした澪を、両腕を縛る鎖が石壁に繋ぎ止めたのだ。だが澪は止まらない。自分を拘束している鎖を引き千切るかのような勢いで、激しく全身を暴れさせる。

そんなこちらを楽しそうに見ながら、ゾルギアは澪へと近付いてくる。

「ほお……怒りに我を忘れた表情まで、こうも美しいとは。危険を冒してでも、お前を手に入れた甲斐があったというものだ」

「絶対に許さない……百回殺してやるっ、よくも――よくもお父さんとお母さんをっ！」

憎悪を剝き出しにしてぶつける澪に、

「お前のような女にここまで想われる事ができるとは、何とも心地良いものだな」

ゾルギアはまるで意に介する事なく冷笑を浮かべて、

「惜しい事をした……こんなに再会を喜んで貰えると解っていたら、あのゴミ共をもっと惨たらしく殺してやったものを」

「っ……自分が殺した相手をさらに貶めるなんて　――この下衆男っ！」

両親への侮辱に、荒ぶる感情を乱暴な言葉へと変えて叫ぶと、

「ふむ……どうやらお前は、その外見に相応しい言葉遣いを学ぶ必要があるようだな」

そう言った瞬間、ゾルギアの視線がカッと澪を射貫いた。それだけで、

「っ……？」

途端に澪は全身を硬直させ、言葉を失った。

……こ、声が。そんな、息まで……!?

ゾルギアが放った強烈なプレッシャーが澪から声を奪い、呼吸をもままならなくする。

「そうだ、それで良い……では、早速お前の教育を始めるとしようか」

顔を青ざめさせたこちらに、ゾルギアは満足そうに言いながら距離を詰めてきた。そして、いやらしい笑みと共に澪の肢体とその曲線を嘗めるように見てくる。

……やっ、コイツ……っ!?

即座にゾルギアの視線の意図を理解し、ゾッと背筋を凍らせた澪に、

「何も心配はいらない。お前の中にある激情も憎悪も、私が全て甘美な快楽に塗り替えてやろう。そして思い知るがいい。自分が本当に尽くすべき主が、一体誰なのかを」

ゾルギアは笑みと共に手を伸ばしてくる。

そして、その手が豊かな澪の胸へと制服の上から触れる、

「――お待ち下さい閣下」

その直前で、ゾルギアを制止する声があった――ゼストだ。

「彼女は東城刃更と主従契約を結び、既に戦闘力の強化を果たすレベルにまで絆を強めています。この状態で養父母の仇である閣下の陵辱を受ければ――たとえサキュバスの催淫であろうと、即死レベルの威力で呪いが発動してもおかしくありません」

「何を言っているゼスト。この屋敷全体を覆っている私の結界は、主従契約を遮断する事ができる。現に――私に捕まり、主の足手纏いになったこの状況でもなお、この娘は呪いに苦しむ事なく先程のような生意気な態度を取れていたではないか」

「発動するのが主従契約の呪いだけであれば、恐らく問題はないでしょう。ですが彼女の中には先代のウィルベルト陛下から受け継いだ力が眠っています」

と冷静な声でゼスト。

「片方だけならばまだしも――下手に刺激をして、主従契約の呪いとウィルベルトの力の暴走が同時に起こった場合、閣下の結界といえど抑えきれない可能性が出てまいります。最悪、折角手に入れた成瀬澪とウィルベルトの力の両方を失う事態になりかねないかと」

ゼストの言葉に、澪は納得する。刃更のお荷物になってしまっているこの状況で、自分に主従契約の呪いが発動しないのはおかしいと思っていたが、まさかそんなカラクリがあ

ったとは。すると、配下からの忠告を聞いたゾルギアはやや憮然としながら、

「……成る程。確かにお前の言う事も一理ある。良いだろう……ならばまず、ウィルベルトの力を抽出する事から始めるとしよう」

「お聞き入れいただき、ありがとうございます閣下。それでは――」

とゼストが言い掛けたところで、

「――ゾルギア様」

ふと、部屋の片隅から幼い声がした。その聞き覚えのある声に、

……え？

澪は一瞬だけ己の息苦しさを忘れ、思考が止まったかのような呆然を得る。信じられない想いで声のした方を見ると、そこには幼いサキュバスが立っていた。

万理亜だった。呆然を愕然へと変えた澪を、万理亜は無言で一瞥してくる。

「――――」

こちらを見る幼い瞳は、どこまでも冷たく無機質で――ゾルギアを「様」付けで呼んだ事実と併せて澪は理解する。公園で意識を失う寸前、ふと万理亜の声を聞いたような気がしていたのだが、どうやらあれは自分の聞き間違いではなかったらしい。そして、

……そう……そういう事だったのね……。

「私の獲物に、余りやりすぎた真似をされるのは少々気に食わんな……この小僧が、以前の報告にあった成瀬澪と同居を始めたという元勇者の一族の少年か？」

「はい……ジン・トージョーの一人息子のようです」

ゼストが口にした名に、ゾルギアはフンとつまらなそうに鼻を鳴らして、

「あの男か……だが今は息子達の傍を離れているのだろう？　ならば何の問題もあるまい。たとえ息子といえど、あの男と同等の力を持っているとも思えんしな」

「……ですが、ゾルギア様。この青年――実力こそ父親であるジン・トージョーには遠く及びませんが、俄に信じられないような能力を使う事ができるようです」

そう言って、ゼストは別の映像を見せた。かつての仲間の少女が放った風の魔法を、青年が繰り出した魔剣による斬撃が消し去った瞬間を記録したものだ。

「これは……斬撃で魔法を消し去ったのか？」

「恐らく。魔法を構成する魔力の残滓まで跡形もなく消し去る、完全な魔法消去です」

こちらの言葉に、ゾルギアは黙り込んだ。ゼストや周囲の他の女魔族達が見つめる中、

「……確か、成瀬澪は前に一度、ウィルベルトの力を暴走させた事があったな？」

「はい。前回の定期報告において、ラースが枢機院に対してそのように説明しています」

「報告書では暴走した力が解放される直前で収まったとあったが……もしそれが、先程の

唇をきつく噛み締める程に無念を滲ませながら、成瀬澪はようやく思い知る。

自分はずっと騙されていたのだと――誰よりも信じていた、この幼いサキュバスに。

そうして項垂れる澪を無視して、万理亜がゾルギアへと歩み寄ると、

「……何の用だ。お前には、別命あるまで待機しているように命じておいた筈だが？」

「はい。ですが、ゾルギア様に王城から至急の通信魔法が入りましたので、そのご報告に」

苛立ちを含んだ声で問うゾルギアに、万理亜は静かな声と共に水晶球を差し出した。

「王城からだと……？」

水晶球を受け取ったゾルギアはすぐに相手に気付いたらしく、無言で顔を顰めた。

すると水晶球が一瞬だけ光り――次の瞬間、

『……ゾルギア。聞こえるか？』

ふと男性の声が聞こえてくる。ゾルギアは声だけを畏まったものにして、

「はい、レオハルト陛下――聞こえております」

耳にしたその名に、澪はハッとなって息を呑んだ。

……陛下って、それじゃあ……？

もしかしたら――否、間違いない。この水晶球を通してゾルギアに語り掛けてきているのは、亡くなったという澪の父ウィルベルトの後に魔界のトップに立った現在の魔王だ。

『ゾルギア……今どこにいる？　そちらの様子が視えないが』

「陛下もご存じの通り、枢機院より下された決定に従い、私邸にて大人しく謹慎しております。どうやら現在、屋敷の周辺の魔力波が乱れているせいか、一部結界が不安定になっているようです。通信魔法の映像に乱れや障害があるのはそのせいかと」

しれっとゾルギアは言い放ち、

「――それよりも。この度の急なご連絡、一体どうなされたのです？」

己の仕えるEの真意を問う。すると、現魔王は静かな声で言った。

『人間界で、ウィルベルトの娘――成瀬澪の行方が摑めなくなったという連絡が入った。前の監視役であるお前の方で、何か知っている情報はないか？』

レオハルトからの問い掛けに、ゾルギアは思う――やはり情報が回ったか、と。だが、

「まさか……監視役を更迭されて以降、私は彼女には一切関わっておりません故」

ゾルギアは忠誠心のない顔で、声だけを従順なものにして言った。

『今回の件について何の関係もないと？』「はい。私の与り知らぬ事でございます」

屋敷を覆っている結界によって、通信魔法には魔力波のジャミングが掛かるため、こち

らの様子が向こうに知られる事はないし、滞の声は奪っている。念のためゼストに目配せをすると、忠実な彼女は左手の爪を鋭いものに変化させ、滞の首元に突き付けた。

これで暴れて鎖を鳴らされる事もなくなった――つまり何の問題もないという事だ。

だからゾルギアは堂々とシラを切った。すると程なくして、

『……そうか。解った。ならばその件については、監視役のラースに任せる事にしよう』

低い声でレオハルトが納得を告げてくる。ゾルギアは口元をニヤリとさせ、

「それでは陛下、ご用件はそれだけでしょうか……？」

『いいや、お前に少し頼みたい事ができた――今から王城の方へ来て貰いたい』

だが、レオハルトから予想外の言葉が来た事に、表情を怪訝にする。

「……これはまた突然のお話ですな。何かございましたか？」

『西域で、旧ディアボラ期の魔神戦争時代のものと思われる遺跡が見つかった。使える英霊や素体が眠っている可能性がある。これより視察へ向かうため、お前に同行を頼みたい』

「成る程　もし本当ならば大変な発見ですな。ですが、なぜ私を？」

謙遜を含んだ追従を口にするこちらに、

『ある者から、お前が適任だという進言を受けた。長命のお前は、当時を知る数少ない者のひとりであり、しかも古代魔法についての造詣も深いと』

「……それは、確かにそうではありますが」

『どうした――何か問題でもあるのか、ゾルギア？』

レオハルトの問い掛けに、ゾルギアは刹那に思考を迷わせた。ようやく滞を手に入れたのだ。一刻も早く彼女からウィルベルトの力を抽出してしまいたい。

……だが。

もしここで同行を渋って、おかしな疑念を抱かれでもしたらお終いだ。たとえレオハルトや枢機院の連中が動いたところで、この場所をすぐに見付けられるとは思えないが、もしそうなればウィルベルトの力の抽出までは行なえても、滞を魂レベルまで陵辱してこちらのものにするだけの時間は得られないかもしれない。だから、

「……いいえ陛下、かしこまりました。それでは、すぐに伺わせていただきます」

仕方なくゾルギアは了承し、そして通信魔法を切った。

「どうされますか、閣下？」

滞の首元に当てていた爪を元に戻しながら問い掛けてくるゼストに、

「若くても相手は魔王だ。行くしかないだろう……気は乗らないがな」

フンと忌々しげにゾルギアは吐き捨てた。

レオハルトの話では、こちらを推薦した者が居るという事だったが、

……さてはラースか。私が成瀬澪を攫った確証は得られてなかっただろうに、よくやる。まあ良いだろう、とゾルギアは笑った。どうやら自分は発掘された遺跡の事前調査のために呼ばれたらしい。だとしたら、早々に価値の有無を判断すれば、すぐに戻って来られる筈だ。だからゾルギアは壁に繋いでいる澪へ向き直ると、思い知らせる口調で言う。

冷たい笑みと共に、

「待っていろ――調査から戻り次第、心ゆくまでお前を私のものにしてやる」

## 6

澪を攫われた現場のテニスコートを離れた後。

柚希と合流した刃更は、操られていた榊や相川はやはり何も知らなかったと聞かされた。主従契約による位置特定でも澪の居場所を把握できないため、打つ手を失った形。

しかし――それはあくまで刃更と柚希だけでどうにかしようとした場合の話である。

澪を救い出すための道は、まだ完全に閉ざされてはいない。

だから刃更は、一人の青年への連絡を試みた――今日は学校を欠席していた滝川八尋だ。

――万理亜が敵と通じていた以上、全ての前提は覆る。滝川とは秘密裏の協力関係に

あったが、もしかしたらこちらを嵌めるためにそう見せかけていただけかもしれない。現に、滝川は三日前に隠れて万理亜と会っていた。おまけに今日このタイミングで学校を休んでいるのだ。無関係という事はないだろう。そのため、こちらの呼び掛けに応じてくれない可能性も少なくないと思っていたのだが、驚く事に滝川は刃更の電話に出てくれた。

そして現在――柚希を家に待機させた刃更は、一人で都立公園に広がる雑木林の中にいた。会っても構わないと言った滝川に対し、この場所を指定したのは刃更だ。そして、

「ったく……よりにもよってこの場所かよ。あんまり良い思い出ないんだよなぁ」

刃更の眼の前には、既にこちらの呼び掛けに応じて姿を現した滝川が立っている。

――で？　わざわざこんな所へ呼び出して、一体何の用だよバサっち」

「とぼけるな。澪の監視役のお前が、今の状況を知らない筈はないだろ」

苛立ちを込めて告げる刃更に、滝川は肩を竦める。

「そりゃ知ってるさ。だけどよ、聞きたい事があるってな話だったが、だとしたら少しばかり遅すぎるだろ」

「どういう意味だ……？」

「そのまんまの意味だよ。三日前に俺とマリアが会っていたのを、お前はその日で見た筈だ。あの時のあれは、全てに疑いを持つには充分な状況だったと思うがな」

「お前……俺が見ていた事に気付いていたのか？」
「ああ。あちこちヤバイ所に入り込んできたせいか、こう見えても自分への視線には敏感な質でね。てっきり問い詰めてきてくれるとばかり思っていたのに、お前はそれをしなかった。マリアを疑いたくないという想いから、アイツの言い訳を鵜呑みにしてな」
「じゃあ、やっぱり万理亜は……」
「ああそうだ――アイツはずっと、ゾルギアの命令に従って動いていた」
まだ希望を捨てきれずに居た刃更に、滝川の残酷な断言が放たれた。
だから刃更は唇をギュッと噛み締め、右の拳を痛い位に握りしめて問う。
「っ……教えてくれ滝川。万理亜は本当に穏健派が遣わした澪の護衛なのか？　一体どこまでが本当で　どこからが嘘だったんだ？」
「アイツが穏健派の遣わした成瀬の護衛ってのは本当さ。だが、今はゾルギアの命令で動いているのも本当だ。ちなみに、こないだの俺とマリアの密会な……実はあれ、俺から接触したんだ。久しぶりに学校に来たと思ったら、あちこちチョロチョロしてただろ。いよいよゾルギアが動き出す前兆かと思って、少しでもその牽制になればと思ってな」
「もしかして……お前と万理亜は、以前からの顔見知りだったりするのか？」
「まあな。だが、俺が本当は穏健派だって事をアイツは知らない。ゾルギアか奴の腹心か

ら、ゾルギアの後に現魔王派から派遣された成瀬の監視役って聞かされている位だろう。

一方で、ゾルギアがマリアを従わせるようになった表向きの理由は、緊急時に成瀬の即時確保を可能にするためで、この事については現魔王派の上層部も黙認している。成瀬に手を出そうとした事は許されないが、いざという時の布石として有効なのは確かだからな」

そして、と滝川。

「当然その情報は俺も知っている――だからそいつを逆手に取って、アイツに言ってやったのさ。お仕事ご苦労さんってな」

「……万理亜は何て答えたんだ？」

「別に。『どうも』ってだけさ。今回の件は言わばゾルギアの暴走だからな。アイツに、本当の事は何一つ言えやしねえよ」

そうだろ？

「ずっと一緒に暮らしていても、成瀬やバサっちに本当の事を言えなかったように」

滝川が口にした事実に、刃更は言葉もない。すると、

「ちなみにバサっち――お前、マリアの一番の望みって何か考えた事はあるか？」

「な、何だよ突然……？」

不意に問われ戸惑うこちらに、

「やっぱ知らないか……まあ、そうなんだろうな」
と嘆息してから、滝川が告げてくる。
「自分の立場や居場所を捨ててでも、命を懸けてでも譲れないような強い想いってのは、そう誰にでもあるようなものじゃない。ある日いきなり養父母を殺され、その仇に復讐しようと戦い続けている成瀬。勇者の一族としての使命よりも、バサっちを守る事を選んだ野中。そして勇者の一族では守れない成瀬や、自分のために一族の使命を捨ててくれた野中を守ると決めたバサっちなんかは、どちらかと言えば例外の部類なんだよ」
だが、
「バサっち達にあるのなら、マリアにもあったっておかしくはないだろう。成瀬からは事情を聞いていたし、野中は幼馴染だから何となく察する事はできていたかもしれない。なら何でお前は、マリアにはそういう事を訊いてやらなかったんだ？」
「それは……」
問われた刃更はとっさに言葉を失った。確かに自分は、万理亜のそうした望みについて知らない。特に考えた事もなかった。何故ならば、
「だって万理亜は……どこか危うい所がある澪や柚希と違って、いつも笑顔で楽しそうにしていて。おかしな悪戯とかはしても、どこか安心感があって――だから」

「――おいおいバサっち、勘弁してくれよ」

と呆れたように滝川。

「アイツは成瀬の護衛だぞ。自分の感情や望みを全て後回しにして、成瀬のために尽くすように躾けられている。そして本当の感情ってのは、何も無表情や無口でしか隠せない訳じゃない。笑顔だって立派な仮面の一つだろうが」

「……ああ」

滝川の言葉に、刃更はただ項垂れる事しかできない。すると滝川はやれやれと、

「別に責めてる訳じゃねえよ。真実をひた隠しにしていたのはマリアだ。バサっちが気付けなかったからといって、それを気に病む必要はない」

けどな、

「もし、もう少しでもバサっちがマリアの事を考えてやっていたら、こうなる前に辿り着けていたかもしれないとは思うぜ……アイツが一人で抱え込んでいた真実に」

「っ……いつからだ、一体いつから万理亜は……」

この最悪の状況を生んだ種は、一体いつ蒔かれていたのだろうか。すると、

「バサっちを騙していた事なら最初からだ。バサっちが初めて成瀬と共にマリアとファミレスで会った時には、アイツはもうとっくにゾルギアの命令を受けていた」

ような無意識下での発動とは異なる完全な暴走だったとしたら。覚醒前の成瀬澪に、その状態から自力で脱せたとは思えん。或いは――」

「――はい。この青年が、あの能力で成瀬澪を助けたという事は考えられます」

「面白い……もしそれが本当なら、実に興味深い話ではないか。魔界中が手に入れようとしている先代魔王の力を宿した少女と、そんな先代魔王の強大な力を消し去る事ができる能力を持つ少年が共に居るという訳だ。成る程、戦神の息子は伊達ではないという事か。――この少年の能力について他に知っている者は？」

「ラースです。この戦闘を私と共に視ていました。しかし今回の定期報告でも、前回同様この青年の能力に関する記述は一切行なっておりません」

ラースの報告書にあったのは、ゼストが別件で成瀬澪の状況を確認していた事や、前回の報告を受けて枢機院が派遣したヴァルガが独断専行の末に、霊槍使いの勇者の一族によって倒された事。そして、そんな勇者の一族達との戦いを澪達が切り抜けた事だけだ。

この青年の消去技については一切記されていない。恐らく、ラースもまた何かを企んでいるのだろう。大戦時に、部隊を共にした戦友だったという事で、若き現魔王から厚い信頼を得て現在の地位まで上り詰め、成瀬澪の監視役まで任されているそうだが――その裏で、どこかしら怪しい動きをしている節がある。するとゾルギアが笑みと共に、

「違う……万理亜がいつから俺を騙していたかなんて、そんな事はどうでも良い。問題なのは、万理亜がいつからゾルギアに従っていたかだ」

さらりと真実を告げてくる滝川に、刃更は首を横に振って、

「前にゾルギアは澪を手に入れようとして、そのために邪魔なアイツの養父母を殺したが、万理亜に澪を連れて逃げられたせいで失敗したんだよな？　だが高位魔族のゾルギアなら、そもそも澪を連れて逃げようとする万理亜を始末し、そのまま澪を手に入れる事は容易だった筈だ。だが、それをしなかったって事は――」

「奴にはその必要がなかった。何せマリアは、前々からゾルギアの――」

「――いいや、それはあり得ない。そもそも澪の中に眠るウィルベルトの力を欲していたのはゾルギアだけじゃない。ウィルベルトの後に立った現在の魔王もそうだ。強引にゾルギアが澪を手に入れようとすれば間違いなく問題になるし、現にそうなって監視役をお前と交代させられた。そして澪には近付かないように命令までされてしまっている」

刃更は言葉を紡ぎながら、己の推理を急速に組み立ててゆく。

万理亜の事を想い、彼女の心を苦しめていた原因を見出してゆく。

「そうだ……そのリスクを、当のゾルギアが理解していなかったとは思えない。もし万理亜が最初からゾルギアの配下だったとしたら、澪が養父母を殺されたあの日に全てが終わ

っていた筈だ。澪の養父母を殺すような真似をすればアイツに近付けなくなる……いや、下手をすれば重い処罰を受けていたかもしれないのに、自分の配下が傍に居るからといってわざわざ澪を見逃す理由はないんだからな」

「……成る程な」

と、刃更の推測を黙って聞いていた滝川が楽しそうに笑った。

「俺の正体を見破った時といい……こういう時の推理力は大したもんだ」

その言葉が、刃更の推測が間違っていない事を伝えてくる。だから刃更は、

「恐らく……いや、間違いなくゾルギアは秘密裏に事を運ぼうとした筈だ。誰にも解らないように澪の養父母や万理亜を始末して、澪を手に入れる筈だった。それでも澪を手に入れられなかったのは、きっと何か予想外の事態が起きたからだ。だから澪の養父母を殺した件が露見してしまい、監視役の任を解かれて更迭される羽目になった」

よって、

「もしゾルギアが万理亜を従えられるようになったとしたら、その後の筈だ――滝川」

ようやく東城刃更は、最初に発した己の問い掛けの真実を見付けた。

それはきっと、成瀬万理亜の悲劇の始まり。

告げる。

「万理亜は――ゾルギアに人質か何か、弱みを握られているんだな？」

こちらの発した問い掛けに、滝川はフッと笑うと両手を軽く広げて、

「ご名答だ。マリアに成瀬を連れて逃げられたゾルギアは、成瀬の監視役の任を解かれて魔界へ戻ると、すぐにマリアの家族を狙ってな。捕まっているのはどうやらマリアの妹らしい。後はお定まりってヤツだ。ゾルギアが今度こそ成瀬を手に入れられるよう、奴から色々と指示を出されていたようだぜ。ちなみにバサっち……今にして思うと、マリアの言動にどこか不自然な点があったりするんじゃないか？」

「それじゃあ……まさか、俺と澪の主従契約が逆転して発動したあのトラブルも？」

ハッとなって問う刃更に、滝川は「ああ」と頷いて、

「あれもゾルギアが、マリアにわざとやらせた事だ。前に話した事があるだろ？　主従契約の呪いにわざとサキュバスの催淫特性を付加し、主以外の奴が貞操を奪う事で最大の裏切りを与えて壊れるまで快楽を与えるってヤツさ。バサっちに忠誠を誓っている成瀬を犯せば、成瀬に発動する主従契約の催淫の呪いは絶大だ。それこそ一発で成瀬を底なしの快楽へ堕としちまう事ができる――恐らく今頃はもう」

「っ――――」

刃更は思わず息を呑んで身を硬くした。とっさに脳裏に思い浮かんだのは最悪の事態。

最初は激しく抵抗していた澪が、ゾルギアに無理やり犯されてゆく内に、やがて最大の威力で発動した催淫の呪いに抗えなくなり、いつしか快楽に堕ちて自分からゾルギアを求めてしまうようになってしまうというもの。しかし、

「まあ、ゾルギアも成瀬の中にあるウィルベルトの力を欲しがっているから、すぐにおかしな真似はしないと思うがな」

「……っ」

滝川に気休めのように言われ、刃更は表情を苦いものにする。確かに滝川の言うように猶予はあるかもしれないが、最悪の事態は恐らくもう眼の前に迫っている。

だから――東城刃更はもう、己の感情を抑えられなかった。

「何で言ってくれなかったんだ……万理亜も。お前もっ！　そうしたら、ここまで最悪な状況にならずに済んだかもしれないのに！」

湧き上がる激情を滝川に叩きつける。すると、

「おいおいバサっち、無茶を言うなよ。マリアは人質を取られてたんだぜ。それに俺だって、事前にお前さんにこの事を伝えられる訳ないだろ。バサっちの性格なら、どうせ事情

を知ったらマリアを助けようと躍起になって動いた筈だ。そんな目立つ真似をされたら、どこから情報が漏れたか現魔王派に調べられて、あっという間に俺はお終いだよ」

「だったら、万理亜が人質を取られた事が判明した時点で、どうして穏健派の魔族達は応援を寄越すとか、もっと早く手を打たなかったんだよっ!?」

すると滝川は、思わず刃更が耳を疑うような事を言い放った。

「そりゃ簡単だ　そのままにしておけって命令が、穏健派の上から出てるんだよ」

「なっ……何だよ、それ……どうしてっ？」

俄には信じられないようなその言葉に、困惑を露わにして刃更が問う。すると、

「派閥としては力を失ってきてはいるが、それでも穏健派は未だに魔界の一大勢力だ。当然ながら内部も一枚岩って訳じゃない」

「滞を毛嫌いしている連中が居るっていう事か？」

「いや……成瀬の事を嫌ってる奴なんていない。何せ先代のウィルベルト陛下の娘なんだからな。だがひとり――ちょっと厄介な方が成瀬を疎ましく思っているんだよ」

「……厄介な方？」

「現在の穏健派のトップだ。死んだウィルベルト陛下の兄君、ラムサス様だよ。この方がまあ頑固でな……自分を差し置いて弟に魔王の座に就かれたのが悔しかったのかは知らな

いが、どうやら成瀬がお気に召さないらしい。他のお偉方がどれだけ成瀬をもっと大切に扱うべきと訴えても、全く耳を貸さないからな。先代魔王の娘に最低限の護衛しか付けようとしないのも、全部その方の命令なんだよ」

「……そいつは」

と底冷えするほど低い声で刃更。

「そいつは滔を見捨てるつもりなのか？　護衛は万理亜とお前にだけさせて、万理亜の家族が人質に取られている事を知っても、何もせず黙って見ているつもりなのか？」

「さてな……まあでも、何も手を打たなかったって事はないと思うぜ？　人質の捜索については色々とやっていたみたいだし、それに――マリアを護衛に選んだ時、わざわざアイツに切り札を持たせたって話だしな」

「切り札……？　この状況を打開できるようなものなのか？」

「いや、そういう類いのものじゃねえよ。あくまで成瀬の護衛としての切り札さ」

と滝川。

「そいつを使えば、マリアは戦闘力を飛躍的に上昇させられるらしい……バサっちや成瀬、野中は勿論、この俺よりも強いレベルにまでな。それこそ、こないだのバサっちの幼馴染達との戦闘なんざ、アイツ一人であっさり片付けられるレベルらしいぜ。まあ、流石

に色々と制限があるらしいし、無闇やたらと使えはしないみたいだけどな」

「万理亜が、そんな力を……？」

「ああ。まあ俺は実際に見た訳じゃねえけど、恐らく嘘じゃないと思うぜ。何せ、既にもう一回使ってその力は実証済みな訳だしな」

「それって、まさか――」

「そうだ　―ゾルギアから成瀬を守る時に、一回使っているらしい。とはいえ、成瀬は両親を殺されたショックで意識を失っていただろうから、その時のマリアがどんなだったのかは見ていないだろうけどな」

そこまでを言うと、滝川はやれやれと言った感じで、

「けど、たとえどれだけ強力な切り札だろうと、ここまで事態が動いちまっている今となっては、人質を取られているマリアに期待はできない。お陰でこっちはこれから、現魔王派に悟られないようにしながら成瀬を助け出さなきゃいけなくなっちまった」

まあ、

「こういう時のために、ゾルギアのアジトの目星は既に付けてあるんだけどな」

「――本当かっ!?」

刃更がハッと顔色を変えて尋ねた。

「教えてくれ滝川っ！　主従契約の位置特定でも、澪の居場所が解らないんだ！」
「そりゃゾルギアの結界の仕業だな。奴は主従契約のスペシャリストだ。それ位の事なら造作もないだろう」
だが、と滝川。
「ちょっと込み入った事情があってな……すぐに動くような迂闊な真似はできないんだ」
頬を掻きながら軽い口調で言われ、東城刃更は感情を爆発させる。
「何を暢気なこと言ってんだ滝川っ！　澪がゾルギアに捕まったんだぞ!?　万理亜や人質だって、目的を達したゾルギアがそのまま生かしておくとは思えない。万理亜と同じ澪の護衛役のお前が、足踏みするような理由なんて――」
滝川の胸倉を摑み、そのまま語気を強めて言おうとして　しかしできなかった。
脇腹に、滝川が放った右の膝を叩き込まれたからだ。
「ガ、ハッ　――ぐ……あっ」
「おお、悪いなバサっち……実は俺、野郎に胸倉を摑まれると反射的に膝を入れちまうクセがあるんだ。大丈夫か、結構苦しそうだぞ――っと」
そこで滝川が大きく背後へ飛び退った。脇腹への強烈な膝を受けて呼吸がままならない状態の刃更が、それでもブリュンヒルドを具現化し、真横へと一閃したからだ。命を懸

けた戦いではないため剣の峰は返しているが、それでも当たれば無傷ではすまない。だが、

「あんまカッカすんなって……これでも俺は、ゾルギアや奴の配下の厄介な処女魔族とかの目を盗んで、お前さんに協力してきたつもりだぜ？」

余裕の回避で着地と共にしれっと言い放ってくる滝川が、ふと視線を真剣なものにして、

「でもな――お前らと同じで、俺にも譲れないものはあるんだよ。その辺の事情をだな」

「……っ、そんなのは、俺だって同じだ……！」

刃更は苦しい表情のまま、それでも滝川を睨んで、

「滝川……俺はお前が一体何を望んで、澪や万理亜を危険に晒したのかは知らない。そしてお前が、アイツらよりも自分の望みを優先しようとするのを否定する権利もない」

だけど、

「俺は澪と万理亜の兄貴だ。アイツらを助けるために他に方法がない以上、お前が教えてくれないなら――お前を叩き伏せてでも、あの二人の居場所を教えて貰うぞ」

「あらら。こんな所に呼び出すから何かと思えば、まさか力ずくでもって奴か？　参ったね。折角手を結べるような、仲の良い奴ができたと思ったのに……短い友情だったな」

滝川は苦笑すると、その笑みと声を凄惨なものに変えて、

「とはいえ確認しておきたいんだが　その口ぶりだと、まるで俺に勝てるみたいだな。

まさかとは思うがお前……俺が前回の時みたいに、また花を持たせてやるとでも思ってるんじゃないだろうな――ええ東城刃更？」

そう獰猛に言うと同時、滝川を中心に暗黒のオーラが解き放たれた。

「っ……！」

とっさに刃更がブリュンヒルドを構えた瞬間、滝川の姿は既に眼の前から消えており、

「――遅えよ」

いきなり真後ろからの声と同時に、衝撃が来る。

「ぐあああああああぁぁぁぁぁぁぁっ!?」

スピードタイプのこちらの反応を超えて、一瞬で後ろを取られた。

間違いない。やはり先日の滝川は力を抑えていたのだ。

――だが負ける訳にはいかない。激しく吹っ飛ばされた刃更は、雑木林の地面を盛大に転がりながら、それでも全身を襲う衝撃に耐えた。

そして激突しかけた大木の幹を蹴ると、一気に疾走を開始する。だが、

「……そいつがご自慢のスピードか？　こないだ幼馴染共とやった時と大差ねえな」

フンと鼻を鳴らしながら滝川が放ってくる無数の暗黒球に対し、刃更は己のトップスピードを最大限に活用。不規則なサイドステップでのジグザグ走行による回避と、ブリュン

「何を考えているのか知らんが、そろそろ鼠が蝙蝠の真似事をするのも限界だろうに。まあ良い……今回の件に関しては、こちらにとっても都合の良い結果に動いている」

「それでは――」

「ああ。成瀬澪を手に入れるのに邪魔なだけの存在ならば始末しようかとも思ったが、ここまで稀少な力を持っているというなら話は別だ。成瀬澪も、この少年も誰にも渡しはしない。二人まとめて手に入れるとしよう――ゼスト、例の仕掛けの方はどうだった？」

人間界へ赴いていた理由の成果を尋ねられ、ゼストは即座の頷きを返す。

「問題ありません。未だ、閣下の思惑通りに進んでおります」

「良し――ならば、そろそろ動く事としよう。全てを手に入れるために。――ゼスト、もう一度この少年の名を聞かせてくれ」

主からの問い掛けに、ゼストは特異能力を持つ青年の名を告げた。

「――東城刃更」「ふむ――東城刃更か。楽しみが増えたな」

そう言って、ゾルギアは壁に映し出された映像の中の刃更と澪に向かって告げる。

決して逃さぬ事を決めた己の獲物に対し、残忍な笑みを浮かべながら。

「お前達に教えてやろう　決して抗えない絶望と快楽を」

ヒルドの斬撃による迎撃を組み合わせて、あっという間に距離を詰め、

「滝川アアアア

そう告げると同時。解き放たれた闇の波動が、至近距離に居た刃更を呑み込んだ。
激しい轟音と衝撃が大地を震わせたのは、その直後の事だった。

## 7

澪には聞こえない声でゼストと何事かを話した後、ゾルギアは転移魔法で姿を消した。
と同時、それまで澪の声と身体の自由を奪っていた精神拘束の効果が消え、

「っ――ハァっ、ハァ……っ！」

途端に呼吸を正常なものにした澪が、最初にキッと睨んだのは眼の前の万理亜だ。
誰よりも信頼していた幼いサキュバスに対し、澪は敵意を込めた眼差しで問う

「ずっと騙していたって訳……？」「……この状況でわざわざ答えないと解りませんか？」

ふっと嘲笑うように万理亜に言われ、澪は悔しげに唇を噛んだ。だが心の中で思う。

……まだよ……っ。

そうだ――まだ希望を捨てるのは早すぎる。何せ刃更と自分は主従契約を結んでいるのだ。相手の位置を探れば、この場所はすぐに特定できる。澪が攫われてどの程度の時間が経過したかは解らないが、恐らくはもう刃更が柚希と共に動き出しているはずだ。

確かにゼストは強敵だが、ゾルギアが不在の今ならばまだ勝機はある。
……まずは、この鎖を何とかしないと。
刃更達が助けに来てくれた時に、人質のままでは二人を危険に晒す事になってしまう。
自分を拘束している鎖から何か抜け出す方法はないか、澪が必死に頭を働かせていると、
「残念ですが――刃更さんは来られませんよ」
こちらの心の内を見透かしたように、万理亜が言った。
「……どういう事よ、それは？」
「ゾルギア様が言っていたでしょう？　ここはあの方の秘密の館です。決して他者の眼に触れないよう特殊な結界で覆われており、主従契約の繋がりをも遮断しています」
つまり、
「呪いだけでなく、主従契約の位置特定も無効化されるという事です」
「な……っ？」
愕然となった澪は、とっさに刃更の居場所を探ろうと、主従契約の位置特定を試みるが、
「……嘘……そんな……」
刃更の居場所はおろか気配すら感じる事ができず、呻くように呟いた。
両親の仇の前で、催淫状態に陥る事態を避けられたのは不幸中の幸いではあった。

だが、こういう時のための保険だった主従契約の位置特定が機能しなければ、とてもじゃないがこの危機的状況を脱する事などできない。

……このままじゃ。

そう思った瞬間――途端に澪の中で不安と恐怖が膨れ上がり、心が折れそうになった。身体の自由を奪われた状態。孤立無援の状況。そうした捕らわれの身を自覚したのだ。

「――もう逃げられないんですよ、澪さま」

そして、眼の前の万理亜がこちらと視線を合わせてそう言ったのと同時、

「え――……」

澪の視界がぐにゃりと歪んだ。とっさに呆然を思う声を上げた時にはもう遅くて。

成瀬澪の意識は――一瞬で闇へと呑み込まれた。

気を失い、壁に繋がれている鎖に身を預けた状態になった澪を見て、

「なぜ彼女を眠らせたのです？　勝手な真似をされては困りますね、マリア」

ゼストは、冷たい視線をマリアへと向けた。

「彼女には――色々と訊いておくべき事があったというのに」

ゾルギアが戻るまで時間を無駄にする必要はない。澪から情報を聞き出せば、刃更との主従契約を結んだまま、彼女の精神を支配する材料を見つける事もできただろう。

「……別に他意はありませんよ。騒がれると面倒だから眠らせただけです」

すると、無表情にマリアが言った。

「どうしてもと言うのなら、起こして、質問でも尋問でもしたらどうですか。しかし、ゾルギア様は澪さまに執着されているんでしょう？　貴女が余計な気を利かせた結果、あの方の楽しみを奪うような藪蛇にならないと良いですがね」

「……そのような心配は無用です。閣下のお考えは、私が誰よりも理解しています」

「それは失礼しました。――で、どうします？　起こしますか？」

肩を竦めたマリアに問われ、ゼストは静かに無言を返した。それは肯定ではなく、不要を伝える沈黙だ。そしてゼストは、意識を失っている澪を改めて見下ろした。

――主従契約の呪いは、主への後ろめたさによって生じる。よって養父母の仇として憎んでいるゾルギアに何かされれば、その嫌悪感と、主である刃更に対する強い想いや、貞操を守れない裏切りの感情から、ほぼ最大の強さで呪いが発動して命を落としかねない。

これまでにも同様の条件で、ゾルギアに犯されて死んでいった娘は数多く存在する。

そのため、下手に手を出せないようにも思えるが――抜け道はある。主に対して悪いと

思わないような精神状態にしてしまえば、何をしても呪いが発動する事はなくなるのだ。

……ただし。

澪の中に眠るウィルベルトの力の根源に、彼女の純粋性――即ち処女性が絡んでいる可能性は否定できない。現にゼスト自身がそうだからだ。ゾルギアが生み出した魔導生命体の身でありながら、高位魔族に匹敵する戦闘能力を有する事ができているのは、偏にそうした制約が果たされているお陰なのである。

よって、ウィルベルトの力を抽出するまでは、一線を越えるような真似をして彼女の中の力が消えるようなリスクは避けなければいけない。

……ですが。

そんな事は些細な問題だ。純粋な処女のまま快楽に堕とし、服従させる方法などそれこそ幾らでもある。だがそれは確かに、ゾルギアの手で、彼の趣向によって行なわれるべきものだろう。そう結論付けたところで、

「――――？」

ゼストはふと、屋敷の結界が建物の外に魔力反応を検知した事に気が付いた。

屋敷の外の映像を出せば、門の前に一人の青年の姿があった。人間の格好をしているが、その正体はゼストと同じ魔族――現在の成瀬澪の監視役を任されているラースだ。

……何故ここが？

ゼストはこの状況に不可解を得た。この屋敷はゾルギアの隠れ家の役目を担っている私邸だ。その場所は、枢機院はおろか現魔王レオハルトにすら知られていない。

それなのに――何故、ラースはここに来る事ができたのか。

「どうするんです？　無視しますか？」「……いえ、その選択肢はあり得ません」

マリアの放った問い掛けと提案に、ラースの映像を見たままゼストは言った。

確かに、黙ったままやり過ごせるならそれが一番だ。だが、もしこちらが何の応答もしなかったら、この場所を他の者に教えられる危険性がある。そして最大の問題は、ここに潜が居る事だ。下手にその事実をレオハルトや枢機院内の対抗勢力に知られたら、ゾルギアの立場は一気に追い詰められてしまいかねない。だから、

「私が行きます――マリア、貴女はここで成瀬潜を見張りながら待機していて下さい」

そしてゼストは結界の外へ出て、ラースの前へと姿を現した。

「やっと出てきてくれたな……」

するとラースが、こちらへ向かってニヤニヤと笑ってくる。

「もう少し待ってもシカトが続くようなら、上にこの場所を報告していたところだ」
ラースは周囲を暗いオーロラに覆われた景色と、その中央にある屋敷を見渡しながら、
「流石はゾルギア侯、実に良いアイディアだな……魔界ではなく、敢えて人間界の並列時空に虚数次元空間を構築して、そこに隠れ家を造るとは。これなら勇者の一族の目さえ欺魔化せば枢機院のお偉方にもバレないし、極秘研究と称して色々な悪巧みもできそうだ」
「……一体何の用です、ラース」
余計な詮索や推測に付き合う必要は無い。落ち着いた声で尋ねるこちらに、
「成瀬滝の身柄を貰いに来た――ここに居るんだろ？」
冷たい笑みを含んだ声で、ラースが言ってくる。
……やはり、気付いていますか。
油断のならない男だとは思っていたが、よもやここまで厄介だったとは。
とはいえ、この状況で馬鹿正直に「はいそうです」と認める訳にもいかない。
「――何の話です」「おいおい、とぼけるなよ」
表情を消してシラを切ったこちらに、ラースはハッと笑って、
「俺は、レオハルト陛下の命を受けた成瀬滝の正式な監視役だ。もしも彼女に何かあったら、俺の責任になっちまうんだよ……解るだろ？」

「貴方の立場は理解しています。ですが、彼女はここには居ません――自身の責任問題を回避したいのなら、こんな所に居ないで、一刻も早く彼女を捜しに行くべきでは？」

「捜した結果、ここに辿り着いたんだがな……まあ、しらばっくれるのも無理はないか」

やれやれ、と苦笑しながらラース。

「ゾルギア侯は現在、絶賛謹慎中だ。それなのに、こんな場所でまた成瀬澪に手を出そうとしていたなんて事が陛下や枢機院の連中にバレたら、いよいよ立場的にマズイもんな」

「言い掛かりですねラース。成瀬澪は現在ここには居ません　無論、閣下もです」

「成瀬澪はともかく、そりゃゾルギア侯はいないだろ。レオハルト陛下直々のご命令で、王城へ赴かれた筈だからな」

「――――」

「おっと、そんな恐い顔をするなよ。本来なら、この隠れ家の場所と成瀬澪を攫った事実を報告したりもできたんだぜ？　それを敢えてしなかったのは、長上の高位魔族であるゾルギア侯に敬意を払っての事だ。配下のお前さんに睨まれる筋合いはないと思うぞ」

「……何が望みです」

「言っただろ。俺は俺の仕事と責任を果たしに来た――成瀬澪の監視役というな。だからアンタも、ゾルギア侯の配下としての仕事と責任を果たせ。敬愛する閣下を助けるのが、

お前さんの仕事だろう」

まあ、

「タダでとは言わねえよ……ゾルギア侯には、代わりにコイツをくれてやる」

そう言うなり、ラースは虚空に闇の球体を生み出した。その中から、気を失った状態の人間の青年が乱暴に地面へと放り出される。それは主のゾルギアが澪と同じく興味を示し、手に入れると決めた元勇者の一族の青年だった。僅かに眼を細めたゼストに、

「先日の成瀬澪達と、勇者の一族との市街戦を見ていた時に気が付いただろう。コイツは特別な力を持っている。ある意味じゃ、成瀬澪の中にあるウィルベルトの力よりも凄まじい能力だ。コイツをくれてやるから、成瀬澪は我慢しとけ」

さもないと、とラース。

「ゾルギア侯が、レオハルト陛下や枢機院に隠れて裏切り行為をしていると報告しなければならなくなる。そうなれば、これまで築いてきた全てを失う事になるぞ。そんな事態は、ゾルギア侯やアンタも望むところではないだろう」

持ち掛けられた取引に、ゼストは長い思案の無言を放った。

――確かにラースの言う通りではある。ゾルギアが窮地に立たされてしまうような事態だけは、何としてでも避けなければならない。それは成瀬澪の心や身体は勿論、彼女の

# 第1章 暴走のロリエロサキュバス

## 1

学校生活とは、基本的に代わり映えのしない毎日の繰り返しだ。
朝起きて、学校へ行き、授業を受けて、帰宅する。
人によっては放課後に部活動に勤しんだり、友人や恋人と寄り道を楽しむ事で青春を謳歌する者もいるが、それらも結局は繰り返される日常の範囲内といえる。
――そんな中、学校に通う生徒達にとって数少ない「非日常」があった。
一年の間で、数える程しか存在しない貴重な機会――年間行事だ。
二学期が始まって一ヶ月弱。早朝や夜半には秋の訪れを感じられるようになってきたある日、「聖ヶ坂学園」の高等部では、朝のHRである行事のアナウンスが行なわれた。

中に眠るウィルベルトの力よりも優先される。そして主のためになるのであれば、たとえ後でどのような叱責を受ける事になろうとも、主を守るのが配下の務めだ。だから、

「……仕方ありませんね」「おお、そうかい。助かるぜ」

ポツリと言ったこちらに、ラースは満足げな笑みを見せた。

その瞬間　ラースと一瞬で距離を詰め、ゼストは彼の懐へと入った。

それは、ラースの戦闘力を上回るゼストだからこそ可能な芸当だった。

「な――」

完全に虚を衝いた超高速の接近に、ラースが驚愕の表情で何かを言おうとする。

――だが、ゼストはそれ以上の言葉を許さなかった。爪を鋭く変化させた右の貫手で、ラースの胴を貫いたのだ。肉体を貫いた感触を得た右手を、ゼストが引き抜くと、

「が……はっ、お……ま、え……っ！」

口と穴の開いた胴から血を流しながら、ラースが呻くような声を漏らした。両膝を地面につき、苦しげにこちらを見上げてくるラースの顔へ、ゼストは右手をかざして、

「ご忠告には感謝します。ですが、ここで貴方を殺せば成瀬澪を渡す事なく東城刃更を手に入れられ、そしてレオハルト陛下や枢機院の耳にこの件が届く事もありません」

平然と告げると、ラースは表情を歪めながら、

「俺を……殺し、たら……すぐに……っ」

しかし、それ以上を言えなかった。ゼストの右手が放った闇色の魔力波が、ラースの頭部を吹き飛ばしたからだ。仰向けに倒れた首なしのラースの死体へと向かって、

「ご心配なく。貴方の死をレオハルト陛下らが知る頃には――ゾルギア閣下は既にウィルベルトの力と東城刃更の力を手に入れ、魔界最強の地位に君臨されています」

ゼストは淡々と告げると、魔法の炎を放ってラースの死体を焼き尽くした。

そして、己の主にだけ伝わる特殊な通信魔法の魔法陣を展開し、虚空へと呼び掛ける。

「――失礼します閣下。少々ご報告したい問題が生じました。既にこちらで対処しましたが……念のため、この後のご判断を仰がせていただけますか」

## 8

鎖で壁に繋がれた状態で、澪が気を失っている。

そんな澪を、成瀬万理亜は――否、マリアは無言で見上げていた。

「……」

澪の意識を奪ったのは他ならぬマリア自身だ。それどころか、ゾルギアの命令に従って

彼女を攫う手助けまでした。本来ならば守らなくてはならない少女を。仕えるべき主を。家族を人質に取られている――そんな事は何の言い訳にもならない。それでも、

「申し訳……ありません、澪さま……私は――……」

今にも泣き出しそうな顔で、マリアは絞り出すような声で呟いていた。

――澪は先代魔王ウィルベルトの娘だ。その命の重さは、マリアの家族の命などと比べられるようなものではない。ウィルベルトの兄であり、穏健派トップのラムサスは頑なに澪を蔑ろにし続けているが、それでも多くの穏健派の魔族達は澪の存在に希望を抱いている。今は亡きウィルベルトが目指した理想を――争いのない魔界を実現するために。

かつての大戦で父親を失っているマリアもまた、家族と共にその理想に懸けてきた。

どうかもうこれ以上、同胞の血が流れ、命が失われてゆく事がないようにと。

……それなのに。

マリアは思う。自分はずっと、そんな大切なものを裏切ってきたのだと。

穏健派の仲間も、守るべき澪も　自分達を受け入れてくれた刃更も。

己の信じるもののために戦い、懸命に生きている彼らをマリアは裏切っていた。

――かつてはマリアも、自分の信じるもののために生きていた。

単身で澪の護衛役を任された時は、自分の命を懸けて彼女を守ろうと誓った。だからこ

そ、養父母を殺され慰み者にされかけていた澪を、ゾルギアの魔の手から一度は救い出すような奇跡だって成し遂げられたのだ。

しかし――澪の監視役を更迭され、魔界へ戻ったゾルギアがマリアの家族を人質に取った事で状況は一変した。冷静な姉からは、すぐに連絡が来た。使命を全うする事だけを考えるようにと。人質に取られた家族は、自分達の方で取り戻すからと。

……姉様。

マリアが尊敬する姉は、どんな時だろうと冷静な判断が下せる大人だ。もしマリアではなく、彼女が澪の護衛役を任されていたら、人質に取られた家族の命よりも己の使命を優先しただろう――否、そもそも天秤に掛けるような事すらしなかったに違いない。

本当ならば、姉のような者の方が澪の護衛に相応しい。実際、姉に澪の護衛役を任せるという案も出ていたと聞いた。だが、結局はその案が採用される事はなかった。

姉には穏健派のトップ――ラムサスという、命を懸けて付き従う相手がいたからだ。

そして、代わりにマリアが選ばれたのである。

――だが、マリアはゾルギアの脅迫に耳を貸してしまった。

最初は、人質になった家族を助けるチャンスを作るため、少しだけゾルギアに従うフリをしようと思っていた。だが、どこかで澪よりも家族を大切に思ってしまう瞬間があって

一度でも揺らいだらもう駄目だった。迷った時点でもう、仲間や使命を裏切ったのだとゾルギアに言われてしまい。いつしかマリアは、ゾルギアに従うしかなくなっていた。

――地獄のような日々だった。自分を信じてくれている者達を裏切り続けなくてはいけない苦しみ。澪や刃更が掛けてくれる言葉や、向けてくれる信頼に対し、嘘と偽りで応えなければいけない後ろめたさ。それはマリアの胸を、息ができない位に締め付け続けた。

そうして今日、マリアはとうとう取り返しのつかない所まで来てしまった。

ゾルギアに命じられるまま、ゼストと共に澪を攫ってしまった。

――マリアは思う。自分はもう戻れないと。

引き返せないという意味だけではない。戻れる場所を失ってしまったのだ。

穏健派の仲間の下へも、成瀬澪の配下という立場へも。

そして　刃更や迅が受け入れてくれた、皆で過ごしたあの家にも。

全てを裏切るというのは、そういう事なのだから。

「……」

自分に残された運命を思い知り、マリアがそっと眼を伏せると、ふと背後の空間が歪んで何か大きいものが床へと落ちた。それを見たマリアは、表情をより悲しげにする。

「刃更……さん……」

視線の先に刃更が倒れていた。気を失っているらしく、ピクリとも動かない。きっと澪を助けようと必死になって奔走し、そしてラースに捕まったのだろう。

「――少々、予定を変更します」

そこへ、虚空からゼストが姿を現した。

「ゾルギア閣下からのご指示です、マリア……彼を堕として精神を支配して下さい。閣下は、特異な能力を持つこの青年についても手に入れる事を望まれています。サキュバスの貴女ならば、その手の行為は得意な筈です」

そして、

「主従関係にあるこの青年を我々に従うようにすれば、成瀬澪の精神も支配しやすくなります。そうなれば、あっという間に閣下に所有される事を望むようになるでしょう」

今のマリアには、逆らう術はない。無言で従い刃更へと歩み寄ろうとすると　ふっと刃更の姿が虚空へと消えた。何事かとゼストを見ると、

「別室を用意しました。やるのはそちらでお願いします」

淡々と告げてくる。

「何かの拍子に成瀬澪が眼を覚まし、貴女が彼を堕としているところを見て動揺されたり――それこそ、主の危機を救えない事で呪いや力を暴走させられては困りますから」

# 第3章　全てはこの時のために

## 1

東城刃更（トウジョウバサラ）が眼を覚ましたのは、巨大（きょだい）なベッドの上だった。

「ここは……」

仰向けの状態から身を起こそうとした刃更は、そこで両手に手錠（てじょう）が嵌（は）められているのに気が付いた。頭の上で拘束（こうそく）された刃更の両手が、ベッドボードに鎖で繋がれている。

すると急速に意識が覚醒（かくせい）してゆき、刃更は自分が意識を失う前の事を思い出した。

「そうか……俺は滝川（たきがわ）に」

それでも身体に痛みがある場所はなく、出血など目立った怪我（けが）もない。

……手加減されたんだな。

その事実を想いながら、刃更は頭だけを動かして、改めて自分のいる空間を見渡した。壁も床も天井も、何もかもが石造りで、扉を除いて窓はない密室空間だった。刃更が寝ているベッド以外には家具や調度品といった類いも一切ない。しかし、独房のような汚い場所でもなかった。牢獄にしては室内はだだっ広く、また刃更が寝ているベッドも天蓋付きで細部の装飾に至るまで凝った豪華なものだ。異様な空間に眉を顰めた刃更は、己の居場所を確認するため、主従契約を結んだ相手の位置特定を行なった――その瞬間、

「っ……澪？」

先程までは把握できなかった澪の居場所を感じられ、刃更はバッと入口の扉の方を見た。そして、反対に柚希の気配を感じられなくなっている事実に、東城刃更は確信する。

ここが澪が囚われている、ゾルギアのアジトなのだと。

――だから、刃更は即座に行動を試みた。まずは拘束している手錠や鎖を自力で外す術はないか確認し、それが無理だと解ると周囲に何か拘束を解くのに役立つものがないかを探した。しかし、ベッド以外にはやはり何も見当たらず、

「……ん？」

そこで刃更は、制服の上着の内ポケットに慣れ親しんだ重みがある事に気が付いた。だから腹筋を利用して慎重に身体を倒立に近い状態へ逆立ててゆくと、やがて上着の

中から携帯電話が滑り出てくる。

「っ――……っと」

それをどうにか口でキャッチすると、刃更はそのまま喉を反らせ、さらに手首を必死に曲げる事でどうにか手で携帯を持つ事に成功し、即座に状態を確認。

バッテリーに問題はなく、機能も特に問題なく使える。しかし、

「やっぱり圏外か……」

刃更の携帯は、迅と同じくいざという時のために特別な魔力チップが入っている。これなら魔界からでも通信可能なのだが、主従契約を結んでいる澪の居場所を感じられなくしていた位だ。何らかの特殊な結界が張られているとは思っていたが、案の定だった。

しかし刃更はメーラーを立ち上げ、これまでに判明した状況を何とか打ち終えると、送信先に柚希を入力しておいた。後はもし何かで通信可能な状態になったら、速攻で送信すれば良い。そうして刃更が嘆息すると、ふと部屋の外から足音が聞こえてきた。慌てて刃更は携帯を枕とヘッドボードの間に押し込むと、ガチャリと扉が開けられる。

「っ……」

刃更は即座に眼を瞑り、動揺した鼓動と呼吸を穏やかなものにしながら、気を失っているフリをして相手の出方を窺った。すると相手はゆっくり刃更へと歩み寄ると、不意に

刃更が予想していない行動に出てくる。てっきりこちらの意識の有無の確認にきたと思ったのに、あろう事かベッドに上って刃更の腰の辺りに跨がってきたのだ、そして、

「起きているのは解っています……眼を開けて下さい、刃更さん」

聞き覚えのある静かな声に、刃更は即座に反応した。

瞳を開けると、そこにはサキュバス本来の姿をした幼い少女がおり、

「万理亜……」

その名を呼んだこちらに対し、万理亜は微苦笑を見せて、

「まさか、刃更さんがこんなに早くここへ連れて来られるとは思っていませんでした……まあ、そのお陰でこうして二人きりになれたのですから、私としては良いんですけど」

そう言って刃更の上着の中に手を入れ、シャツのボタンを開け始める。

「お前、何をして……っ」「女子更衣室のロッカーに二人で入った時の続きですよ」

万理亜は当然のように言い放ち、こちらのシャツのボタンを全て外した。

「こうして捕まった以上、刃更さんにできる事はもう何もありません。だから、せめて最後くらい楽しみましょう。刃更さんの事、私がいっぱい気持ち良くしてあげます」

万理亜は蠱惑的な笑みを浮かべると、刃更の首筋にねっとりと舌を這わせながら、ベルトを外そうと小さな手を腰の辺りへ伸ばしてくる。

「――みんな既に知っているかと思うが、来月は体育祭だ」
刃更達のクラスでも、今日も爽やかな担任の坂崎守が、手元に配られた体育祭の概要について書かれたプリントに視線を走らせている生徒達を見渡して言った。
「今度のＬＨＲまでに、各自参加する種目を考えておいてくれ。希望通りの種目に参加できるとは限らないから、念のため候補は多めにな」
大きな行事が迫っている事に対し、生徒達の表情はおおよそ二つに分かれた。イベントとして楽しみにする者。逆に面倒だと嫌がる者。そして特に興味のない者だ。
「あと――その時に、体育祭の実行委員についても決める。人員は男女一人ずつだ」
しかし坂崎が続けた言葉を聞くと、クラスの大半が露骨に嫌そうな顔になった。
そんな教室内の素直な反応に、坂崎は苦笑する。
「そう嫌そうな顔をしないでくれ。ちなみに――今の段階で、誰かやりたい奴はいるか？」
クラス中が沈黙を返すと、坂崎は教卓に両手をつきながら、
「まあ、そうだろうな……できれば立候補が望ましいんだが。けれど、学校行事のスタッフをやる事は、悪い事ばかりじゃないんだぞ。きちんと頑張ってくれた者は、働きに応じて内申書が加点される。もし推薦での進学を希望するなら、良いチャンスなんだぞ」
「マモちゃんセンセ～。内申書の加点って、入試でどのくらい有利になるの？」

「っ……止せ万理亜っ、そうやって無理してゾルギアの命令に従って――」

刃更は叫ぶようにして告げる。

「――それで、奴に人質に取られているお前の家族が助かるとでも思っているのか!?」

その瞬間、

「――――――」

万理亜がピタリと動くのを止めた。だから、東城刃更は呼び掛けを続ける。

「お前だって本当は解っているんだろう？　ここでこうしていても、お前の家族は救われないって。澪を手に入れるために良いように利用されて、そして今アイツを手に入れた以上――用済みと判断されて、お前と一緒に始末されるのは時間の問題だって！」

そこまでを言うと、刃更は声のトーンを少し落として、

「確かに相手は高位魔族だ。お前一人じゃ、家族を助け出すのを諦めるのは無理もないかもしれない。――でも、お前には俺達が居るだろ。一人で諦めたりする必要なんてない」

そうだ。諦めるのはまだ早すぎる。

「奴らの狙いは澪だ。まずはアイツを取り戻そう。そうすれば澪だけじゃなく、お前や人質になっているお前の家族がすぐに殺される可能性は、今よりもずっと低くなる」

人質を殺すと脅されてゾルギアの命令に従ってしまったのだろうが、澪を捕らえられた

今の状況は、澪だけではなく万理亜や万理亜の家族の命も危険に晒してしまっている。

「だから――」

その先を言おうとして、しかし刃更は言葉を失った。眼の前の万理亜の瞳が、こちらの言葉を完全に奪う位に冷たいものになっていた。そして苛立ちを含んだ声で、

「言ったじゃないですか……刃更さんにできる事はもう何もないって。ゾルギア様は、破れかぶれで勝てるような甘い相手じゃないです。そんな安っぽい作戦で助け出せるなら、私は刃更さん達を騙したりせずに、素直に事情を話して力を貸して貰っていますよ」

「だからって……このまま従っていたって、お前もお前の家族も救われないだろっ」

「そんな事は、刃更さんに言われるまでもなく解っています　でも、今の私はこうするしかないんです――彼らの命令に従って、刃更さんの心を支配するしか」

「万理亜……」

ずっと一人で悩み、そして苦しんできたのだ。万理亜はゾルギアがどれだけ凄まじい力を持ち、目的を達するためならどんな手段も厭わない事を知っている。そうして絶望してしまうまで積み重ねられた苦悩を、いきなり払拭しろと言っても不可能なのだろう。

……だけど。

それでも刃更は諦めない。夏休みの終わりに、自分は澪と万理亜を――新しい家族を守

ると決めた。しかし、実際は万理亜の事を守れてなどいなかったのだ。

――確かに、万理亜は刃更達を騙していたのかもしれない。

だが、彼女と過ごした時間の全てが嘘だったとは、東城刃更はどうしても思えない。

刃更達と過ごした日常や、共に危機を切り抜けた時に万理亜が浮かべた笑顔や涙には、確かな真実が含まれていた筈だ。そして万理亜が居てくれたからこそ、刃更達が得られた笑顔や、救われた危機があった。ならば、今度は刃更が万理亜を助けなくてはならない。もう一度と自分の大切なものを失わないために。そして、その大切な相手が――成瀬万理亜が、かつての刃更のように大切な存在を失ってしまわないために。だから、

「……傷付けたくありません。無駄な抵抗は止めて、大人しくしていて下さい」

「悪いが……そいつは無理だ」

静かな声で告げてくる万理亜に、刃更は拒絶の言葉を返す。

「俺の心を支配するって話だが……お前の魔法じゃ俺の意識は操れない。万理亜、それはお前自身が言っていた事だろ。そっちこそ、無駄な真似は止めたらどうだ」

「……確かに、今の私では無理かもしれません。ですが、刃更さんの心を支配するしかないのなら、私は何としてもそれを果たしてみせます」

ええ、

「それこそ――奥の手を使ってでも」

そう呟いたのと同時、万理亜の身体の前に複雑な立体型の魔法陣が展開された。そして魔法陣の中から姿を現したのは、

「……鍵？」

虚空に出現したのは淡い桜色の輝きを放つ『鍵』だった。それがゆっくりと先端を万理亜の方へと向けた。その延長線上にあるのは、万理亜の衣服の胸元に備え付けられた鍵穴だ。その鍵穴に、宙の『鍵』がゆっくりと刺さり、

「んっ……あぁ……っ」

艶めかしい顔で濡れた声を上げた万理亜の胸の奥で、独りでに回転した

そして、キンという甲高い開錠音が鳴った瞬間、

「――――」

ビクンと身体を仰け反らせた万理亜の全身が、薔薇色の光に包まれた。

薄暗い室内が、万理亜を覆う眩い光の粒子に照らされる。

「な……」

眼の前で起こっている現象に、刃更はただ驚愕する事しかできない。

――そして、程なくして光が収まった時。刃更の上に跨がっていたのは、もういつもの

幼い万理亜ではなかった。成体へと変貌した、美しいサキュバスがそこに居て、

「万理亜……なのか？」

澪よりも抜群のプロポーションに、柚希よりもスラリと高い身長。そして高校生の二人よりも少しだけ大人びた色気と雰囲気。養護教諭の長谷川と比べると、流石に少女らしさはあるが、それでも彼女に勝るとも劣らない凄まじい美しさに、思わず呆然の声を漏らした刃更へ、万理亜は「はい」と色っぽい笑みを見せると、

「さあ刃更さん。サキュバスの本気の洗礼の威力――たっぷりと味わって下さい」

そう言って、こちらに馬乗りの状態の万理亜に瞳を覗き込まれた。その刹那、

「――――」

東城刃更の意識が、一瞬で自分のものではなくなった。

存在の根源とも言うべき霊子中枢のオーバーロード。

それがマリアの行なった変身のカラクリだった。マリアの霊子パターンを組み込んで生み出された限界解除の魔法鍵を使用する事で、外見が変化するレベルまであらゆる能力を高める事ができる。これは、澪の護衛を任された時に託されたマリアの最後の切り札だ。

変身していられる時間に色々と制限があり、さらには一度変身すると次に変身できるようになるまでにはかなりの期間を要してしまうなど、使い方が難しい面もあるが、

……それでも。

養父母を殺され、ゾルギアの魔の手に落ちようとした澪を逃がした時に使って以来、マリアは一度も変身をしていなかった。これならば恐らく、無闇やたらと力を消費するような真似さえしなければ、二時間はこの状態のままでいられるだろう。

そして刃更の瞳が焦点を失い、全身から力が抜けたのを確認したマリアは、

「さあ、刃更さん……私を貴方の好きにして良いですよ」

蠱惑的な笑みと共にそう言って、刃更を拘束していた手錠を外してやる。すると、

「……」

刃更は虚ろな瞳のまま、マリアが身に着けているボンテージのブラトップに手を掛け、強引にグイっと上にずらしてきた。そして、ぷるんと大きな胸を先端まで露わにされたマリアは、のっそりと身体を起こした刃更に逆に押し倒される。

「んっ……ふふ、やっぱり本当の刃更さんは強引なんですね」

マリアは楽しそうに笑みを浮かべた。マリアが刃更に対して行なったのは、男としての本能を強烈に増幅する精神操作だった。今の刃更は本能の赴くまま、ひたすら女性への

欲求に忠実な状態にある。こちらを押し倒した刃更は、マリアの胸を手と口で愛撫しながら、空いている手をこちらの背中へと回してショーツの上からマリアの尻を揉み始めた。

「あんっ……はぁ……んぅ、ふっ……」

湧き上がる甘い快感にマリアが身をよじらせると、刃更はこちらの太股の間に膝を入れて脚を開かせてくる。だからマリアは両脚を刃更の腰に回すと、自分の胸にむしゃぶりついている刃更の頭を掻き抱いた。すると刃更は、先端ごと頬張るように口いっぱいに含んでいたマリアの胸を思いきり吸い上げてくる。途端に生じた凄まじい快感に、

「――ふあぁぁっ、んっ……やぁ……っ」

マリアは、刃更を堕とせというゼストの命令とは関係なく、本気で感じ始めている自分がいる事に気が付いた。どうやら刃更が澪や柚希を屈服させられたのは、主従契約の催淫の呪い以外にも、刃更自身の才能も大きく関係していたらしい。女性経験はない筈なのに、女の心と躰を完全にとろけさせる事ができる天性が刃更には備わっていた。

「……」

ちゅぽっと音を立てて刃更がマリアの胸から口を離すと、ぬらぬらとした唾液がいやらしく糸を引いた。そしてマリアに息を吐かせる間もなく、今度は逆の胸を吸ってくる。

虚ろなままの刃更の瞳はどこか冷たくて。

「刃更さん……あぁっ、刃更さぁん……」

本能のまま強引にこちらを感じさせてくる刃更に、マリアは意識をとろけさせてゆく。

――ゼストには男を籠絡するのが得意だろうと言われた。だが普段は刃更に大胆な真似をしたり、澪や柚希が刃更に快楽で屈服されるように持ち込んだりしているものの、実はマリア自身に快楽に対する耐性はあまりない。サキュバスという種族に生まれているため、その手の知識は豊富だが――如何せんまだ幼いため、本物の快楽の凄まじさを経験した事がないからだ。成体に変身した事で、普段よりも性感が飛躍的に上がったマリアは、

「……こんな事なら、もっと早く私も刃更さんにされておけば良かったですね」

刃更に抱き付きながらそう言った瞬間、瞳の端から涙を零れさせた。そうしたら――こんな空しい形での行為が、刃更との最初で最後にならずに済んだかもしれないのに、と。

……でも、どのみち……。

刃更と出逢った時には、自分はとっくにゾルギアに従うしかなくなっていた。刃更や澪を騙し続けるしかなくなっていた――つまり、そもそもマリアが望むような関係を刃更と築く事は、最初から不可能だったのだ。そして、

「さあ刃更さん……貴方の優しさで私を滅茶苦茶に犯して下さい」

とうとうマリアは、刃更に決定的な行為を命じた。こちらの精神支配から解放され、自

分の初めての経験が女の子を酷く乱暴したものだったと知った時　その事実は、優しい刃更の心に決して消える事のない傷を刻むだろう。大切にしたいと想う相手を自分の手で汚してしまった罪深さ――それは刃更の精神を完全に支配し、堕とす事へと繋がる。

「ごめんなさい刃更さん。でも、人じゃありません……私も貴方と、一緒に汚れますから」

「――――――」

すると刃更はこちらの両肩をぐっと摑むと、そのままマリアをベッドへと押し付けた。

マリアは抵抗しなかった、ただ黙って、刃更に滅茶苦茶にされるのを待った、だが、

「くっ……お、ぐぅ……あ……っ」

刃更はそれ以上をせず、苦しそうな声を発しながら身体を震わせ始める。

「そんな……今の私の洗礼をまともに受けているのに」

マリアは驚きに眼を見開いた。刃更は、変身状態のマリアの精神支配から強引に脱出しようとしていた。そして口の端から血が流れる程にきつく唇を嚙み締めた刃更は、

「っ……万理亜……！」

その瞳に確かな正気を取り戻す。そして強い力でこちらを抱き締め、

「もしもお前を……本当に俺の好きにして良いって言うのなら」

告げてくる。

女子の一人が発した質問に、坂崎は笑みと共に少しだけ肩を竦めて、
「それは頑張り次第だな。ただ通常の学力試験による入試と違って、推薦での受験は人間性も測られる。生徒会に所属する事が内申書に有利とされるのもそのためだ。積極性なんかの面でアピールできる機会は、意外と貴重だって事は覚えておくと良い」
そこでチャイムが鳴り、坂崎は出席簿を教卓にトンと立てると、笑いながら言った。
「話は以上だ　一時間目は体育なのに、長くなってしまって悪かったな」

通常の移動教室とは異なり、体育の準備にはさらに一定の時間が掛かる。
体操服への着替えが必要だからだ。だが男子が廊下にあるロッカーから体操服を取り出しているのに対し、女子はビニールのバッグのようなものを手に移動を始めてしまう。
「？　女子は体操服は良いのか？」「……平気。今日は使わないから」
刃更が尋ねると、同じように廊下を行こうとしていた柚希がコクンと頷いた。そして、
「何言ってるのよ刃更。あたし達、今日はプールだって言っておいたでしょ」
ふと横からの声に見れば、いつの間にか澪が近くまでやって来ていた。
「……ああ、そういやそうだったっけ」

S
246-3
Y6
上栖綴人
新妹魔王の契約者(テスタメント) III
角川スニーカー文庫

9784041008607
ISBN978-4-04-100860-7
C0193 ¥600E
定価：本体600円（税別）
1920193006001

「お願い刃更(バサラ)――私を支配して」「な、何言ってんだ柚希(ゆき)っ？」澪(みお)を狙う勇者族を退けた刃更は、次々と現れる強力な敵に立ち向かうため、柚希とも主従契約を結ぶことに。だが、澪への対抗心を燃やす柚希は主従契約をわざと暴走させて!?　一方、魔界では澪を狙う魔族ゾルギアがついに動き出した。刃更たちに迫るゾルギアの魔の手。そこには刃更のよく知る少女の姿があった!?　限界を打ち破る最強契約者のディザイア・アクション!!

「俺はお前を助ける――お前を苦しめているこの状況から、必ずお前を助け出すよ」

優しくも力強い言葉と抱擁。思わず心が流されそうになったマリアは、

「――――っ」

それでも乱暴に刃更の手を振り払うと、ベッドの上から飛び退った。そして距離を取るように部屋の扉の前へと降り立った時には脱がされ掛けていた服が元に戻り、ただ冷たい瞳で刃更を見据える。すると刃更はゆっくりとベッドから降り立ち、彼の武器――魔剣ブリュンヒルドを具現化した。それを見て、

「力ずくでもって事ですか……良いですよ、私も無理矢理なのは嫌いじゃないですから」

冷笑を浮かべたマリアに、しかし刃更は無言のまま一つの動きを見せた。

ブリュンヒルドの切っ先をマリアには向けず、そのまま石畳の床へと突き立てたのだ。

ガキィィン！　という音を立てて、ブリュンヒルドが床に生えるように突き刺さり、

「……何の真似です？　まさか私が相手なら、武器がなくても勝てるとでも？」

怪訝に問い掛けたマリアに、刃更は「いいや」と首を横に振って、

「武器も持たずにお前に勝てるだなんて、そんな事は微塵も思っちゃいないさ」

だけど、

「俺はお前に勝ちに来たんじゃない、助けに来たんだ――そのために武器は必要ない」

確かな瞳で見据えてくる刃更に、しかしマリアは冷たく笑って、

「……刃更さんは優しいですね。この状態で、それでもまだ私の事を心の底から心配してくれている。でも、ここまで来て、私も家族の命を諦める訳にはいかないんです」

だから、

「刃更さんに忠告しておきます……確かに普段の戦闘力は、私よりも刃更さんの方が上でしょう。ですが、今の状態の私を相手にそんな余裕を見せていたら――死にますよ」

そう言うや否や――マリアは己の力を解放した。

途端にマリアの全身から、限界を超えた力がオーラとなって噴き出した。先代魔王の力を暴走させた姿にほとんど匹敵するようなレベルの圧力で、刃更に最後の忠告を行なう。

「……っ」

それでもこちらが放った圧力に、刃更は歯を食い縛って耐えていた。そして次の瞬間、

「――――」

マリアの視界から、刃更の姿が掻き消えた。

――言う事を聞かない相手を説得するならば、強引に話を聞かせるしかない。恐らく刃更はマリアを傷付けずに拘束するなどして、説得するつもりなのだろう。

スピードタイプの刃更が本気を出した時の速度は、普段のマリアではとてもじゃないが

眼で追いきれるようなものではない。だが、

「――無駄ですよ」

マリアは、ステップ一つで自分を捕まえようとしていた刃更を横に避けると、

「もう一度言います――刃更さん、貴方にできる事はもう何もありません」

そう告げると同時、マリアの放った右の拳が衝撃と共に刃更を吹っ飛ばした。

## 2

澪を見張るため広間に留まったゼストは、水晶球を通してその様子を視ていた。

神速の領域に身を置いた刃更を、容赦なく吹っ飛ばした美しいサキュバスの姿に、

「……成る程、あれが」

ゼストは静かに納得を得た。かつて成瀬澪を手に入れようとしたゾルギアから彼女を救い出す際に成体へと変身し、逃げおおせた事は聞いていたが。確かに凄まじいまでの戦闘力の上昇だ。あれならば、一時的とはいえゾルギアと渡り合えたという話も頷ける。

……しかし。

マリアに刃更の相手をさせるのは、或いは避けるべきだったのかもしれない。刃更には

この後、滔を堕とすために役立って貰わなくてはならないし、何よりゾルギアは刃更の消去技を欲しがっている。

マリアもその事は承知しているだろうから、殺すような真似はしないとは思うが、……少しやりすぎてしまう可能性はありますね。

サキュバスの彼女なら精神支配で籠絡する事は容易いと思っていたが、まさかあそこまで感情的になるとは。刃更に自身を犯させようとした事といい、彼の優しさを受け止め切れずにあそこまで苛立ちを露わにした事といい――どうやらマリアも刃更に対して特別な感情を抱いていたらしい。だからこそ、滔だけでなく裏切った自分まで助けに来てくれた刃更に対し、ああする事で見捨てて貰おうとしているのだろう。そんな中、

『――――』

映像の中で、吹っ飛ばされて石造りの壁面へと磔よろしくめり込んだ刃更が、それでも意識を手放す事なく、壁に手を掛けて再び床へと降り立った。マリアの強力な一撃を受け、既に骨折レベルの重傷を負っている筈なのに、その瞳はまだ微塵も力を失っていない。

対するマリアは、そんな刃更に泣き出しそうな程に苦しげな表情を浮かべて　それでも家族の命を救うため、刃更を諦めさせようと自ら再び攻撃を仕掛けてゆく。その光景に、

「……」

ゼストはスッと眼を細めた。刃更がマリアの攻撃を避けなかったからだ。

そして映像の中で刃更が吹っ飛ぶと同時、轟音と共に建物全体が振動した。マリアが放った攻撃の凄まじい威力を如実に物語っている現象だった。

そして――再び壁へ磔にされた刃更は、今度こそ意識を失っていた。

……しかし。

刃更は今、マリアの攻撃に対してわざと足を止め、正面から受ける事を選択していた。

先程はカウンターを食らったが、あれは戦闘力が上昇したマリアの変化を見極められなかったからだ。いかにマリアの戦闘力が上昇しているとはいえ、刃更の速さならば回避する事は不可能ではない筈。よしんば完全に避ける事は不可能でも、直撃を避けてダメージを軽減する位の事はできるだろう。それを敢えてしなかったという事は、

……彼もまた、己の感情を優先したのですね。

何としてもマリアを説得し、そして彼女を救うつもりでいたのだろう。マリアの置かれている状況で、それでも彼女の心を刃更が救ってやるには、己の言葉と想いをマリアに受け入れて貰うしかない。そのため刃更は、正面からぶつかる事を選んだのだ。

自らは一切の攻撃をせず――ただひたすら彼女の心を助けるために。

よって意識を取り戻せば、刃更はマリアの気が済むまで攻撃を受け続けるに違いない。

その心意気は尊いかもしれないが、しかし、時の感情は時に身を滅ぼし、最悪命さえも失いかねない。ならば再びマリアに刃更を鎖で拘束させ、彼女を一旦こちらに呼び戻して、少し冷静にさせるべきだろうか。そう思案した瞬間、

「っ――――？」

突如、背後に生まれた気配に、ゼストは大きく横へと跳んでいた。

と同時――それまでゼストが立っていた場所を、無数の空気の刃が駆け抜ける。

恐らくは虚空へ放った居合いの斬撃によるものだろう。だから、

「……」

ゼストは翼を羽ばたかせて宙で急速旋回を行ない、空気の刃が来た方向へ振り返った。

すると　―そこには一人の少女が立っていた。滔や刃更と同居している、勇者の一族の野中柚希だ。霊刀を片手に、既に身に纏う衣服を戦闘用装束へと切り替えている彼女に、

「どうやって建物の中に……」

ゼストは怪訝に呟いた。この屋敷はゾルギアの結界で覆われている。勇者の一族の侵入を許す事などはあり得ないし、たとえ侵入されたとしてもすぐに気が付く筈だ。

しかし、そこでゼストはふと異常事態に気が付いた。

「閣下の結界が、消えている……――まさか？」

ハッとなる。先ほど刃更がマリアを前にブリュンヒルドを床へ突き立てたのは、単にマリアに対して戦闘意思がない事を示しただけでなく、

「この屋敷を覆う結界に対し、自らを内部へ閉じ込めていると見立てて――カウンターであの消去技を発動して無効化したという事ですか！」

刃更の真の狙いを叫んだこちらに対し、

「刃更を甘く見た――それが貴女達の失敗」

応えるように呟きを放つと、いきなり柚希が動いた。

即座に見せた助走からの跳躍で、宙に居るこちらとの距離を詰めると、そのまま霊刀で連続の斬撃を放ってくる。無駄な動作を排した無数に連なる斬撃だ。先日の市街地での戦いを見て知ってはいたが、やはりかなりの使い手だった。しかし、

「大した腕ではありますが……それでも脅威という程ではありません」

柚希の連続攻撃を、同じ数だけ展開した魔法の防護障壁で弾いたゼストは、自身の鋭い爪による攻撃を、左右から交差する軌道で繰り出した。

「っ……！」

とっさに霊刀で受けた柚希は、しかしその勢いを殺せずに床へと吹っ飛んだ。それでも辛うじて体勢を整えて足から着地した柚希に、今度はゼストが攻撃魔法を解き放つ。

と同時、ゼストの前面に展開された魔法陣から、大量の黒曜石の槍が発射された。

降り注ぐ無数の黒色の刃に、柚希はバックステップと剣閃による迎撃を見せた。しかも柚希がとっさに放った剣撃は、攻撃ではなく防御に特化したもの。高速で振り抜かれた霊刀が五芒星に宙を斬ると、そのまま防護障壁となってゼストの魔法を弾き散らした。斬撃を通常の線状ではなく、器用にも面状にして放ったのだ。しかし、

……問題ありません。

宙のゼストは冷静に、己と相手の実力差を見極めてそう判断を下した。油断できる相手ではないが、逆に油断さえしなければ問題なく倒せる相手だ。顕在化した霊獣『白虎』を相手にした時のような力を出されると少し厄介だったかもしれないが、とはいえここは霊刀が最大限の力を発揮できるような勇者の一族が構築した結界内ではない。

刃更の消去技でゾルギアの結界こそ消えてしまってはいるが、それでもこの建物内は人間界よりも魔界に近い空間だ。自然界の精霊の加護を得る事はほぼ不可能に近い。

対照的に、自分達のような魔族の力は増大されるようになっている。

よって問題はないと判断したゼストは、

「――――っ!?」

不意に斜め下から飛来した巨大な雷球に、急上昇の回避を強いられた。

刹那に新手の襲撃を思ったゼストは、しかしそれが間違いだと気が付く。

「成瀬澪……」

いつの間にか澪が意識を取り戻し、戦意を宿した瞳でこちらを見上げていた。鎖で壁に繋がれた状態ではあるが、それはもう物理的な拘束でしかない。ゾルギアの結界が消えてしまった今、先程までのように澪の魔法を封じる事はできないからだ。そして魔法に必要なのは、精神の集中であって身動きではない。あの状態でも魔法は充分に使用できる。

さらに――回避を強いられた一瞬の隙に、ゼストは柚希に澪への接近を許してしまっていた。そして柚希が霊刀を一閃すると、キンと甲高い金属音が響いた。

成瀬澪を拘束していた鎖が、断ち斬られたのだ。

万理亜の魔法で眠らされていた澪が目覚めたのは、柚希が現れた直後だった。

学校のシャワールームで、刃更との主従契約の強化に成功していたお陰かもしれない。

あの時の戦闘力の向上で、魔法に対する耐性も上がっている筈だからだ。

柚希に繋がれていた鎖を斬って貰って自由になった澪は、手首の調子を確かめながら、

「……まさかアンタに助けられるなんてね。癪だけど感謝するわ――ありがと」

チラリと柚希を見て感謝の言葉を告げると、

「別に――そういうのは、無事にここを出た後でたっぷりと聞かせて貰う」

いつものように柚希に淡々と言われ、「あ、そ」と澪は肩を竦めた。そして、

「――それで？　まさかアンタ一人で来た訳じゃないでしょ。刃更は？」

「多分、今頃は万理亜を助けてる――刃更の話だと、彼女は人質を取られているって」

それを聞いた澪は、

「……そう。やっぱり万理亜、アイツらに無理やり従わせられてたのね」

幼いサキュバスの事情を察し、瞳を伏せてそう呟いた。万理亜がこちらを眠らせた時、澪は違和感を得ていた。もし本当に、悪意を以てこちらを騙していたのだとしたら、

……あんな眼をする必要はないもの。

もう逃げられないと言って、澪を眠らせた時の万理亜の瞳は酷く切ないものだった。あれはきっと澪にではなく、自分自身に対して告げた言葉だったのだろう。

それなのに裏切ったフリをして、無理に冷酷に振る舞ったりして。

「……」

万理亜がどんな気持ちでいたかを想い、澪はギュッと拳を握り締めた。

そして、紅蓮のオーラを立ち上らせながら宙のゼストを睨んで言い放つ。

この聖ヶ坂学園の特色の一つに、夏以外にも行なわれるプール授業がある。
室内温水プールに、身体を温めるためのサウナなど、水泳用設備が充実しているからだ。
「まさか……昨日教えたのに、もう忘れちゃってたわけ？」
「悪い。ちょっとうっかりしちまってさ……」
眉を顰める澪に刃更が弁解すると、隣の柚希がキョトンと首を傾げて、
「……昨夜、私と成瀬さんの水着姿を見せてあげたのに？」
「っ――お、おい柚希っ」「ちょ、ちょっと野中っ」
さらりと口にした爆弾発言級の事実に、刃更と澪がギョッとなった。すると、
『――――――』
途端に刃更の背後で不穏な空気が生まれた。ええ、恐らくこれは殺気です。見るのが恐くて振り返れないが――きっと刃更は今、他の男子達から睨まれているのだろう。
刃更が澪だけでなく、柚希とも同居を始めて今日で五日目。その事実は、既にクラス中はおろか学園中にまで知れ渡っていた。
……まあ、仕方ないよな。無理に隠せるものでもないし。
クラスの男子達からの嫉妬を感じながら、刃更は心の中で嘆息しつつ澪と柚希を見た。
刃更達の通う聖ヶ坂学園において、双璧をなす美少女――それが成瀬澪と野中柚希だ。

「そういう事なら、お礼をしなくちゃいけないわね――あの子の分まで」

## 3

――澪が攫われた後、野中柚希は刃更から待機を命じられていた。

何とかして敵の本拠地を突き止めるから、後から加勢に来て欲しいと。

主従契約を結んだ者同士は相手の位置が解る。

よって刃更が敵の本拠地に辿り着けたかどうかはすぐに解った。澪と同じ結界の中に入ったのか、一時的に刃更の居場所が解らなくなったからだ。すぐに刃更の気配が消えた場所へ赴いたが、巧妙に隠された敵の本拠地を見付ける事ができなくて。だから柚希は、刃更の気配が感じられるようになるのをひたすら待ち続けた。そして刃更が《無次元の執行（ハニンシングシフト）》を使って結界を消滅させた事で、柚希はゾルギアの館の位置を特定。さらに時を同じくして刃更から柚希の携帯へと入った、澪や万理亜を取り巻く事情や状況を報せるメールを読み、そこに記されていた刃更の指示に従って建物内へと突入したのである。

柚希が刃更から受けた指示は、澪の救出を優先して欲しいというものだった。

そして今――澪と共にゼストと対峙した柚希は、改めて一つの事を思った。

……刃更と主従契約を結んでおいて良かった。

だからこそ刃更の居場所が解り、この場所へと辿り着く事ができた。また、やはり相性が良いのか、それとも澪に負けたくないと意地を張ったのが良かったのか。主従契約を結んだ瞬間に、柚希は戦闘力の強化まで行なう事ができていた。

……お陰で。

実力的には特A級クラスであろうゼストと相対しても、瞬殺だけはされずに済む。

――だが、それでもこちらが劣勢なのは間違いない。澪と力を合わせた二対一の状況とはいえ、自分達は即席タッグだ。コンビネーションにも問題があるし、おまけにゼストの実力は霊槍『白虎』を操っていた時の高志と同等かそれ以上。そしてあの戦闘では、柚希は万理亜と二人がかりでも残念ながら高志には及ばなかった。

無論、あの時とは条件や状況が異なっている。万理亜だったパートナーは澪になっているし、高志と戦った時はまだ残っていた柚希の迷いも今はもうない。何より柚希も澪も、あの時から刃更と共に主従契約の関係をさらに深め、戦闘力を向上させている。

……それでも。

結界が消え去っても『咲耶』の加護は弱く、顕在化した『白虎』と対峙した時の半分程

度の力しか出せない。この状況で、特A級レベルのゼストと戦うのは本来ならば無謀だ。

もし――勇者の一族として相対していたら、柚希は即座に撤退を選んでいただろう。

そして仲間を集めて充分に戦力を整えてから、再びゼストに挑んだに違いない。

……だけど。

今の自分は勇者の一族ではなく、野中柚希という一人の少女だ。刃更がまだ戦っているのに、自分だけがここで退く訳にはいかない。何より、ここで退いてゼスト以上に強いであろうゾルギアと合流されたら、さらにこちらは劣勢に立たされてしまう。

――幸いにも、現在ゾルギアはこの場を離れているらしい。そして、対一の状況でもなお、ゼストとの実力差はまだかなり開きはあるが、

……こっちには澪がいる。

ウィルベルトの力を欲している以上、向こうも澪に対してそうそう下手な真似はできない筈だ。仲間を人質にするみたいで情けない話だが、実力差のある相手と戦って勝たなければいけないこの状況で、綺麗事など言ってはいられない。

ゾルギアがいつ戻ってくるか解らない以上、求められるのは可能な限り早い決着。

実力差の大きい相手にそれを成すのは難しいが、向こうも澪を下手に傷つけられず、また逃がす事もできないというハンデがある。それでもゾルギアが戻る時間を稼ぎながら戦

う事で、そうした不利を埋めようとしてくるだろう。しかし、

「――ゴチャゴチャ考えてても仕方がないわ。やるわよ柚希」

こちらが出した結論と同じ事を、隣の澪が言ってきた。だから、

「うん――なら、先に行く」

そう言って、野中柚希はゼストへと向かって一気に疾走した。と同時、

「愚かな……」

ゼストが複数の魔法陣を展開し――直後、石造りの床が轟音と共に割れ爆ぜ、無数の円錐状の槍となって柚希を襲った。迫り来る鋭い先端に対し、柚希は体勢を前に傾けて加速を行ない低く跳躍。槍となった床の先端を避け、側面を蹴る事でさらなる跳躍を行ない、そのまま一気にゼストとの距離を詰めると、霊刀『咲耶』による初撃を見舞った。

放ったのは袈裟斬りの一閃。対するゼストが行なったのは、背後への跳躍による回避だった。宙や横へ避ければ、柚希という遮蔽物がなくなるため、澪の魔法に対して無防備になる。かといってその場に留まり爪や障壁で受ければ、柚希が返す刀から連撃へと繋げ、そうして足を止めればやはり澪の魔法への対応が難しくなっていただろう。よって、ゼストが選んだ後方への回避は間違いではない。だがそれは――柚希が技タイプで、中・近距離戦闘をこなせる全応型剣士ではなかったらの話だ。後方へと飛んだゼストが、

「っ――――」

こちらの視線の先で息を呑んだ。回避された柚希の剣閃が、虚空を斬る事で空気の刃を生み出し、前方へ――ゼストへと放っていたからだ。とっさに魔法の障壁を展開して防ぐゼストに対し、柚希は追撃のため前へと駆けながら、次々と『咲耶』を振り抜いて空気の刃の連撃を見舞う。そうしてゼストをその場に磔にしようとして、

「――――っ!?」

しかし柚希は反射的な動きで左へと跳んだ――と同時、柚希の右の側頭部の髪を擦めて、不可視の何かが抜けていった。

……今のは……っ!?

柚希は俄に焦りを得る。恐らくは上系の魔法なのだろう。刃更のメールには、協力者からこのゼストに関して『処女』というキーワードが出たとあった。黄道十二帯における『処女宮』は、土や地に関連している。先程までの魔法がいずれも上系のものである事を察するに、恐らくはゼストの能力に関連していると考えて間違いない筈だ。しかし、

……まるで見えなかった……。

恐らくは、高速で飛ばした石などの飛礫か。魔法で硬度が上げられている事を考えれば、その速度と威力は銃器を遥かに上回る。あんなものを見切って避けるのは、ほとんど不

可能に近い。横へ跳んで体勢を崩した事で追撃を止められ、苦い顔になったこちらに対し、

「やはりその程度ですか……」

冷たい瞳で言ったゼストが、こちらへ向かって手をかざしてきた――その刹那、

「――なら、アンタはどの程度よ」

澪の魔法が完成し、ドンっという低音と共にゼストが紅蓮の炎に包まれた。そして、

「ボサッとしてんじゃないわよ、柚希っ！」

こちらへの叱咤を行なった澪は、既に次の魔法を唱え始めていた。だから、

「――――」

柚希もまた即座に動いた。そうだ、この程度で倒せる相手ではない。

「お願い『咲耶』――少しで良いから力を」

燃え盛る炎柱に向かって駆けながら、柚希は手の中の愛刀へ呼び掛けた。

そして鞘の中に『咲耶』を戻して霊力を高めると、炎の中にいるゼストへ向かって居合いによる一閃を放つ。キンという甲高い音と共に、炎が上下真っ二つに切り裂かれ、

「――離れて！」

澪の呼び掛けに、柚希がその場を飛び退いた瞬間、巨大な雷球が次々に降り注いだ。放電のスパーク音と、雷撃が石造りの床を打つ轟音が連続して響き渡り、

「――やった!?」「っ――駄目」

歓声を上げた澪に、柚希は厳しい表情で言った。斬った手応えは炎しかなかった。とっさに背後を振り返ると、離れた場所に佇むゼストが既に魔法陣を展開しており、

「――――」

不可視の飛礫が、一斉に柚希へと向かって解き放たれた。

対する柚希は回避を諦め、面状に斬撃を繰り出す事でこれに対応。剣撃による障壁で、ゼストの魔法の飛礫を弾き飛ばすが、

「――――っ!?」

想像以上の威力に、受けた『咲耶』が柚希の手から弾かれ宙を舞った。

しまった、と思った時にはもう遅い。

「――終わりです」

そうこちらへ告げたゼストが、止めの魔法を解き放ってきた。

魔法の飛礫を解き放った瞬間、ゼストは戦いが決着する事を悟った。

これで残るは澪だけだ。ゾルギアが彼女を欲している以上、間違っても殺す訳にはいか

ないが、自分と澪の実力差があればそう傷付けずに無力化する事はできるだろう。

そして柚希が、黒曜石の弾丸に撃ち抜かれる瞬間を見届けようとし、

「――――」

しかし、柚希の前へ展開された障壁が、彼女をゼストの魔法から守った。

誰の仕業かなど言うまでもない。だから、ゼストは無言でそちらを見た。

実力差は歴然の状態で、それでもこちらに対して微塵も戦意を失っていない成瀬澪を。

……思ったよりも面倒ですね、傷付けずにというのは……。

刃更と主従契約を強めて戦闘力を上げていたのは知っていたが、絆を深めた事でどうやら精神的にもかなり成長しているらしい。そして心の成長は、単なる戦闘力とは異なる強さをもたらす。誰かを強く想う事で、その想いを力へと変える事ができるからだ。

……ですが。

そうした想いが強ければ強い程、心は揺さぶりやすくなる。そして、澪や柚希の心の拠り所である刃更は、今はこちらの手の中にあるのだ。だから、

「……残念ですね成瀬澪」

ゼストは澪へと告げる。

「敵の手に落ち、窮地に陥っているというのに……それでも貴女が慕う東城刃更は今、

貴女ではなくマリアを助けようとしている。どういうものですか？　大切な相手に、自分ではなく自分を裏切った者を優先された気分というのは」

「……」

こちらの言葉に、澪は黙り込んだ。それはゼストが口にした言葉が、純然たる事実だからだ。大げさな嘘や誇張で動揺を誘う必要はない。ほんの少しだけ刃更への信頼を揺るがす事ができれば、その僅かな不信が迷いとなり、戦いにおける隙となる。そして、

「……そうね。確かに、あまり良い気持ちはしないわ」

ポツリと、澪が俯きながら言った。

「でも仕方ないわ。付き合いはまだそんなに長くないけれど、それでも刃更がどういう奴かは解るわよ。アイツを騙して近付いたあたしや万理亜を、それでも刃更は許して、そして守ってくれた。それこそ命を懸けてね」

だから、

「断言してあげるわ。別に刃更はあたしを見捨てた訳でも、後回しにした訳でもない。きっとアイツが目を覚ました時に、そこに万理亜がいたのよ。そしてアイツはあたしだけじゃなく、万理亜の事も助けに来ていた。人質を取っている、卑怯なアンタ達から救い出すためにね。だから今、あの子を助けようとしているのよ」

「随分と都合の良い解釈ですね……本当にそうだとでも思っているのですか？」

「ええ思ってるわ。大体、眼の前で苦しんでいる万理亜を見捨てて駆けつけられても、ちっとも嬉しくないわよ。それに刃更は、あたしの事もちゃんと助けようとしてくれてる」

何故なら、

「ねえ柚希……アンタ、自分の意思であたしの方へ来たの？」

「まさか。刃更に言われて仕方なく」

あっさりと首を横に振る柚希に、澪はふっと笑う。

「ほらね。お生憎さまだけど、あたし達の関係はそんな安っぽい挑発で揺らぐような柔なものじゃないわ――アンタとあのゾルギアとは違うのよ」

「……どういう意味です？」

スッと眼を細めたゼストに、

「先刻、アンタとゾルギアが話している所を見たわ。どういう経緯で従っているかは知らないけれど、あの男を前にしたアンタはどこか無理をしているように見えた……」

そして、澪は余裕の笑みと共に胸元に手をやりながら言ってくる。

「羨ましいでしょう……あたし達と刃更の関係が」

「……。……大した自惚れですね」

そんな二人と共に暮らしている以上、この程度のやっかみは受け入れなくてはならないだろう。実際に自分は、そんな澪と柚希の水着姿も見てしまっているのだから。

……そうだった。

刃更は、自分が澪と柚希のプール授業を忘れていた理由を思い出した。一緒に忘れてしまいたい記憶があったのだ。澪と柚希が刃更に水着を見せる事になったのは、同居している某ロリエロサキュバスのせいだ。そしてあの小悪魔が、ただの水着のファッションショーで終わらせてくれる筈がなく、案の定Hな悪戯が敢行される事になったのである。

いかん。昨夜の澪と柚希が脳裏に。しかもそれが、すぐ眼の前にいる現在の二人と重なってしまう。だから刃更は俯き気味に赤面したまま、ロッカーから体操服を取り出した。

「じゃあな二人とも――滝川行くぞ」

「へ？　ああそうだな……って速っ!?　危ねえってバサっち、何このスゲー早歩きっ!?」

早口で滝川の腕を取り、こちらの歩く速度に驚く彼を無視してズンズンと廊下を行く。

キョトンとしている澪と柚希も、こちらを睨んでいた他の男子達も置き去りにする。

これ以上、下手に昨夜の事を思い出してしまうのは危険だ。

体育が始まる前に鼻血を噴いて保健室に行くのは、幾ら何でも気が早すぎるだろう。

ゼストは薄い笑みを返すと、澪に対して次の言葉を放った――それは揺さぶりの本命。

「ですが……その割には、友人の榊千佳と東城刃更の逢い引き現場を目の当たりにして、随分と動揺していたようですが？」

「っ……それは！」

途端に澪の顔がカッと赤くなり、それまであった余裕の代わりに生まれたのは隙だ。

その隙をゼストは逃さない。密かに唱えていた魔法を発動させ、澪の足下の床を変質させて拘束を図る。澪を無力化すれば、柚希一人など簡単に始末できる。だからそうしようとして、しかし――全く予期せぬタイミングで轟音と衝撃が建物全体を揺らした。

「なっ――」

驚きと共に、ゼストは即座の思考で確信する。間違いない……今のはマリアが放った一撃だ。マリアが再び、刃更に対して攻撃を行なったのだ。

……馬鹿な、一体何をして……っ。

ゼストは焦燥を露わにする。やはり早めにマリアを呼び戻しておくべきだった。ゾルギアが望んでいる以上、刃更を失う訳にはいかないというのに。

そんな刹那の焦りと逡巡が、逆にゼストに隙を生んで、

「――人を挑発しておいて考え事？」

しまったと思った時には、もう滂が眼の前に居た。そして、

「だったら――これでも食らいなさい」

そう告げられた瞬間、スパーク音と共に雷撃魔法の奔流がゼストの全身を駆け抜けた。

## 4

己の眼の前にある光景に、呆然と立ち尽くす少女がいた。

解放した自身の力で、己を止めようとしてくる青年に三撃目を見舞ったマリアだ。

霊子中枢を一時的に暴走させている今のマリアは、準S級クラスの戦闘力を誇る。

それでも、ゼストから刃更を殺さないように言われていたため、最初に放った一撃目は、警告の意味も込めて手加減をした。しかし刃更は立ち上がり、再びマリアへ向かって来ようとした――だから、今度は完全に意識を断ち切る二撃目を叩き込んだのだ。

刃更の肉が悲鳴を上げる程に軋み、骨が砕ける確かな手応えをマリアは得て。

そして吹っ飛んだ刃更は、そのまま意識を失った。だからマリアは、動かなくなった刃更を見つめながら、これで終わりだと思った。

刃更の抵抗も――そしてマリアと彼の関係も、完全に終わったと思っていた。

――それなのに。刃更はふらつきながらも、ゆっくりと立ち上がってきた。

信じられなかった。無論、今のマリアが本気で刃更に拳を叩き込めば、彼の肉体は木っ端微塵になってしまうため、二撃目も全力という訳ではなかった。

それでも、トラックに撥ね飛ばされた程度の威力はある。本当ならば、もう動ける筈はなかった。だが刃更は立ち上がり、再びマリアへと歩を進めてきた。

そんな彼の姿に、マリアは叫びながら殴りかかった。口にしたのは言葉ではない、感情任せの絶叫だ。マリアの拳を受けた刃更は二度吹っ飛び――石造りの壁にクレーターができる威力で叩き付けられ、そのまま前のめりに床へと転がった。そして、

「そんな……」

マリアは今、呆然と立ち尽くしていた。想定していた以上に刃更を傷付けてしまったからではない。想定していた以上のダメージを与え、今度こそ絶対に動けなくなった筈なのに――それでもマリアの眼の前で、動き出したものがあったからだ。

動いたのは刃更の右手だった。床を撫でるようにして動いた刃更の指が、ゆっくりと握られ、力を込めた拳になってゆく。

「な、何で――」

マリアは愕然の声を上げた。こちらの二度の攻撃を受けた刃更の全身はボロボロで、出

血もしていた。もうできる事はないと言ったのに。もうできる事なんてない筈なのに。

それでも彼は　東城刃更は立ち上がろうとしている。

「な、何を立とうとして……死にたいんですか刃更さんっ!?」

マリアは思わず叫んでいた。刃更が立ち上がれば、また自分は彼を攻撃するしかなくなる。だが、刃更はもうとっくに限界の筈だ。もしマリアが次に刃更へ攻撃を当てたら、今度こそ彼は死んでしまうかもしれない。だから、それだけは絶対に避けたかった。

ここで刃更を殺してしまったら、今まで自分は何のために苦しんできたのか解らない。

「……そんな訳、ないだろ……っ」

だが、倒れた身体を支えるように地面についた刃更の左手が、ゆっくりと彼を起き上がらせる。そして握っていた右手で右膝を摑むと、刃更の下半身に力が戻って。

くっ……と、呻くような声と共に、とうとう刃更は立ち上がった。そして、

「――だけど……仕方ないだろ？　死ぬよりも嫌な事があるんだから……」

成体に変身しているマリアと同じ高さの目線で、刃更はこちらを見詰めながら、

「お前が……そうやって苦しむのは、そんなお前を助けられないのは……」

「っ――――」

刃更の言葉に、マリアは息を呑んだ。そして理解する。

今の刃更を支えているのは、マリアに対する想いなのだと。

――マリアだって、人質に取られている家族の事を想っている。

ここまで周囲を裏切った以上、せめて彼女を助けるために己の全てを懸けている。

だが。人質となった家族を助けようとしながら、それでも心のどこかでは助けられないと想ってしまっているマリアと。マリアだけでなく、マリアの家族も――さらには滔も助けようとして、本当にそれを成し遂げようとしている刃更とでは想いの質が違っていて。

……そんな事……っ。

くっと唇を噛み締めたマリアに対し、こちらへと歩を進めようとした刃更が、

「……っ」

ふと痛みに顔を顰めてよろめき、床に片膝をついた。

とっさに駆け寄ってしまいそうになるのを、マリアは必死に堪える。

――この部屋の様子は、恐らくゼストに視られている。もし刃更を助けるような真似をすれば、人質の家族が殺されてしまうかもしれない。

そんな中、眼の前の青年が立ち上がり、再びこちらへと歩き始めた。怪我をして本当なら動けない筈の刃更が、無傷なのに動けずにいるマリアへと一歩ずつ近寄ってくる。

そして――マリアの下へ、とうとう刃更が辿り着いた。

「う……あ……っ」

実力は明らかにこちらの方が上。それなのに、狼狽える事しかできないマリアに対し、

「――助けるから。お前も、澪も、お前の家族も。みんな必ず助けるから」

だから、

「お前も――頼むから、お前自身の事を諦めないでくれ」

そう言って、刃更がそっとこちらを抱き締めようとしてくる。

「っ――――」

だから、とっさにマリアは動いていた。

決して譲る事のできない己の想いを込めた右の拳を、東城刃更の左胸へと叩き込む。

渾身の一撃だった。その直撃だ。刃更などひとたまりもなかった――その筈なのに。

「……」

こちらの拳を受けても、刃更は倒れなかった。

マリアは本気だった。断じて力は抜いていない。

それでも――今のマリアに出せる全力は、刃更の胸を軽く叩ける程度しかなくて。

「何で……っ」

嗚咽を堪えるようにして呟いたマリアは、刃更にぐっと肩を抱き寄せられ、

「無理だよ……優しい妹に、本気で兄貴を殴れる訳ないだろ」
言われる。たとえどれだけ力で上回ろうとも。本当は刃更を傷付けたくなかったマリアが、本当にマリアを助けようとしていた刃更に勝てる筈はないだろうと。そして、
「今まで、ずっと一人で苦しませてゴメンな――後は兄ちゃんに任せとけ」
その温かな言葉に、
「う……ぁ、っ……あ」
ギリギリの所で堪えていた涙が、マリアの瞳の端から零れ落ちて。
その瞬間――それまで堰き止めていた感情が、一気に洪水となって溢れた。
「――――――」
だからマリアはもう、己の涙も感情も我慢できなかった。
泣く。刃更の腕の中で、子供のように大きな声を上げながら。
その泣き顔は――大好きな兄に縋り付いて涙を流す、幼い妹のものだった。

5

滞の雷撃魔法でゼストを戦闘不能にした後。

持ってきていた魔族の拘束用ロープで、野中柚希はゼストを縛り上げた。
止めを刺さなかったのは、ゾルギアの弱点などを聞き出すためだった。留守にしている間に滞を任せる位だ。恐らくゼストは、ゾルギアにとって最も大切な配下なのだろう。
だとしたら、ゾルギアの秘密を知っていてもおかしくはない。そう思っていたのだが、
「……」
柚希や滞が何を聞いても、ゼストは一切答えようとはしなかった。滞の話では、ゾルギアと接している時のゼストは辛そうにしていたという。よって、もしかしたら万理亜のように無理やり従わせられている可能性があり、だとしたら協力させる事ができるかもしれないと思っていたのだが、
「どうやら……協力して貰う事も、口を割らせる事も無理みたいね」
やれやれと嘆息する滞に、柚希は告げる。
「なら生かしておくのは危険。彼女を消滅させるべき」
魔力を封じるロープで縛っていても絶対に安心という訳ではない。反撃に遭う危険性はゼロではないし、ゾルギアが戻ってきて合流されでもしたら今度こそ勝ち目はない。
「……確かに、あたし達が何を言ってもこの人を説得するのは無理かもしれない」
でも、と滞。

「刃更なら何とかならないかしら……あたしや万理亜の素性を知って、それでも受け入れてくれたアイツなら、この人の心だって動かす事ができるかも」

「……」

澪の提案に、柚希は黙り込んだ。ゼストですら柚希と澪の二人がかりで挑み、隙を突いてやっと倒せたのだ。たとえ刃更が加わったとしても、高位魔族のゾルギアと正攻法で戦って勝つ事は、恐らくかなり厳しい。だとしたら、刃更に賭けるというのは有りだ。

「解った……だったら、一刻も早く刃更と万理亜の所へ行かないと」

先程のような衝撃や轟音は既に収まってはいるが、それでもまだ戦闘が続行中の可能性もある。ゼストを倒した事を教えれば、人質を取られている万理亜や、彼女を説得しようとしている刃更の助けになるかもしれない。とはいえここにゼストを残して行って、万一逃げられでもしたら目も当てられないし、かといって彼女の実力を考えれば見張りが一人では危険だ。ここは拘束した状態のゼストを連れて、三人で向こうへ行くのがベストだろう。そうして意見を一致させた柚希と澪が頷き合い、いざ動こうとした瞬間、

『つ――――？』

いきなり身体が上手く動かなくなり、柚希と澪は同時に戸惑いを得た。それどころか声も出せず、呼吸さえもままならない。そこへ、

「――ほう。私が少し留守にした間に、随分と暴れてくれたようだな」

ふと上から、笑みを含んだ声がした。辛うじて顔だけを上げて見上げれば、そこには柚希は初めて見る男性魔族の姿があった。

「ゾルギア……っ！」

隣の澪が、憎しみを込めてその名を呼ぶと、

「おや……先程と同じ力で精神拘束をしたのだが、今回は喋れるのか」

ゾルギアは楽しそうに言って、柚希と澪の前へと降り立った。その瞬間、

「っ――……」

野中柚希は思わず息を呑んだ。高位魔族と相対したのは初めてではない。だが、……まさか、ここまでなんて……っ。

柚希は自分の目算が甘かった事を思い知る。ゾルギアが身に纏うオーラは、柚希の想像を遥かに超えたものだった。身動きできない状態で柚希が歯噛みしていると、

「やはり仲間の存在は、心強いと見える……ん？」

ふとゾルギアがこちらに気付いた。そして、這うような視線を柚希へと向けてきて、

人前で着替えを行なう際、東城刃更はなるべく人目に付かないように心掛けている。

――その理由は五年前。

勇者の一族の里を悲劇が襲った際に、全身に負った重傷の凄惨な痕があるからだ。そのため真実を話せない周囲には、幼い頃に交通事故に遭ったのだと説明している。

スチール製のロッカーの扉を開け、ボタンを外してシャツの前を開けてゆく刃更に、

「しかし、何度見ても凄え傷痕だな……」

隣で同じく体操服へと着替えながら、しみじみとした口調で滝川が言った。

「田舎に居た頃に負った傷って話だが、よっぽどひどい事故だったって訳だ」

魔族である滝川は、刃更が元勇者の一族である事と、《里》を追われた過去を知っている。

「……何だよ、改まって？」

夏休み明けの二学期からこの聖ヶ坂学園へ転入し、およそ一ヶ月――刃更は既に、これまで通った学校の時と同じく、偽りの説明を済ませていた。鍛え抜かれた肉体を覆う筋肉についても、事故後のリハビリの一貫でトレーニングを行なったと伝えてある。

とはいえ、見る方も見られる方も余り気持ちの良いものではないのも事実だ。よって無闇に身体を晒す事を避けるため、刃更は更衣室では一番奥のロッカーを使っていた。体操

「ふむ……これはまた。映像で見て知ってはいたが、こちらも実物はさらに素晴らしい素材ではないか。二人がかりとはいえ、どうやらあのゼストを倒したようだし」

喜べ、

「お前も成瀬澪と一緒に、私のものにしてやろう……あの東城刃更という小僧では決して与えられない、至高の快楽と共に」

「……誰がお前などに」

「なあに……お前も成瀬澪も、すぐに自分から私を望むようになるとも」

怯む気持ちを堪えてキッと睨んだ柚希に、ゾルギアは肩を揺らすと、

「さて……無事かゼスト」

そう言って、柚希の隣のゼストの前に立った。

「……閣下、申し訳ありません」

拘束用ロープに縛られ、床に膝立ちの状態のゼストが悲痛な顔で頭を垂れると、

「構わんさ……お陰で東城刃更に加え、こうして新たなオモチャまで手に入った」

「はい……」

優しい声で言われたゼストが、自分を心配してくれた主を見上げようとして。

――そんなゼストに対し、ゾルギアは無造作に腕を一閃した。

生じた衝撃波がゼストを巻き込み、轟音と共に彼女を背後の壁へと叩き付けた。

衝撃と共に石壁へと叩き付けられ、そのまま床へと倒れ伏したゼストは、

「っ……ゾルギア、様……？」

ボロボロになりながら顔を上げ、そしてゾルギアを見た。すると、

「おお、すまん……大丈夫か」

ゾルギアが笑みを含んだ声で謝っていた　ゼストにではなく、ゼストを襲った衝撃波に巻き込まれて横に飛ばされた柚希に対して。

「お前も後で私のものになるというのに、余計な傷を増やしてしまったな。だが心配はいらない。後できちんと治してやろう――全身を隅々まで綺麗にな」

「……」

そんなゾルギアを呆然と見詰めるゼストに、ようやくゾルギアはこちらを見て、

「折角手に入れた獲物の番すら、ロクにできないとは……」

フンと忌々しそうに鼻を鳴らして、

「よもやここまで使えぬとはな――ゴミめ」

「そんな……閣下、私は」
吐き捨てるように言われ、思わず悲痛な表情になるゼストに、
「それだけならまだしも――ゼスト、貴様この娘達を羨んだな？　自分の主も、あの青年であったならと」
「っ――――」
それは滞に投げ掛けられ、少しだけ想いを馳せてしまった己の可能性だった。
僅かに抱いていた想いを見透かされ、とっさに身を強ばらせたゼストに、
「お前の思考は、常に私に届いている――誰の手で作り出されたのか忘れたか」
そして、とゾルギア。
「使えぬ上に、忠誠すら失った配下はもはやゴミ以外の何物でもない――死ね」
忌々しそうにそう言って、ゼストを生み出した主が彼女に対してとある呪を紡いだ。
……そんな……。
ゼストは思わず息を呑む。それはゼストをたちどころに絶命させる呪文だった。
「あ……あ……」
途端に紫色の光に包まれたゼストは、もはや愕然とする事しかできない。
他の配下のように寵愛を受けた事は、これまでに一度もない。それでも主であるゾル

ギアを支えるため、ゼストはずっと懸命に仕えてきた。それが女として生まれながら、女として主に仕える事のできない自分にとって、唯一許された生き方だったからだ。

――それなのに。ゼストは今、主に切り捨てられ、そして殺されようとしていた。

だが、ゼストは一切の抵抗ができない。己に向けられた主の無慈悲や理不尽に抗えない。

それ程までに魔導生命体のゼストにとって、創造主という存在は絶対だった。

そしてゼストを包んでいた紫の輝きが増幅し、即死の呪いが発動した――その瞬間。

「――――」

一陣の風が、ゼストの横を駆け抜けた――と同時。

キュイィインという甲高い音と共に、ゼストを殺そうとしていた呪いの光が霧散した。

「……」

一体何が起きたというのか――呆然となったゼストは、しかし確かに見る。

魔剣を装甲化した右手で握りしめ、ゾルギアへと向かって駆けてゆく青年を。

東城刃更を。

広間へと駆け込んだ東城刃更は、迷う事なく動いていた。

澪と柚希が無事である事。ゾルギアと思われる男性魔族がいる事。

そしてゾルギアが、配下であるゼストを始末しようとしている事。

それら全ての状況の確認と把握を一瞬で済ませた刃更は、全速で駆けながらブリュンヒルドを具現化し、疾走の速度を緩めぬままゾルギアとゼストの間に飛び込むと、

「――――」

両手で握り締めたブリュンヒルドを一閃し、《無次元の執行（ハイ・ノンゲシフト）》を繰り出した。と同時、甲高い鳴動音を響かせながら、ゼストを殺そうとしていた呪いが消滅する。そして、

「「っ――刃更っ!?」」

同時に驚きの声を上げた澪と柚希の声を聞きながら、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ」

刃更は高位魔族のゾルギアに微塵も怯む事なく、ブリュンヒルドで斬り掛かった。

――高位魔族を相手に小細工抜きで行くほど、東城刃更は自惚れてはいない。

上段からの振り下ろしの斬撃を途中で袈裟斬りに変化させ、ゾルギアの肩口を狙う。

白い糸を引くような高速の剣閃が、ゾルギアの左肩へと吸い込まれ、

ガッキィイイイイイイイイイン！

しかしギリギリの所で、ゾルギアが右の手に生み出した黒刃の剣に阻まれる。

「ふむ……この状況で冷静な思考を失わず、フェイントを絡められるのは悪くない」
だが、とゾルギアは笑いながら、
「速さはそれなりでも、その程度のフェイントが一つでは、残念ながら私には届かんな」
「っ……」
刃更が表情を硬くし、斬り結んでいる状態から背後へと跳んで距離を取ると、
「しかし即死の呪いまで無効化できるとはな……理屈は解らないが、大したものだ」
と、ゾルギアは興味深そうな視線を向けて、
「私の結界も消し去れたようだし……報告では、カウンターでのみ発動できる技という話だったが、そうした制限を応用で乗り切れる程度には使いこなせているようだな」
「……」
薄い笑みを向けられた刃更は、ブリュンヒルドを構えながら無言を返した。
ゾルギアが口にした応用という推測は正解だ。
――《無次元の執行》は本来、相手の攻撃に対するカウンターにしか使えない。
しかし、刃更はそうしたハンデを、「攻撃」という定義の領域を広げる事で、《無次元の執行》の発動にある程度の汎用性を持たせる事を可能にしていた。
先程ゾルギアの結界に対して《無次元の執行》を繰り出せたのは、自身が内部に入って

外界と隔絶された状態を「結界から攻撃を受けている」とみなしたからだ。

「それにしても、マリアを説き伏せる事に成功しておきながら、ボロボロの状態で一人で来るとは……今のアイツの力は、お前達にとって私を倒せる数少ない可能性だろうに」

「……万理亜はお前に人質を取られている」

と、ようやく刃更は口を開いて、

「お前と対峙したらどうしたってその事を思い出すし、脅迫や揺さぶりで動揺させられる可能性があるだろ。今のアイツを、お前と戦わせるのはリスクが高すぎる」

万理亜本人は一緒に戦いたいと言ってくれたが、刃更は許可しなかった。気持ちは解るし、有り難くもあるが、万理亜はずっとゾルギアの脅迫を受けていた。よって精神的に優位に立たれ、操られやすい関係にある。幾ら変身して強い力を得た状態でも、それを発揮できなければ意味がない。現に万理亜は、家族を人質に取られている状況でも刃更を殺せなかった。それ程までに万理亜という少女は優しい心の持ち主なのだ。だが、その優しさはゾルギアが付け込む隙になってしまう。だから刃更は、万理亜を置いてきたのである。

「成る程。どうやら頭もそれなりに回るらしい」

と、愉快そうに笑みを深めながらゾルギア。

「だが解せんな……そこまで考えられるお前が、なぜ敵であるゼストを助けた？　よもや

死にゆく者は敵であろうと助けるような、狂った正義心でも持ち合わせているのか？」

「……生憎と、そんな崇高な信念は持ち合わせていない」

ただ、と刃更。未だに立てないまま、呆然と刃更を見ているゼストに視線を移して、

「万理亜と同じで、彼女も無理矢理お前に従わせられていた可能性がある。だとしたら、彼女は俺達の敵じゃない。助ける理由はそれで充分だ」

「甘い事だな……お前と成瀬澪やそこの少女が結んでいるような遊び半分のものとは違って、私とゼストの主従は絶対だ。先程のように、下す命令の中には死ぬ事も含まれる。ここで私が改めて命令すれば、お前に牙を剝くとは思わないのか？」

「その時は、澪と柚希がまた彼女を抑えるさ」

縛られているのを見るに、恐らくは刃更と万理亜が対峙している間に、澪と柚希の二人が戦い、勝利していたのだろう。滝川が厄介だと言っていた相手だ。ゾルギア程ではないにせよ、相当な実力の持ち主だろうし、改めて正面から戦えば澪達が勝てる保証はないが、拘束用のロープで縛られている今の状態ならば問題はない筈だ。しかし、

「――残念ながらそれは無理だな」

とゾルギアは笑った。

「生憎とそこの二人は、今は身動きができない状態にある……私が縛っているからな」

「気を付けて刃更っ……そいつ、おかしな術か魔法をっ！」
澪が叫び、隣の柚希もまた肯定の苦い表情を見せた時だった。
「無駄だ　私の精神拘束を避ける事はできない」
ゾルギアの鋭い視線が、瞬で東城刃更の全身を射貫いた。

ゾルギアは、刃更がブリュンヒルドを構えた体勢のまま動けなくなったのを見た。
「――――っ？　こ、の……っ」
突然の事に混乱を得ながらも、必死に拘束から抜け出そうともがく刃更に、
「先程までの威勢はどうした？　この程度で動けないようなら期待外れもいい所だぞ」
ゾルギアの精神拘束は特別な術や魔法ではない。単に敵意や殺意といった意志を圧力に変えて相手を縛っているだけだ。その効果の大きさは実力差に比例する。
「あのジン・トージョーの息子と聞いていたから、どれ程のものかと思っていたが……この程度の息子のために最強の勇者の称号を捨てたのか。父親の情か知らないが、かつては戦神とまで呼ばれた男が、下らん存在に成り果てたものだ」
「――――」

服に着替え、脱いだ制服を備え付けのハンガーに掛けてロッカーの中に入れる刃更に、

「んー、大変だなと思ってよ」「？　何がだ？」

同じく着替え終えた滝川に言われ、キョトンと問い返すと、

「いや……バサっちの田舎じゃ、色々と怪我が多い事は知っているぜ？　でも野中を始め、この間こっちに来ていた連中はどいつも綺麗な身体をしていた。恐らくは魔法みたいに良い薬か、もしくは魔法使いみたいな医者でも居るんだろう。それなのに、バサっちにだけは消えない傷痕がある。バサっち以外にも、同じ事故に巻き込まれた奴だって居ただろうに――だから、大変だなって言ってるんだよ」

その言葉に、刃更は無言を返した。

――滝川とは手を結んでいるが、刃更は五年前の悲劇の詳細までは伝えていない。

無闇やたらと話して良い事ではないからだ。自分達はそれだけのものを失っている。

そのため刃更は、澪や万理亜にも詳しい説明はまだしていない。

しかし、滝川は恐らく刃更の事情に大方の察しを付けているのだろう。だから、

「……仕方ないさ、問題を起こしたのは俺なんだからな」

そう言って、ロッカーの扉を閉めた刃更は窓から外を――広がる空を見上げた。

遠く離れた故郷へと想いを馳せるように。

蔑みを込めた嘲笑に、言葉を失った刃更に対し、

「安心しろ。本来なら精神拘束で縛られるような虫ケラのような男を生かしておく趣味はないが、稀少な能力を持つお前のような奴は別だ。成瀬澪の中に眠るウィルベルトの力と同様に、その力がどのようなものかを解析し、お前も私の物にしてやろう」

ゾルギアはゆっくりと歩み寄り、

「まずは――お前の頭の中を見せて貰うとしようか」

そう言って、刃更の額に向かって左手を伸ばした――その瞬間、

「っ――――？」

反射的な動きでゾルギアが背後へ跳んだのと、それまでゾルギアが居た場所を刃更がブリュンヒルドで横薙ぎにしたのは全くの同時だった。ふわりと床に着地したゾルギアは、

「ほう……私の精神拘束から強引に逃れたか。どうやらお前にとって、自分が父親の足手纏いになっている事は耐え難い事実のようだな」

ふっと笑ったゾルギアに、刃更は俯いたまま、

「俺の事は好きに言えば良い……お前の言うように、俺は大した奴じゃない――だが、と刃更。顔を上げ、激しい怒りを宿した瞳でこちらを見据えて、

「親父を――東城迅を悪く言う事だけは、誰だろうと許さない……絶対に」

剣を構えた刃更にはもう、ゾルギアに対する恐れや迷いはなかった。だから、

「そうか……ならば、今から私が教えてやろう」

ゾルギアは冷たい笑みを浮かべて、

「――覚えておけ。虫ケラとは、虫ケラから生まれるものだ」

そう告げると同時――正面の刃更が、弾かれたようにこちらへ向かって駆けだした。

本来――東城刃更の実力は、ゾルギアの精神拘束から脱せられるレベルにはなかった。

それでも刃更がゾルギアの支配から逃れられたのは、これまでにもゾルギアと同レベルの相手と対峙した経験があった事が挙げられる。

五年前の、勇者の一族の若者に取り憑き、《里》を壊滅状態まで追い込んだ邪精霊。

先月の、ウィルベルトの力を暴走させてしまった滝。

そしてつい先程の、霊子中枢を暴走させて変身した万理亜。

そのいずれもが準S級やS級クラスの力を持っており、それらとの相対が刃更にゾルギアの精神拘束へ抗うための素地を作っていた。

――だが。そうした経験以上に、今の刃更を突き動かすものがあった。

それは灼熱のように燃え上がる感情。
大切な妹を――涛と万理亜を卑怯な真似で傷付け、二人の心を苦しめ続けてきた男。
さらに刃更が誰よりも尊敬している父を――迅までをも侮辱した相手。
そんなゾルギアに対し、東城刃更は身体の奥から湧き上がる怒りを力に変えて行った。
踏み出しからの二歩で疾走へと至り、そしてゾルギアの剣の間合いの手前でさらに加速を入れて前へと跳躍。一瞬でゾルギアの背後を取り、水平に斬撃を繰り出す。しかし、
「――ふっ」
ゾルギアは笑みと共に、後ろ手に剣を回してこちらの攻撃を受け止めた。
甲高い剣戟の金属音が鳴り響き――しかし、その余韻が生まれるより先に刃更は己の肉体に次の動作を入れていた。滑るようにして行なった石畳の床への着地から、刃更は身を低くしながらの疾走へと移行。一気にゾルギアとの距離を詰め、
「っおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ」
刃更は連続する高速斬撃へと繋げてゆく。至近距離で行なう高速フットワークで絶えず姿勢と立ち位置を異なるものにしながら、次々と斬り掛かるこちらに対し、
「先刻も言ったが――スピードは悪くない。人間にしては相当なレベルにある」
こちらをそう評したゾルギアは、しかし刃更の剣撃をいとも簡単に捌きながら、

「恐らく勇者の一族の中でも、お前のこの速度に付いて来られた者はそうはいないだろう。そうして、これまでは速さだけで相手を圧倒できていたのだろうが」

生憎だったな。

「速さを優先した攻撃は見栄えは良いが軽くなるし、相手の先を取るため死角や不意を突く事だけに集中した攻撃は読みやすい。そんな小手先ばかりの子供騙しの剣が通用するのは、同等以下の相手だけだ」

絶え間なく鳴り響く剣戟音の中で、こちらの攻撃を受ける事に徹していたゾルギアは、

「父親から教わらなかったか？　剣とは――こうやって使うんだ」

そう言うなり、刃更の剣撃と剣撃の僅かな隙間に割り込む形で、黒刃の剣でこちらを下から薙ぎ払うように振り抜いて来た。とっさにブリュンヒルドで受けた刃更は、

「がっ――!?」

重い剣撃で真上へと弾き飛ばされた。そして、床を蹴ったゾルギアに一気に迫られ、

「くっ……このっ！」

崩れた体勢のまま刃更が強引に振り抜いたブリュンヒルドに対し、

「ただでさえ軽い剣を苦し紛れに振るとは――無様の極みだな」

ゾルギアが漆黒の剣身で軽く払うと、無音でブリュンヒルドが受け流された。

「な――――…」

金属同士の激突音すらさせない完全な見切りに、刹那に呆然を得た刃更に、

「――何をそんなに驚いている？」

刃更に肉薄したゾルギアが、息が届きそうな距離で冷笑を浮かべて言い放つ。

「まさかお前……自分と私との間にある実力差がまだ解っていないのか？」

と同時、刃更は背に重い衝撃を受けた。ゾルギアの剣の柄による打撃を貰ったのだ。

「がはっ……！」

衝撃が肺まで到達し、呼吸という概念を奪われた刃更は、そのまま床へと落下し、

「っ……――――くっ！」

それでも辛うじて足から着地。そのまま倒れそうになるのを床に片膝をついて拒否すると、呼吸がままならない状態のままバッと上を振り仰いだ。

すると、宙に浮いた状態のゾルギアの剣が鈍い光を纏っており、

「地獄の炎を味わうが良い――」

そう言って振り抜かれたゾルギアの剣から、漆黒の炎が放たれた。虚空の大気を焼き尽くしながら一気に迫ってくる。

「くっ――うおおおおおおおおっ！」

とっさに刃更は《無次元の執行》でこれに対抗――ただし消去は間に合わず、辛うじて弾き散らす事しかできない。すると刃更の周囲に落ちたゾルギアの黒炎が床へ触れると同時、一斉に連鎖爆発を巻き起こし、

「っがあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

その衝撃で吹っ飛ばされた刃更は、叩き付けられるように床を十m以上も転がった。

「――刃更っ！」

悲鳴のような声で柚希が叫び――その声が辛うじて刃更の意識を繋いだ。

「く……っ、う……あ……！」

だから刃更は必死に立ち上がった。ここで倒れてしまう訳にはいかない。

大切な家族を守るためには。大切な存在を失わないためには。

大切な妹と幼馴染を、卑劣な相手に奪われないためには――だから。

「……っ」

口元の血を手の甲で拭い、東城刃更は前を見た。すると既に宙から床へと降り立ったゾルギアが、薄い笑みを浮かべながらこちらを見ていて、

「良いぞ……不完全な発動でも私の炎を弾き散らせるとは。やはりその技は素晴らしい」

楽しみだ。

「その技とウィルベルトの力を得た時――魔界を統べる新たな王は私になるだろう」
「っ……させてたまるか、そんな事っ！」
この男の思い通りにだけはさせる訳にはいかない。
否定の言葉を叫びながら、刃更は再び前へ出た。

## 6

絶対に負けられない戦いだった。それなのに、
……クソっ！
東城刃更は激しい焦燥からくる苛立ちを募らせていた。スピードはこちらの方が上だ。攻撃速度、移動速度、反応速度――あらゆる面で刃更の方がゾルギアを上回っている。
――だが、それでも一太刀も入れられない。
ゾルギアは刃更が放つ攻撃をさらりと受け、簡単に捌き、あっさりと躱してゆく。
攻撃を凌がれ、フェイントを読まれ、速度を余裕であしらわれる。
スピードだけでは決して届かない、圧倒的な実力差がそこにはあった。
しかも――万理亜の話だと、ゾルギアは剣術以外にも多数の強力な魔法を使えるとい

う。先程の黒炎は魔法ではない。剣身に魔力を通わせ、それを放っただけだ。剣だけでも遊ばれている状態だというのに、これで魔法まで使われたら手も足も出ない。しかし、

……だからって、負ける訳にはいかないんだよ……っ！

兄として、幼馴染として、息子として――東城刃更には守りたいものがある。

眼の前の男は、そんな刃更の大切なものを奪い、汚そうとしている。

そんな事だけは断じて許す訳にはいかない。

……それに。

圧倒的な劣勢ではあるものの、それでも今はまだ状況はマシな方だ。ゼストを助ける際に《無次元の執行》の消去を成功させた事で、ゾルギアはこちらを警戒している。また刃更の能力を手に入れようとしているのか、こちらを生かして捕らえようとしていた。情けない話だが、そんな絶望的な実力差の中に微かな希望がある――だから、

……頼む、保ってくれよ……！

刃更は己の肉体にそう言い聞かせると、己の戦闘スタイルを切り替えた。

それはスピードタイプの無駄を省いた動きとは対極の戦い方。かつて霊槍『白虎』を操る高志との戦闘で使用した、全速の中に敢えて無駄な動きを入れる事で己の動きを相手に読み難くさせる、暴走に近いような戦闘方法だ。しかし、

……少しで良いんだ……。

ゾルギアを追い詰め、僅かな隙を作れれば、奴を倒すチャンスを作り出せる。だから、

「――――」

超神速の領域に身を置きながら、東城刃更はゾルギアへと仕掛けた。

「ほう……！」

そんなこちらを見て楽しそうな声を上げたゾルギアに、刃更は不規則と無軌道を組み合わせた連続攻撃を叩き込んでゆく。対するゾルギアは刃更が放つ連撃を捌きながら、

「定石を無視した特攻か……最後の悪足掻きとしては楽しめそうだ」

それでも余裕の笑みを浮かべ、刃更の攻撃を受けきってゆく。

しかし、そこからさらに刃更は加速。徐々に残像が生まれると、攻撃と攻撃が連なりから繋がりへと変わり、絶対を誇っていたゾルギアの防御を越え始める。そして、

「せえええああああああぁぁ――っ！」

裂帛の気合いと共に放った刃更の逆袈裟が、僅かながらゾルギアを捉えた。

ゾルギアの戦闘衣装の肩口に小さな裂け目が走り、

……行ける……っ！

微かながらも自分の剣が届いた手応えに、刃更が光明を見出した時だった。

「面白い……擦る程度とはいえ、この私に一撃を入れられるようになるとは」

ふっと感心したようにゾルギアは笑うと、

「――では、これならばどうだ？」

そう言った瞬間　ゾルギアの姿が虚空へ溶けるようにして見えなくなり、

「なっ――!?」

刃更はとっさに驚きの声を上げた。ゾルギアの気配はおろか、あの凄まじい魔力のオーラまでもが跡形もなく消え去っていたからだ。

表情を厳しいものにし、ブリュンヒルドを構えて周囲に視線を巡らせた刃更が、

「っ――？」

真横に気配を感じて息を詰めた時にはもう遅かった。

「が、は……ぁ……っ!?」

不可視の手で首を握り締められ、刃更はそのまま宙へと持ち上げられる。そして、

「どうした不甲斐ないな……スピードを活かして相手の眼から消える事は得意でも、相手に消えられるのは苦手か？」

こちらを嘲笑う声が眼の前の虚空からした。首をへし折られそうな力で摑まれながら、

「ぐうっ……く、おおおおおおおおおおっ！」

――すると東城刃更は、ふと外の景色にうっかり見過ごせないものを見た。
窓から見えるアスファルトの道路を、見覚えのある幼女がスキップで通過したのだ。
「なっ――!?」
思わずギョッとなった刃更は、慌てて窓に張り付き、さらに開け放って身を乗り出した。
すると視線の先　－男子更衣室の外を通り過ぎた幼女の後ろ姿が横へと曲がった。
その先にあるのは校舎の入口である玄関だ。そして幼女は、平然と玄関から校舎の中へと入っていった。一瞬だけ見えた満面の笑みの横顔に、激しく嫌な予感が膨れ上がり、
「？　どうしたよバサっち？」
「悪い滝川っ。急に頭痛と目眩が酷くなったから、俺ちょっと今日の体育は休むっ。先生には上手いこと言っておいてくれ！」
そうまくし立てると、東城刃更は男子更衣室を飛び出した。

## 2

聖ヶ坂学園の校舎内へ入った成瀬万理亜は、あっという間に目的の場所へと到着した。
彼女が足を踏み入れたのは、刃更達のクラスの教室だ。

東城刃更は、ブリュンヒルドを眼の前の空間に向かって強引に振り抜こうとして、

「――おっと」

しかし、それより先に背中から床へと激しく叩き付けられた。轟音と共に、刃更を中心にして石造りの床にクレーターが生まれ、

「がっ……う、……あ……っ！」

全身に走った衝撃と激痛に苦悶の声を上げた刃更は、それでも急いで左へと転がる。

と同時、ガキィィィン！　と刃更の右肩があった辺りの床を不可視の刃が貫いた。

「ははっ、上手く避けたな……良いぞ、そうこなくてはな」

「――っ、そこか！」

横に転がった刃更は床を蹴ると、声のした場所へ向かって斬り掛かった。

狙いは足下。認識できない相手の優位性を、動きを奪う事で無効化しようと試みる。

しかし――刃更が繰り出した横薙ぎでブリュンヒルドが斬れたのは虚空だけ。

逆に剣の柄と思われる右からの打撃を頬に食らい、

「ぐっ!?　がはっ！　ぐ……う……っ」

その衝撃でたたらを踏んだところへ、連続して胴へと衝撃が叩き込まれた。悶絶した刃更は身体を前に折りながら、それでも歯を食い縛って倒れる事だけは拒否。しかし、

「とうとう自慢の足も止まったか……ならば、そろそろ倒れて楽になると良い」

そう笑みを含んだ声がした瞬間、苦しげに頭を下げていた刃更は、

「がっ――!?」

後頭部に振り下ろしの一撃を食らって、前のめりに倒れた。

――それは、東城刃更を昏倒させるには充分なだけの威力が込められていた。

さらにゾルギアとの戦いの前にも、滝川との戦闘や万理亜を説得するため敢えて彼女の攻撃を受けるなど、刃更は既に多くのダメージを抱えている。もし次に瞬きをしたら、きっと刃更の瞼は閉じられたままになってしまうだろう。

だが――倒れて視界を横向きにした刃更は、ふと閉じてしまいそうになった瞳であるものを見た。それはこちらに向かって必死に声を振り絞る二人の少女。

澪と柚希だ。

『――――っ！』

二人が何を言っているのか刃更には聞こえなかった。世界から音が消えている。恐らくダメージを受けすぎて、聴覚が一時的に麻痺してしまっているのだろう。しかし、

『――――っ！』

澪と柚希は必死に何かを叫んでいた。刃更へと向かって、懸命に声を振り絞って。

東城刃更は聞こえない。二人の声を微塵も聞く事はできなかった。だけど、

『っ――――』

ついに言葉を無くした二人が、泣きそうな顔でこちらを見ている事だけは解って、

「く……っ……お、お……っ！」

だから東城刃更は歯を食い縛り、そして立ち上がった。

思い出したからだ。自分が戦う理由と、決して負けられない理由を。

最初に生まれた感覚は激痛だった。その痛みが刃更に五感を取り戻させ、

「まだ立つか……そこまで来ると、もはや勇敢というよりも愚かだな」

楽しそうな声と共に、ふっとこちらの前に姿を現したゾルギアに、

「……」

刃更は黙ったまま、静かな瞳で彼を見据えた。すると、

「……良い眼だな。決して譲れぬ想いが込められた力のある瞳――そんなお前の想いを、今から私が踏みにじってやろう」

さあ、ゾルギアは残忍な笑みを浮かべて、

「その瞳が、絶望に汚れるさまを見せてくれ……」

そう言った瞬間、再びゾルギアの姿が消え去った。しかし東城刃更は動かない。ただ、

「――――」

無言でスッと瞳を閉じると、刃更はそのまま全神経の集中を極限まで高めた。

……多分。

今の自分の状態では、まともに剣を振れるのは恐らくこれが最後だろう。

――絶対に外せない。その一撃を放つため、東城刃更は自らの態勢を整えた。

全身から余計な力を抜き、己を神速の瞬発を可能とする自然体へと至らせる。

ゾルギアの姿や気配を感じる事はできない。ここまで完全に存在を消せるという事は、恐らくは次元を渡る能力か何かなのだろう。しかし、それでもゾルギアを一瞬だけ捉えられる瞬間がある。それは、

……ゾルギアが、俺を攻撃するタイミング……。

狙うのはその一瞬だ。これまではゾルギアの攻撃を避けられなかった。だが、刃更はもう回避を考えない。向こうが次元を渡る能力を使っていたとしたら、どう動いても避けられない。ならば選ぶべきは回避ではなく、刹那の間に後の先を取る神速のカウンター。

そして――背後に生まれた僅かな大気の揺らぎに、

「――――っ！」

東城刃更は脊髄反射よりも速く身体を捻り、渾身の一撃を繰り出した。

刃更の放った横薙ぎの斬撃は、虚空を渡る不可視のゾルギアを捉えて。
ブリュンヒルドの斬撃を叩き込んだ　その確かな手応えを得た東城刃更は、

「あ……」

その瞬間――それ以上の呆然を得た。
ブリュンヒルドはゾルギアの胴を確かに捉えていた。
だが届いていない。もう少しという所で、防護障壁に阻まれている。
――あとほんの数ミリだった。
その僅かな距離をゼロにできれば、そこから刃更は勝利へと繋げられたかもしれない。
だが、そのほんの数ミリとゼロの間には、無限ともいうべき残酷な距離があって。

「そうだ――その眼が見たかった」

暗い笑みを含んだ声を聞いた瞬間、東城刃更は背後の壁へと叩き付けられていた。
ゾルギアの視線の先で、壁に激突した刃更がそのままズルズルと床へ尻餅をついた。
――だが、もう立ち上がる事はない。ゾルギアが放った剣撃は刃更を後方へと弾き飛ばし、彼の身体を斬る事なく意識を完全に断った　その筈だった。しかし、

「刃更……っ、刃更あぁぁっ！」

精神拘束で動けない澪が、泣き叫ぶような声で刃更を呼んだ。すると、

「……う……」

呻くような声と共に刃更が僅かに動いた。そして装甲がボロボロになった右の手は、それでもブリュンヒルドを握り締めたまま離さずにいて、

「驚いたな……幾ら虫ケラの生命力が侮れないとはいえ、まだ動く気力があるとは」

ゾルギアは愉快そうに笑うと、ゆっくりと刃更へと向かって歩き出した。

その時だった。

「――動かないで下さい」

ゾルギアの背後から冷たい声がしたのは。

澪ではない。柚希とも違う。そして――ゼストでもなかった。

ならば誰か。

その答えを理解していたゾルギアは、楽しそうに笑って。

己の背後へと語り掛ける。

「やはり来たな……その小僧は囮で、本命はお前かマリア」

## 7

背後を取ったマリアに対し、それでもゾルギアは余裕の笑みを見せてきた。
対するマリアもまた、落ち着いた声音で、
「……いいえ。刃更さんは、私は来ないようにと言っていました」
ですが、
「だからといって、私だけが戦わずに待っている訳にはいかないでしょう――貴方と因縁があるのは他でもない、澪さまと私なんですから」
そう告げたこちらを、少し離れた場所で見ていた澪が、
「アンタ……万理亜、なの……？」
呆然の声を漏らした。成体に変身したこちらの姿に驚いたのだろう。騙していた事への後ろめたさからマリアは無言のまま、申し訳なさそうに一瞬だけ澪と柚希を見て、
「――ほう。やはり、その姿の時のお前は美しいな」
そのたった一瞬の隙に、ゾルギアはこちらを振り返っていた。

「っ――――」

慌てて背後へ跳んだマリアに、ゾルギアは舐めるような視線を這わせながら、

「普段の幼いお前には微塵も食指が動かないが、今のお前はかなりそそるものがある。私に従うようになってから何度か変身してみせろと命じても、一度きりしか使えぬ技のため不可能だと言い張っていたが……案の定あれは嘘だったか」

「……貴方なんかの夜の相手をする位なら、死んだ方がマシです」

吐き捨てるように言ったマリアに、

「性に奔放なサキュバスとは思えぬ、見上げた貞操観念だな……ならば、家族の命が掛かった状況でもシラを切り続けたお前が、今になって変身してみせたのは何故だ？」

ゾルギアは愉快そうに肩を揺らした。

「その小僧を堕とす時は、せめて女になりたかったか　それとも、変身して本来の自分ではなくなる事で、裏切りの後ろめたさから逃れられるとでも思ったか？」

「……そんな事を望む権利は、もう私にはありません。私がこの姿になったのは、無茶をしようとする刃更さんを止めるためです」

そして、

「この姿でここへ来たのは――貴方を殺すためですよ」

冷たい口調で言い放ったこちらに、
「私を殺すか……確かにこの中で私と正面から渡り合えるのは、今のお前くらいだな」
と、こちらの実力を測るようにしてゾルギア。
「だが、変身してから既にかなりの時間が経過している。その状態でいられるのもあと数分だろう。その短い時間で、互角以上の力を持つ私を殺せるとでも言うつもりか？」
「……そんなのは、やってみなければ解りません」
「いいや解るさ。お前に私は殺せない……まさか忘れた訳ではないだろう？」
そう言って、ゾルギアはパチンと指を鳴らした。
すると　右の壁面をスクリーンに、牢獄のような場所の映像が映し出された。
そこには、人質となっているマリアの家族が映っていて、
「っ……」
思わず息を呑み、悲痛な表情になったこちらに、
「さて、選ばせてやろう……成瀬澪やそこの少女と共に、その姿で私のものになるか。健派の仲間や成瀬澪を裏切ってまで助けようとした、幼い家族が死ぬ様を見るかを」
そう言って、ゾルギアは下卑た笑みを浮かべた。
どこか解らない離れた場所に人質を取られている。それは絶望的な状況だ。だが、

「……どちらもお断りです」

マリアは心が屈しそうになるのを必死に堪えながら、ゾルギアを睨み据えた。

刃更に言われていたからだ。必ずみんな助けるから、マリアも諦めるなと。

そして――刃更のお陰で、この絶望的な状況に一筋の光が差していた。それは、

「ここで貴方を倒して、その後でゆっくりと家族を捜します。そこにいる彼女なら、その居場所を知っている筈ですから」

マリアは未だに動けずにいるゼストをチラっと見た。不要と告げられ殺され掛けたゼストには、最早ゾルギアに義理立てする理由はない筈だ。マリアが頼んでも無理かもしれないが、彼女の命を救った刃更が頼めば、応えてくれる可能性は充分にある。すると、

「私を倒してから、か……残念だがそれは無理だな」

こちらの言葉に、ふっとゾルギアは笑った。

「何故そんな事が言い切れるんです？　確かに私がこの姿で居られる時間はあと僅かですが――それでも今の私なら、本気の一撃が当たりさえすれば貴方を殺せます」

ジリ、と腰を僅かに落として駆け出す体勢を取ったマリアに、

「いいや……たとえお前がずっとその姿で居られたとしても、私を倒した後で家族を助け出す事は不可能だと言っている」

玄関からこの教室まで来るのにはそれなりの距離があるものの、万理亜が誰かに見咎められる事はなかった。学校の敷地に入る前に、一般人には姿が見えないように目眩ましの魔法を唱えてある。これで普通の人間には、魔族である万理亜の姿は見えない。

「えーと……あ、この席ですね」

軽い足取りで教室内を闊歩していた万理亜は、ふと一つの席の前で足を止めた。

そして我が物顔で椅子を引いて腰掛けると、ふむと納得の頷きを一つ入れて、

「ここが刃更さんの席ですか。きっと授業中はいつも、いけない妄想とかしちゃってるんでしょうねー。んもう、刃更さんてばっ」

勝手に失礼な決め付けを行なった万理亜は、ふふっと笑って、

「そんな仕方のない刃更さんのために、ここは一発、私が素敵な魔法を――」

「――仕方がないのはお前だっ」

不意に背後から頭をしばかれた。

「あ痛ぁっ？　なっ、なぜ刃更さんがここに？　今は体育の授業の筈ではっ？」

驚愕の表情と共に、ロリエロサキュバスがこちらを振り返った。その瞬間、

ゾルギアがそこまで言った瞬間――壁の映像がいきなり切り替わった。

「え……？」

マリアは思わず呆然となった。壁に映し出されていたのは、鮮血に塗れた牢屋内だ。

そして、先刻まで映っていた家族の姿はどこにもなかった。

するとゾルギアは心の底から楽しそうに、

「先ほど私が指を鳴らしたあれは、映像の投射を起動するためではない。お前の家族がいた牢の超電磁波装置の発動キーだ。先刻までの映像は、ああなる直前のものだ」

残念だったな。

「だが安心すると良い。ああして無惨な死に様を晒してはいるが、苦しむ暇はなかった筈だ。何せ――一瞬で体内から破裂したからな」

そう言って、ゾルギアはその瞬間の映像を映し出した。

『――――』

牢内に無数の紫電の粒子が浮かび上がり、何事かと慌てふためくマリアの家族が、あっという間に風船のように膨らみ破裂――鮮血を撒き散らしながら木っ端微塵になった。

「あ……あぁ……っ」

成瀬澪の視線の先で、愕然となった万理亜が震えるような声を漏らした。

そして、立っている気力を失いゆっくりと床に両膝をつくと、薔薇色の粒子が万理亜を包み込み――次の瞬間にはもう万理亜の身体は元の幼いものに戻ってしまった。

家族の死を目の当たりにした絶望が、万理亜に残っていた最後の力を失わせたのだ。

いつもの澪なら、すぐにでも万理亜に駆け寄り支えていただろう。こちらを騙していた事など関係ない。人質を取られて脅迫されていたのなら、それは仕方のない事だ。

――だが、今の澪は万理亜に駆け寄る事ができなかった。

澪もまた、万理亜が見せられた映像に眼を釘付けにされていたからだ。万理亜の家族の死に方は、澪のためにゾルギアへと立ち向かった養父の殺され方と酷似していて。

あの日の記憶が否応なく蘇った。

澪の脳裏に、養父母を殺された時の光景が鮮明にフラッシュバックして、

「あ……ああ、あああああああああああぁぁぁぁぁ――っ！」

感情を爆発させた澪は、己の中で膨れ上がる紅い波動を解き放った。

# 8

「素晴らしい……」

ゾルギアは、澪が悲鳴のような声と共にウィルベルトの力を暴走させるのを見た。

大気を激しく鳴動させながら、澪を中心にして紅の波動が広がってゆく。

そして――吹き荒れる重力波の嵐が特異点を生み出し、全てを呑み込もうとした時。

キンっという甲高い音と共に、澪が生み出していた紅の波動が霧散した。

と同時、床・壁・天井の全てに広大な幾何学模様の魔法陣が浮かび上がり、

「――こうも計算通りに行くとはな」

澪の力を完全に封じ込める事に成功したゾルギアは、そう言って悠然と笑った。

――澪の中に眠るウィルベルトの強大な重力魔法。

それを手に入れるための準備を、ゾルギアは入念に行なっていた。この屋敷には、その集大成が注ぎ込まれている。

反魔法フィールドを展開できる結界を備え、出力は先日の公園でラースを相手に暴走した時の数値をゼストに調べさせ、調整も済ませておいた。

澪の能力暴走のスイッチもある程度は把握できた。要は、養父母を殺された時の事を思い起こさせるような映像を見せるなり体験させるなりをすれば良いのだ。

先程の映像を繰り返し見せても良いし、何なら適当な人間や魔族を生贄にしても良い。

そうやって暴走を繰り返させていけば、程なく完全に覚醒が常態化するだろう。

――唯一の難点は、この反魔法フィールドを展開するのに大量の魔力を消費する事だ。

今回はゾルギアの魔力を使用したが、流石は最強の魔王と謳われたウィルベルトの力だ。ゾルギアも魔力量にはかなりの自信があったが、たった一回を抑えただけで魔力のほとんどを消費する羽目になってしまった。

……だが。

ゾルギアはふっと笑う。

次からは、今の暴走を抑え込んだ時に装置が吸収した魔力を流用できる。後は暴走と吸収をループさせれば良い。

「これでウィルベルトの力を手に入れる目処は立ったな……」

ゾルギアは改めて見る。能力を暴走させた成瀬澪は、虚ろな瞳で佇んでいた。

恐らく意識を維持する事が不可能なレベルまで、体内の魔力を放出したのだろう。

しかし――そんな状態にも拘わらず、澪は美しかった。

だから、

「では――もっとお前を見せて貰うとしようか」

その美しさをより堪能しようと、ゾルギアは澪の服を剝ぎ取ろうと右の手を伸ばし、

「ん――…？」

その手が消滅した。

「っ　ぐあああああぁぁっ、わ、私の手がっ、こんな――」

激痛に顔を歪めながら身を引くと、右腕は既に肩まで消滅してしまっていた。

――そして、そこでゾルギアはようやく気が付く。

棒立ちのような状態で佇んでいる澪――その周囲の大気が揺らめいている事に。

……これは、まさか……っ!?

とっさにゾルギアは、ウィルベルトの力を解き放った澪が、重力波の嵐の中心にいながらなぜ生きていられるのかを理解した。信じられないと言わんばかりに叫ぶ。

「じゅ、重力波すら通さない空間断層を生み出していたというのか……周囲に超々高温の障壁を展開して……――っ!?」

恐らくは、それこそが成瀬澪自身が持つ本来の力。

ウィルベルトの力の陰で眠っていた、如何なる存在にも歪められない澪の本質だ。

そして、そこまでを想ったゾルギアは、次の瞬間ギョッとなって息を呑んでいた。
その原因はすぐ眼の前にあった――虚ろなままの澪の瞳が、己へと向けられたのだ。

やっとこの時が訪れた。
荒れ狂うように全身を駆け巡る強大な力を感じながら、成瀬澪は静かに思った。

「――――」

成瀬澪は、眼の前の男を見据えながら、ぼんやりとこれまでの長い日々を想う。
――ある日、突然両親を殺されて。自分は人間ではなく魔族だったと教えられて。
今までの自分が嘘だったと突きつけられて――絶望と不安に押し潰されそうになりながら、それでも自分がどうにか生きてくる事ができたのは。養父母を殺した仇に――眼の前の男に復讐するという、渇望にも似た悲願があったからだ。
その悲願をようやく果たせる。確信にも似た予感があった。
今の自分ならば――眼の前の仇を消し去る事など造作もないと。だから、

「よ、止せ……」

怯える眼でこちらを見る相手に、澪はスッと手をかざした。

構わない。跡形もなく消す。何故なら――自分はこの時のために生きてきたのだから。
今こそ両親の仇を討つ。よって澪は全てを消し去る波動を生み出そうとして、
「――駄目だ澪」
その時だった　、ふと静かな声が、こちらを制止したのは。

9

傷付いた足を引き摺り、鈍く重い痛みのある脇腹を押さえながら。
それでも東城刃更は、眼の前にある澪の背中へと呼び掛けた。
「止すんだ……お前はそいつを殺しちゃいけない」
「……どうして？」
すると、振り返らないまま問い掛けが来る。いつもの明るい澪のものとは思えないような低くて暗い声。こちらに背を向けている澪の顔は、刃更には見えない。だがきっと――絶対にさせてはいけないような表情を、今の澪にはさせてしまっている。そして、
「こいつはお父さんとお母さんの仇なの……こいつが殺したのよ、あたしの目の前で」
「……ああ」

やはりこちらを振り返らないまま淡々と言ってくる澪に、刃更は苦い頷きを返す。

「こいつに復讐するために生きてきたの。こいつを殺すために生きてきたのよ」

「ああ、解ってる……」

だったら、と澪。

「解ってるなら……何で『殺すな』なんて言えるの？」

「――――っ」

底冷えするようなその声に、ゾルギアが全身を恐怖で震わせた。傍で見ていた柚希とゼストも息を呑む。それ程の迫力と威圧感。ウィルベルトの力に加え、己の潜在能力までをも解放した澪は、まさに魔王と呼ぶに相応しいレベルの圧力を纏っていた。

だが――それでも東城刃更は告げる。しっかりと力を込めた声で、

「でも俺は――復讐なんかでお前に、これからの未来を縛られて欲しくない」

口にした言葉は、刃更が抱く心の底からの願いだった。

――両親の仇を討てた。その事で解放される苦しみや、晴れる気はあるだろう。

悲願を果たした達成感も得られるかもしれない。

だが――両親の仇に復讐する事を目的にしてきた澪が、ここでそれを果たしたら。

彼女の中には両親を殺され、その仇を殺した事実以外何も残らなくなってしまう。

無論、ここでゾルギアを殺さなかったら澪の中には大きな後悔が残るだろう。

……だけど。

それでも。その後悔は、刃更や万理亜、柚希が傍にいる事で癒してみせる。

しかし、確定してしまった事実を消す事はできない。かつて東城刃更が、己の能力を暴走させ、仲間達の骸を消し去ってしまった過去を無かった事にはできないのと同じように。

ここで澪がゾルギアを殺したら、その事実はもう決して覆る事はない。

もし澪が己の感情を殺し、何よりも使命を全うする事を優先する――そんな勇者の一族のような鍛錬を積んでいたなら、或いは止めなかったかもしれない。

――だが、成瀬澪はそうではないのだ。

素直じゃないが本当は優しくて。気丈に振る舞っているが本当はそんなに強くなくて。

たとえ先代魔王の血と力を受け継ぎ、強力な魔法を使う事ができても。

東城刃更は確信している――成瀬澪はそれでも普通の女の子だと。

そういう澪だからこそ、刃更は彼女を守ってやりたいと思った。

彼女を害する全てのものから。だからもし　澪が自分自身を害そうとしたなら。

そんな澪自身からも、彼女を守ってやろうと。

だから、東城刃更はもう一度言う。何度だって繰り返す。

「そいつを殺すな、澪――復讐の先にあるのは一瞬の解放と、そして永遠の絶望だ。そんな奴の命を……お前がこの先、ずっと背負って苦しむ必要なんてない」

お願いだ、と刃更。

「守るから……両親を奪われた憎しみや、ここでこいつを見逃す後悔や無念さから、きっとお前を守ってみせるから。たとえ無かった事にはできなくても。これからもお前の傍にいて、一緒に毎日を過ごして……そうやって少しずつでも軽くしていってみせるから」

静かな声で。それでも伝えたい想いを強く強く。大切にしてやりたい少女に告げる。

「……」

すると刃更の言葉に、澪は長い長い沈黙を放つと、

「……だったら、命令して」

ポツリと呟くように言った。そしてこちらを振り返る。

泣いていた。

「契約を結んだ主として、配下の私に『殺すな』って、『諦めろ』って……そう命令してよ。そうしたら私、刃更の――お兄ちゃんの言う事に従うから」

……ああもう、コイツは。

幼い外見ながら、可愛らしさと妖艶さを併せ持つ成瀬万理亜という少女を正面から目の当たりにして、東城刃更は思わず心の中で呻いていた。これだから万理亜は油断できない。無邪気で純粋な幼い身体と精神を持ちながら、同時に男の本能を強烈に刺激するような女の色香を放ってくる。刃更は、僅かに得てしまった動揺を抑えながら、

「……更衣室の窓からお前の姿が見えた。それで居ても立ってもいられなくなってな」

そう告げると、万理亜はすぐに嬉しそうな顔になって、

「ははーん。もう刃更さんてば、授業をサボるくらい私の事が心配だったんですね」

「ああ、まるで生きた心地がしなかったよ――放っておいたら何をやらかすか解ったもんじゃないからな。――で？　人の机で一体何をしようとしてたんだ？」

「四隅の角へ、女の子が敏感な場所を擦り付けたくなる魔法を掛けようとしていました」

「何の嫌がらせだ、それっ！」

「あれ？　ご自分の机が５Ｐ乱交仕様になるのはお気に召しませんか？」

「召さねえよっ、机なんて普通が一番だろうがっ！」

すると万理亜はシュンとなって、

「残念です。きっとこの学校で一番の、行列ができる机になったでしょうに」

絞り出すように口にした悲壮な声に、しかし東城刃更は静かに首を横に振った。
「……駄目だ。それでお前が救われるなら幾らでも命令するよ。でも、それをやったら俺達はもう二度と兄妹には戻れなくなる。家族には戻れなくなる」
それは嫌なんだ。
「今の俺は勇者じゃなくて、使命なんて大層な言葉じゃもうお前を守れないけれど」
だけど。
「それでも家族として、兄貴として、一人の男として――俺はお前を守るよ」
その想いを確かな言葉にして、東城刃更は成瀬澪を抱き締めようとする。
「頼りなくてゴメンな……それでも俺に、お前を守らせてくれ」
とっさに周囲が息を呑んだ。同じように澪に触れようとして、ゾルギアが腕を蒸発させてしまったのを目の当たりにしていたからだ。
だが――東城刃更はそれが無用の心配である事を己の身を以て知らせた。
既に澪の周りに超々高温の障壁など存在しないのだと。泣きそうな顔でこちらを振り向いた時には、澪はもう力の暴走を落ち着かせていて。後はただ――己を思い止まらせてくれるだけの言葉を、切っ掛けを待っていたのだと。
――だから、刃更の腕の中で抱き締められていた澪が、やがて肩を震わせ始めた。

それが次第に大きくなり、いつしか嗚咽が零れて、

「――――」

そして。両親を殺され、己の正体を知らされ、残酷な現実に絶望と復讐に囚われていた少女の慟哭が生まれた。成瀬澪の悲しみが、止め処ない想いが、涙になって溢れてゆく。

そんな澪の事を、大切な家族を――東城刃更は黙って、そっと抱き締め続けた。

## 10

力を暴走させた反動だろう。

柚希達が見守る中、程なくして澪は刃更の腕の中で気を失った。と、同時、

「――――」

床にうずくまっていたゾルギアの姿が、ふっと虚空へ溶けるように消えた。

こちらの一瞬の隙を突いて、逃亡したのだ。即座に野中柚希は反応し、

「――逃がさない」

とっさに後を追おうとするこちらに、

「その必要はないよ、柚希……」

と、澪を抱いた刃更が制止の言葉を放ってきた。だが、柚希は納得できない。
「どうして……アイツは刃更や皆を傷つけた。それに刃更や澪に執着もしてる。怪我を治せば、きっとまた来る。それに、あの男は万理亜の――」
「それなら大丈夫だ……」
しかし、刃更は安心を促す言葉を告げてくる――その瞬間、
「――マリアっ」
放たれた幼い声の呼び掛けに、最初に反応したのは万理亜だった。
続く動きで全員がそちらを見れば、入口の方から幼いサキュバスが駆けてきていて。
思わず呆然となった万理亜の胸に、彼女より小さなサキュバスが飛び込んだ。
「どうして……？」
死んだとばかり思っていた家族の手触りと温もりに呆然となっている万理亜に、
「――絶対に助けるって言っただろ」
と刃更。
「俺達に力を貸してくれた奴がいてさ。ゾルギアがこの子を殺そうとしたのよりも先に、何とか助け出せていたんだ。奴が殺したと思っていたのは、精巧なダミーの人形だよ」
「ダミーの人形……」

まだ奇跡を信じられずにいる万理亜に対し、

「ええ。私は大丈夫よ……ありがとうマリア」

彼女の腕の中にある確かな温もりが、奇跡を現実だと教えてくる。優しい声で、

「今まで、ずっと苦しませて御免ね……」

小さな顔を上げて告げられた穏やかなその言葉に、感極まったように身体と声を震わせながら万理亜が言った。

「っ……お母さん……」

感動の再会だった。だが、それでも聞き捨てならない言葉に、

「……お母さん？」

ふと眉を顰めながら柚希。すると、万理亜より幼いサキュバスが笑顔で、

「あらあら、これは自己紹介が遅くなって大変失礼しました。マリアの母のシェーラと申します。娘がいつもお世話になっています」

「は、はあ……それは、ご丁寧に……どうも」

僅かに困惑した様子で、刃更も頭を下げた、彼女を助ける手を打ってはいたらしいが、流石にこの衝撃の事実までは知らなかったらしい。

柚希としても、刃更の言う「協力者」の件も含めて色々と事情を聞きたくなったが、

「っと……詳しい事情はまた後で」

刃更の言葉に考えを改めた。確かに自分達は、先にやるべき事がある。それは、

「まずは、この場所を離れよう。もしかしたらゾルギアが、この館にも何か仕掛けをしているかもしれない」

刃更の言葉に、柚希は勿論その場に居た全員が頷いた。そして刃更は、

「――ゼスト、お前も俺達と一緒に来るんだ」

逃げたゾルギアと違い、どんな処遇だろうと受け入れる覚悟を決めて、この場に留まり大人しくしている美しい女魔族へと告げた。

「色々と聞きたい話があるし……お前の今後についても話し合いたい」

すると柚希の眼の前で、

「……はい。貴方に従います、東城刃更」

ゼストはそう言って、従順な頷きを返してきた。

「敵である貴方に救って貰った命です――私をどうするかは貴方が決めて下さい」

# 11

夜の闇から闇へと空間を渡ってゆくものがあった。
滞が気を失った一瞬の隙に、刃更達の眼の前から逃げ出す事に成功したゾルギアだ。
「よくも、この私の腕を……っ」
徐々に右腕を失った痛みが酷くなり、ゾルギアは怨嗟の言葉を吐き出した。
「ゆ、許さんぞ……絶対に許すものか。屋敷の爆破で殺すなど生温い。この傷を修復して魔力が回復し次第、死よりも苦しい絶望を与えてくれる……っ」
怒りに声を震わせながら言ったゾルギアは、闇の中から月光の下へと身を躍らせると、再び目の前の闇の中へ入り、
「っ――がああああぁぁぁっ!?」
しかし爆炎魔法の直撃を食らい、入ったばかりの闇の中から外へと吹っ飛ばされた。
爆発によって右の脇腹を大きく抉られ、
「……がっ、ぐ……う、な……っ？」
地面に転がったゾルギアが顔を上げると、ふと闇の中から浮かび上がる影があった。

そして　――こちらへと一歩前へと出た影の顔を、月明かりが照らし出す。それは、

「ラ、ラース……っ!?」

愕然となるゾルギアに、

「これはこれは、お久しぶりですねゾルギア侯。しかし――一体どうしたんです？」

冷たい笑みを浮かべたラースが、悠然とこちらを見下ろしてくる。

「貴方ともあろうお方が、そんな……虫ケラのように地面に這いつくばって」

おや？

「数えきれぬ程の女を泣かせてきた、ご自慢の右手が見当たりませんな。もしや落とされた腕を捜して暗がりの中を？　いやはや道理で慌てていらした訳だ――しかし、生憎と蒸発しちまった腕は、どこを探しても転がっていないと思いますがね」

こちらの事情を全て知っているのだろう。嘲笑うような口調で言われ、

「貴様……生きていたのかっ？」

脇腹の傷を残った左手でどうにか押さえながら、憎悪を込めた表情で睨むゾルギアに、

「はァ？　そんなもん、見りゃ解るでしょう。馬鹿ですかアンタ？」

と肩を竦めてラース。

「っ……そういう事か。成瀬澪と交換などと言っておいて、最初から東城刃更を私の屋敷

に入れるのが目的だったのだな。そして、お前はその隙にあのサキュバスを……」

「ええ。怪しまれている事は解っていたんで、わざと挑発を含んだ交渉を仕掛けたら、閣下の配下は俺の『人形』を燃やして、すっかり殺した気になってくれましたよ」

だから、

「お陰でこっちに目が向かなくなって、実に動きやすかったです。マリアの家族が捕まっている場所については、それこそ調べが付いていましたしね」

「な、何だと……？」

「そんなに驚く事ですか？　魔界じゃアンタは有名な高位魔族で、しかも今は謹慎中だ。いつ誰の目に付くか解らない以上、あっちに余計なものをこさえるようなリスクを冒す筈がない。穏健派の連中も捜索を続けていますしね。だが、かといってメインの館にも置けない。脅迫しているマリアに見つかりでもしたら、それこそ意味がないですから」

とはいえ、

「何かあった時にはすぐに対処できるよう、魔力を飛ばした遠隔操作ができる程度には近くに置いておきたい。遠くに置けば、それだけ不安にもなりますしね。そう目星を付けてアンタの館を中心にちょっと調べてみたら、これが大当たりでして。実はもう結構前から、あの場所は突き止めていたんですよ。お陰で閣下が指を鳴らすよりかなり前に、余裕で人

質を助け出せたって訳です」

「？　……き、貴様、何を言って……いや、一体何を企んでいる……っ？」

眼の前の男が、穏健派のスパイかもしれない可能性には気が付いていた。

こうして今、自分の前に立っている事から見てもその推理は間違ってはいない筈だ。

だが――だとしたら、かなり前に人質の居場所を突き止めておいて、何故それをマリアや仲間である穏健派の魔族達に黙っていたのか？　それは現魔王派にとっても、穏健派にとっても利にならないだろうに。ラースの真意が見えずに戸惑うこちらに、

「いや……俺の予定じゃもう少し慎重に行くつもりだったんですがね。電話で俺を呼び出して、ちょっくら乱暴なやり方で友情なんぞを確認しようとしてきたダチが、ケンカの途中で取り引きを持ちかけてきたんですよ」

「取り引き……だと……？」

「ええ。連れ去られた成瀬澪の居場所の情報と、人質になっているマリアの家族を助けて欲しいと。その代わり――俺にとって、それをやっても構わないだけの見返りを言ってくれ。それだけは、何があろうと果たすから、とね」

そして、

「俺はその条件を飲みまして。だから今、俺はこうしてここに居るんですよ閣下」

と、こちらを見下ろしながら楽しそうにラース。

「な、何を言っている……？」

ラースが刃更と取り引きしていたという事実を、俄には信じられずにいるゾルギアに、

「――先代のウィルベルト陛下が、人間界で育てる事にした娘を任せる養父母に選んだのは、彼の配下の中でも特に心の優しい二人だった」

ラースはスッと瞳を細めて語り出した。

「恐らく貴様は、自分が殺した彼らの名前すら知らないだろう。決して高位ではなかったが、彼らは多くの同胞から慕われる存在だった」

そして、

「中でも――二人と同じく、大戦の間に身寄りを無くした子供を受け入れ続けたとある孤児院で育ち、彼らを兄や姉のように慕っていた、俺みたいな奴らからは特に」

「っ――貴様っ!?　ま、まさか――」

ゾルギアはギョッとなって絶句した。眼の前に立っている男に、こちらに対する憎悪よりも暗い感情がある事を知ったからだ。

そんな最悪な行列待ちがあってたまるか。地獄絵図にも程があるだろ。

「ったく……いきなり何をしに来たかと思えば、おかしな悪戯が目的だったのか？」

「え？　まさかまさか～。勘弁して下さいよ刃更さん、私を何だと思ってるんです？」

「……」

「ひどー！　そこで無言って、一番失礼な反応ですよっ!?」

全く、と万理亜はプンプン怒ってから言った。

「前に来た時から随分時間が経っていますからね。落さまのために、安全面で問題がないか確認に来たんです。こういう事は念を入れておくに越した事はないですから、久しぶりに私の方でも、色々と見て回ろうかと思いまして」

「成る程、そういう訳か……」

「はい。あ、せっかく授業をサボっていただいたんですし、良かったら刃更さんも付き合って下さいませんか？　一緒の方がより効果的に確認ができますし」

「別に好きでサボった訳じゃないけどな。まあお前の言う事も一理あるし、付き合うのは良いけど……でも授業中に校内をうろうろして見つかるとヤバイしなぁ」

「なら見つからないようにすれば良いじゃないですか。刃更さんだって元勇者の一族です。一般人にご自分の存在を気取られないための心得くらいはあるでしょう？」

ならば――そんなラースが東城刃更と交わした取り引きの見返りとは、一体何か？

――刃更がこちらと戦っていた時、どこか時間稼ぎや囮のような動きをしていた節があった。ゾルギアはそれを、刃更が囮でマリアが本命だったためと考えていた。

だがマリアは、刃更は彼女に「来るな」と指示したと言っていた。

ならば――刃更が待っていたのは誰か。マリアが来てしまうという予想外の展開にならなければ、ゾルギアの背後に立っていたのは誰だったのか。その事を想い、もはや愕然となるしかないこちらに、ラースは今こそ彼が密かに抱き続けてきた目的を告げる。

月光を背に、凍り付くような笑みを浮かべて。

「そうだゾルギア。俺の出した条件はな　この手でお前を殺す事だよ」

# エピローグ　絶対を口にした者の覚悟を

## 1

刃更達が東城家へと帰宅した頃には、既に深夜になっていた。

怪我の手当てや入浴、それに着替えなど、それぞれが一通り必要な事を済ませてゆく中、戻ってすぐの休息を選んだ者達がいる。それは長きに亘ってゾルギアに脅迫されたり、人質として囚われていたサキュバスの母娘――万理亜と彼女の母親だ。

そして今、そんな二人の寝顔を東城刃更は見つめていた。

「……」

月明かりが差し込み、室内の薄闇を淡い蒼へと変えている万理亜の部屋で、幼い母娘は寄り添うようにしてベッドで眠っていた。ようやく果たした再会と確認できた無事に、張

り詰めていた精神が安堵と共に休息を欲したのだろう。一人から漏れる寝息は穏やかで。

……きっと久しぶりなんだろうな、こうやって安心して眠れるのは。

その事を想うと胸が痛みつつも、それでも眼の前に――手を伸ばせば届く場所にある一人の寝顔は、彼女らを助けられた確かな実感を刃更に与えてくれる。すると刃更の見つめる先で、ベッドの中で眠っていた万理亜が隣の母親の方へとさらに身を寄せながら、

「……刃更、さん……」

静かな寝言でこちらを呼んでくる。だから、そんな万理亜を愛おしそうに見つめて、

「……ああ、ここに居る。俺も、他の皆もちゃんとお前の傍に居るから」

そう言って、刃更はそっと万理亜の頬に触れた。そして、閉じられた瞳の端にまだ残っている涙の痕を優しく撫でてやる。もう泣く必要はないのだと教えるように。

――東城家へと戻る途中、刃更達は万理亜と彼女の母親の今後について話し合った。

ようやく再会できたのだ。よって今日のところは一緒に居る事を最優先し、明日以降に万理亜に穏健派の魔族に連絡を取って貰い、迎えの者に来て貰う事にした。滝川の話では穏健派のトップは頑なに滞を敬遠しているらしいが、それでも万理亜の母親の捜索は行なっていたという話だから、彼女を救い出せたと解れば誰かしらは寄越してくれるだろう。

そしてゼストに関しても、刃更達は穏健派に任せるつもりでいる。現在は柚希がどうし

てもと言うので、リビングでゼストを監視しているが、恐らく問題はない筈だ。

ゼストにはもう抵抗の意思はなく、彼女は刃更の命令に全て従うと言っていた。

刃更としてはゾルギアの存在と死の呪縛から解放されたゼストには、現魔王派とも穏健派とも関わらずに自由に生きて欲しいと思っているのだが、絶対的な主を失ったばかりで己の生きる目的すら定まっていない今の彼女を一人で放り出す事はできない。

ならば証人保護という訳ではないが、穏健派に預けるのが良いのではという話になった。

ただし、これまで敵対していた勢力に預ける以上、彼女の安全を確保しなければならない。その辺りについては、また滝川の力を借りるなど手を打つ必要があるだろう。

そして――万理亜がゾルギアに脅迫され、従わされていた事を伝えるかはまだ決めていない。事実を隠した方が良いのか、きちんと伝えた方が良いのか判断が難しいからだ。

――だが。刃更と澪と柚希は、既に意見を一致させ、結論を出している事が一つあった。

それは、たとえどんな事があろうと、成瀬万理亜という家族を守るというものだ。

万理亜が刃更達や穏健派を裏切っていたのは、あくまで母親を人質に取られていたという止むを得ない事情があったからであり、何人たりとも彼女を罰する事は許さない。

かつて迅が、息子の刃更を守るために勇者である事を止めたように。

そして刃更が、理不尽な理由で命を狙われる澪を守ると誓ったように。

さらに柚希が、任務よりも刃更を守る事を優先したように。
今度もまた、自分達は万理亜を守ってみせる。大切な者を、苦しんでいる者を犠牲にしてまで優先される使命や任務など、たとえどれだけ崇高であろうとも受け入れられない。
守りたいのは使命ではない――自分達にとって大切な存在なのだから。
「……絶対に俺達が守ってやるからな」
刃更は誓う口調でそう呟くと、やがてそっと万理亜の部屋を出た。
そして電気が消えている廊下を歩き出すと、ふと刃更は己の部屋の扉に背をもたれるようにして立っている少女に気が付いた。だから刃更は歩み寄り、静かな声で呼び掛ける。
「どうした澪……休まなくて平気なのか？」
「……うん。何だか、ちょっと眠れなくて」
こちらが発した問い掛けに、澪は落ち着いた口調で応えてくる。その静かな表情に、
「そうか……」
刃更は、澪がここに居た理由を何となく察した。だから、
「だったら……眠くなるまで少し話でもするか？」
そんな刃更の提案に、澪はしばしの沈黙の後にコクンと頷きを返してきた。
だから刃更は、澪に少しだけ待つように言うと、自分は一階へと降りた。

そして明かりの点いているリビングへと足を踏み入れる。

「……」

リビングは夜の静寂と共に重い沈黙が降りていた。その源は対面するようにソファに腰掛けている柚希とゼストだ。すると刃更がやって来た事に気付いた柚希がこちらを見て、

「刃更……そっちはどうだった？」

「ああ。万理亜はぐっすり寝てるよ。ただ、澪はちょっと寝られないらしい……」

「……そう」

刃更の言葉にポツリと頷きの言葉を返してくる。恐らく、刃更と同じように澪が眠れない理由が解ったのだろう。それは、柚希が澪を気遣っているからだ。

「……柚希は大丈夫か？　休まなくても」「私は平気。彼女を見張る仕事があるから」

でも、と柚希。

「刃更こそ大丈夫……？　負傷のレベルは、刃更が一番酷い筈」

そう――変身した万理亜の攻撃を受け続け、ゾルギアとも戦った。そして柚希達は知らない事だが、その前には滝川とも戦っている。今回の件で最もダメージを負ったのは間違いなく刃更だった。しかし、

「心配いらないよ。当たり所が良かったのか、柚希に貰った回復薬が効いてくれたのか解

らないけど……思っていたほど酷いダメージはないみたいだ」
　万理亜の打撃を受けた時は肋骨が完全に折れたような激痛があったのだが、ゾルギアとの戦いの前には痛みはかなり引いていたし、家に戻ってから確認したが所々に小さなヒビが入っていた位だった。ゾルギアから受けたダメージも想像していたような深刻なものはなかった。柚希が持っている《里》の回復薬も飲んだし、安静にしていれば恐らく数日で回復するだろう。その事は柚希も既に知っているのだが、改めて無事を伝えると、
「そう……なら良い」
　僅かに安堵の表情を浮かべると、柚希は再びゼストへと視線を戻した。
　刃更はその肩にそっと手を置いて、
「余り無理はするなよ……今夜は俺も起きてるから、何かあったらすぐ呼んでくれ」
　すると、
「――見張るなどという面倒な真似をする位なら、私を始末した方が早いと思いますが」
　自暴自棄ではなく、ただ淡々と事実を語るようにゼストが言ってくる。だから、
「駄目だゼスト。言った筈だぞ……お前は新しい生き方を見付けるんだ。そのための時間は俺達が作る。その間に、お前は自分のこれからを考えてみてくれ」
　言い聞かせる口調で刃更が言うと、ゼストはしばらく黙り込んでから、

「……解りました。貴方の言葉に従います、東城刃更」

静かに従順な言葉を返すと、眼を閉じてそれ以上はもう何も言わなくなった。

そんなゼストを再び柚希に任せると、刃更は飲み物を用意して二階へと戻った。

「どこでも良いぞ……好きな所に座ってくれ」

自分の部屋へ招き入れた刃更の言葉に、澪はベッドを選んで腰掛けた。

そんな彼女に、刃更は持ってきたマグカップを手渡す。

「ホットミルクだ。飲むと身体が温まって眠れるようになる」「……ありがとう」

澪は素直に礼を言ってきた。そんな彼女に刃更は問う。

「でも――俺の部屋で良かったのか？」

刃更の部屋で話をする事になったのは澪の希望だ。確かにあのまま廊下で立ち話というのは何だが、澪の部屋なら話していて眠くなったらすぐに寝られて便利だろうに。だが、

「うん。自分の部屋だと眠くならなかったから」「まあ、そう言うなら良いんだけどさ……」

刃更は椅子のある勉強机の方へと向かおうとして、

「――――」

ふと澪にTシャツの裾をキュッと摑まれた。振り返ると、しかし澪は俯いていて。
刃更は頬をポリポリと掻くと、仕方なく澪の隣に腰を下ろした。すると刃更の体重をベッドのスプリングが吸収し、しっかりと支えてくれる――その筈なのに。刃更はふと、腰掛けたベッドが僅かに揺れているのを感じた。見れば、隣に座る澪の身体が小さく震えていた。だから刃更は、澪がホットミルクを零さないように、そっと肩を抱き寄せて、
「――もう大丈夫だ」
安心させるように、改めて言葉にして言ってやる。すると澪は「うん」と頷くと、
「……ゴメン。もう少しだけ、このままでいて……っ」
そう言って、こちらの肩に頭を預けてくる。
――一度は捕らえられ、敵の手に落ちたのだ。刃更達が助け出すまでの間、澪がどれだけ不安だったかなど想像に難くない。だから刃更は、澪が落ち着くまで肩を貸してあげた。
それから程なくして澪は落ち着きを取り戻し、刃更が持ってきたホットミルクにも口を付け始めた。そしてマグカップの中身を飲み終わる頃には、改めて今後の事について色々と話をする事ができた。澪はベッドの宮台にマグカップを置いて、
「……解った。万理亜の母親を迎えに来た穏健派の魔族に、あのゼストって彼女には危害を加えたり、おかしな真似をしたりしないように言えば良いのね」

刃更が口にした頼みに、澪は静かに頷いて承諾してくれた。この件については滝川にも力を借りるつもりではいるが、それでも可能な限り保険は掛けておきたかった。

「ご免な……嫌な事を頼んで」

刃更は申し訳なさそうに言った。ゼストの事は、万理亜を守るのとは訳が違う。養父母の仇であるゾルギアを見逃させただけでも、澪には相当な我慢を強いているというのに、奴の配下を助けるために力を貸してくれと頼むのは正直心苦しい。だが、これは澪にしか出来ない事である以上、澪にやって貰うしかないのだ。

……でも。

問題は他にも残されている。今回、刃更達はゾルギアという現魔王派の高位魔族を退けた。その上で穏健派側にコンタクトを取れば、現魔王派は今まで以上にこちらを危険視するようになるだろう。ゾルギアへの復讐という目的を澪が諦めてくれても、彼女の中に眠るウィルベルトの力までが消えた訳ではないからだ。そして穏健派もトップである澪の伯父以外は、ゾルギアを退けた澪の力に亡きウィルベルトを見る可能性は高い。最悪――魔族の二大勢力の争いに、本格的に巻き込まれる事になる。そうした可能性を想い、刃更が思わず表情を硬くしていると、ふとこちらの手の上に澪がそっと白身の手を重ねてきて、

「刃更……あたしは平気、大丈夫よ」

「そりゃ、それなりに気配を消す事はできるけどさ……そこまでしてやるのか？」

自分達の存在を世間に知られてはいけない性質上、一般人に認識されないように気配を絶つのは勇者の一族が学ぶ基本的なスキルの一つだ。現在、魔界に潜入している迅などは、それこそ刃更や柚希ですら見付けられないような隠密行動もできる。

「ええ。澪さまのためですから」

真顔でそう言われてしまうと弱い。しばし黙考した後、

「……解った。付き合うよ」

やがて刃更は了承の頷きを返した――その一分後。

「……おい万理亜」

東城刃更は、早くも後悔しながら低い呼び掛けを発していた。

刃更は今、万理亜が最初に安全を確認するため訪れた場所の前に居る。最優先での調査が必要だと刃更が連れて来られたのは、男にとって禁断の領域――女子トイレだ。

「何を遠慮してるんです刃更さん。中に人は居ませんよ？」

「あのな……そういう問題じゃないだろ」

押し殺す声のこちらに、しかしロリエロサキュバスは平然と言い放つ。

「いいえ、そういう問題ですよ。刃更さん、一体何を恥ずかしがっているんです？　トイ

確かな信頼の眼差しで言われる。

「だって、今のあたしには刃更達が居てくれるもの――そうでしょ？」

そんな澪の健気な言葉と表情に、東城刃更は思わず見惚れた。

自分が守ると誓った女の子と、彼女の笑顔がそこにあったからだ。

今、こうして眼の前で澪が笑っている。それは彼女を守る事ができた証だ。だが、

「――――」

同時に刃更の中に、湧き上がる暗い感情があった。

「……刃更？」

何か様子がおかしいと気が付いたのか、澪が心配そうにこちらを見上げてくる。

「……」

そんな澪を、刃更は黙って見つめた。彼女はこちらを信頼してくれている――その事を嬉しいと思う反面、誤魔化せない事実もある。今回、澪は今まで以上に危険に晒されてしまったのだ。しかも相手は、何人もの女をオモチャにしてきたゾルギアだった。もし、もう少し助け出すのが遅れていたら――ゾルギアに澪を奪われていたかもしれない。刃更が想像もできないような卑怯な真似で、酷い汚され方をされてしまっていたかもしれない。

――そして、これで終わりじゃない。これからが始まりなのだ。

きっとこれからも、澪はウィルベルトの力を欲する連中に狙われ続ける。
その中には、ひょっとしたらゾルギアよりもさらに下衆な奴だっているかもしれない。
だが、そんな事だけは許せなかった。誰かに澪を奪われる事だけは、東城刃更は絶対に我慢できなくて。そんな事になる位ならば、いっそ――そう思った瞬間、刃更の理性が一気に遠のいて。眼の前でこちらを見上げている澪の両肩を摑むと、
「――――」
東城刃更は強引に、成瀬澪の唇を奪っていた。

澪は最初、何が起きたか解らなかった。
いきなり刃更に唇を重ねられた――そんな余りにも突然の事に、
……え？
とっさには、それがキスだと理解できない。だけど、眼の前には瞼を閉じた刃更の顔がある。そして口には彼の唇の温もりと感触があった。だから、
「っ――――……」
とうとう澪は理解する。自分は今、刃更とキスをしているのだと。

深夜に、刃更の部屋のベッドの上で――それが成瀬澪のファーストキスだった。

自分もいつかは誰かにあげると思っていたし――その相手は、きっと刃更になるだろうと予感していた。主従契約の呪いを楽にするため、刃更によって気持ち良くされてしまっている時に、もっと彼を感じたくて自分からしてしまいそうになった事もあったからだ。

だから、もし澪がして欲しいと願ったら、刃更はきっと応えてくれると思っていた。

――だけど。澪の想像の中では、キスしてくれる時の刃更は優しかった。

刃更は基本的に澪の嫌がる事をしない。脱衣所やトイレなどでばったり出くわしてしまった時に、とっさに悲鳴を上げようとした澪の口を慌てて塞いだりする事もあるが、あれは焦って余裕を無くしているからだ。だから澪も、怒りはしても必ず許している。

それなのに――今の刃更は、そのどちらでもなかった。まるで感情を暴走させてしまったかのように、強引に澪の唇を奪っている。

……っ、これって……っ!?

驚きに身を硬くしながら、それでもそんないつもと違う刃更を成瀬澪は知っていた。

前に一度だけ、刃更が今みたいになった事があったからだ。

――それは主従契約を結んだばかりで、初めて一緒にお風呂に入った時の事。

あの時、柚希と再会した刃更を繋ぎ止めようと、澪は万理亜の提案に従って彼の身体を

自身の胸で洗ってあげた。さらに万理亜は、刃更がお土産に買ってきてくれたケーキをお風呂に持ち込んでいて。それを取り落とした拍子に生クリームが付いてしまった刃更の身体を、澪は万理亜と共に舐めたのだ。

改めて思い返してみても、大胆な事をしたと思う。

ただあの時は、とにかく刃更を自分に繋ぎ止めたくて必死で――しかしその結果、理性を飛ばした刃更によって、澪と万理亜は残っていたケーキを塗りたくられ、甘くされてしまった躰を強引に味わわれた。途中で興奮しすぎた刃更が意識を失って倒れてくれたため事なきを得たが、あのままされていたら澪も万理亜もどうなっていたか解らない。それ程までに、あの時の刃更は強引だった。だから万理亜と相談して、刃更には夢だと説明させたのだ。

だが――あの時以来、刃更が理性を飛ばすような事はなくて。あれは何かの間違いだったのではないか……それこそ澪の方が夢を見ていたのではないかと思うようにさえなっていた。

だけど今――そんな理性を飛ばした刃更が眼の前にいて、澪の唇を奪っている。

……な、何で……っ？

お風呂で刃更に大胆な事をしてしまった時とは訳が違う。一体何が刃更をいきなりこう

させてしまったのか、澪には解らなかった。

「――んうっ、や……ま、待って……っ」

慌てて澪が身を引くと、意図せずベッドに仰向けに倒れた形になった。すると、刃更はこちらのパジャマの胸の辺りを両手で摑んできて、

「待っ――」

制止の声を上げるより先に、前を留めていたボタンが引き千切られて宙を舞った。

ノーブラの胸が、まるで躍るように露わになる。

「あ……」

その事実に澪が呆然の声を漏らすと、刃更はこちらへと覆い被さってきた。

そのまま乱暴にこちらを抱きしめ、再び唇を重ねてくる。

そして、ベッドに押し倒される形で強引に唇を奪われていた澪は、

「んっ――ふあぁんっ？」

不意に刃更の身体の下で甘い声と共に躰を跳ねさせた。乱暴に前を開けられ露出していた胸を、刃更の手が揉み始めたのだ。たとえ催淫の呪いが発動していなくても、これまでたっぷりと快楽の味を教えられた澪の胸は、自分でも恐い位に敏感で。そんな胸を刃更の手で滅茶苦茶にされ、いやらしい形にされながらするキスは、澪の躰と思考をとろけさ

せ、抵抗する力をゼロにする。

「っ……や、はぁ……んぅ、ちゅ……ぁ……ん」

今までもそうだったように。刃更に本気で強引にされると、成瀬澪は逆らえない。初めて会った時はまだしも、今の澪はもう何度も刃更に屈服させられている。だから心はいけないと想っても自然と瞳が閉じられ、躰は従順に刃更を受け入れてしまう。そして、

……あ……。

澪はふと、刃更がこちらに舌を入れようとしているのを感じた。

それを許せばどうなってしまうかは理解できた。だけど今の澪は従順で——服従した唇が、自分から少しだけ開いてしまう。

僅かな隙間。だが、今の刃更にはそれで充分だった。自身の舌で乱暴に澪の唇をこじ開けると、そのまま澪の口の中へと入れてきた。

「あ……ん、……ふ……ちゅ、んぅ……やぁ、ちゅ……んっ」

ねっとりとした刃更の舌の熱と感触——それを感じたらもう駄目だった。いつしか澪は自分からも舌を絡め、刃更とのキスに夢中になっていった。

そして、肺の中の酸素が全てなくなるような長いキスの後。息継ぎのために一旦唇が離れてやっと呼吸ができた澪は、

「……誰にも奪わせてたまるか」

ふと、刃更が低い声でそう言ったのを聞いた。だから、

「刃更……？」

思わず彼の名前を呼んだ瞬間――眼の前の刃更がハッとなった。そしてこちらを見て、

「っ――わ、悪いっ……俺……っ!?」

正気を取り戻したのか、自分がした事を理解した刃更が顔を真っ赤にして謝ってくる。ベッドの上で慌ててこちらに背中を向けた刃更はもう、澪がよく知るいつもの刃更で。

「本当にゴメンっ、俺、何か急に頭が真っ白になって」

胸を腕で隠しながら身を起こし、必死に謝ってくる刃更の背中を呆然と見ていた澪は、

「……」

やがて少しだけ意地の悪い笑みを浮かべた。だって聞いてしまったからだ。

……誰にも奪わせない、だって。

刃更は基本的に澪の嫌がる事をしない。その刃更がここまで冷静さを失ってしまった理由は――ゾルギアに囚われ、奪われそうになった澪への心配からくる独占欲だった。

だから、

「……駄目。絶対に許さない」

澪は笑みを忍ばせながら言い放つ。突然の事に驚かされたのは事実だ。少しくらい困らせてやっても、主従契約の呪いは発動しないだろう。すると刃更は困り果てながら、

「ど、どうすれば許して貰える……？」

「そうね……なら、一つだけ許してあげる方法があるけど――知りたい？」

「し、知りたいっ！」

頷く刃更に笑みを深めた澪は、その背中に忍び寄ると優しく後ろから抱き付いて、

「――だったら、もう一度キスして」

そう言って、刃更の背中に頬を寄せた。そして、自分が彼を許さない理由を告げる。

「そうしたらきっと解るから。今した事――謝ったりする必要なんかないって」

そっと眼を閉じて。

「お願い刃更。誰にも奪わせたくないなら……もう一度、ちゃんとあたしを奪って」

そう言って、澪は刃更が応えてくれるのを待った。次にキスしたら、自分達の関係はきっと変化するだろうと思いながら。

ところが、なかなか刃更はこちらを向いてくれなくて。

「……刃更？」

どうしたのだろうと眼を開けた澪は、そこで刃更が振り返れなかった理由を見た。

いつの間にか、刃更の向こうに柚希が無表情で立っていた。

「え――……？」

その状況に思わず澪が固まった瞬間――柚希は刃更の襟を掴んで強引にキスをした。

澪に対抗したのか、柚希は自分から舌を絡めて濃厚なディープキスを行なう。

そしてキスを終えて唇を離すと、刃更はヘナヘナと腰砕けでベッドにへたり込み、対する柚希はふんと鼻息を荒くした。

何で柚希の方が男らしいのだ。すると柚希はジロっとこちらを見て、

「……捕まっていたショックがあると思って気を遣っていたら、油断も隙もない」

「な、なんでアンタがここに……あのゼストって女魔族の見張りはっ？」

ようやく金縛りが解けた澪が慌てて問うと、

「心配ない。ちゃんと連れてきた」

そう言った柚希の背後に、スッとゼストが姿を現した。

「あ、アンタまで……一体いつからいたのよっ？」

「『だって、今のあたしには刃更達が居てくれるもの』の所からです、成瀬澪」

レは半密室の空間です。気を抜いて油断もしやすいですし、それこそ事の最中は隙だって生じます。ここは一番狙われやすい場所ですよ。なのに確認しないでどうするんです？

まさか刃更さん、澪さまがトイレで襲われたら助けないつもりですか？」

「別に……そんな事は」

「だったらいざという時に備えて、中の様子や構造を確認しないでどうするんです？」

「……いや。でも大まかな構造とかは、お前らからもう聞いて知ってるし……」

「百聞は一見にしかずです。万全を期すために、実際に見ておかないでどうするんですか」

は～やれやれと嘆息混じりに万理亜に言われ、

「っ……解ったよ」

仕方なしに刃更は頷いた。確かに身の危険が迫っている状況で、恥ずかしがったり躊躇したりしている余裕はない。本当に澪の身を第一に考えるなら、彼女の日常生活からプライバシーまで完全に奪う必要がある。それをしないのなら、せめて可能な限り安全を確保できるようにしてやるしかない。だから東城刃更は意を決して、女子トイレの中へと足を踏み入れた。当然ながら生まれて初めての経験である。その第一歩が床を踏んだ瞬間――禁断の領域を侵した罪悪感が刃更の中に一気に湧き上がった。

……ああ、見つかったら最低でも停学だろうな。

The TestAmenT of SisteR New DevL

# 新妹魔王の契約者 テスタメント III

「っ……それ、かなり前から居たって事じゃないのっ！」
「？　抜け駆けで刃更に甘えておいて、逆ギレする意味が解らない――とんだ泥棒猫」
柚希は淡々と言うと、刃更の首に両手を回して、熱の篭もった瞳で、
「刃更……ウチも奪って」
「どさくさで、何を言い出してんのよアンタは――っ！」
それを見た澪は感情を爆発させ、柚希と刃更の間に強引に割って入った。

そして一気に騒がしくなった刃更の部屋の外で　――マリアは無言で佇んでいた。
サキュバスは周囲の興奮に敏感だ。人質としての生活が長く消耗していた母は熟睡しているが、マリアはそれこそ柚希とゼストが刃更の部屋へ入る前から起きていた。
――いつもならばマリアも中へ踏み込み、率先してあの場を引っかき回している。
ただ単に澪を守るだけでなく、養父母を殺され常に心の奥には悲しみを抱いていた彼女を明るい気持ちにするために。それはゾルギアに脅迫を受けたマリアが、たとえ裏切りの贖罪にはならないとは解っていても、それでも少しでも澪の心を楽にしてあげられればと思ってやっていた事だ。だから、これまでの習慣でそうしようとやって来たマリアは、

「……」

しかし、無言のままその場に立ち尽くした。刃更や澪を裏切っていた事が公になった以上、自分にはもうあの輪の中に加われる権利などなかったからだ。

……やっぱり。

刃更達はこれまでと同じようにマリアが傍に居られるようにすると言ってくれているが、穏健派の迎えが来たら母と一緒に魔界へ帰ろう。今はもう、自分以上に役に立つ柚希がいるし、穏健派から自分よりもっと強くて頼りになる新たな護衛を派遣して貰っても良い。

そう思い、マリアが自分の部屋へと戻ろうと歩き出した時だった　―刃更が廊下へと飛び出してきたのは。そして、こちらを見つけると、

「ま、万理亜っ、良かった！　ちょっと来てくれ！」

「えっ……あのっ」

困惑するマリアの腕を掴んで、部屋の中へ引っ張って行く。

「コイツらすっかり興奮しちまって、俺が何言っても聞いてくれないんだ。頼む、何とか仲裁してくれ！」

「は？　いや、急にそんな事を言われましても……」

見れば澪と柚希は向かい合い、火花を散らしている状態だった。二人とも完全に火が付

いてしまっている。この修羅場を収めるのは流石に無理だ――そう思っていると、

「――助けてくれ。お前じゃなきゃ駄目なんだ」

「え……？」

きっと刃更は何気なく言ったに違いない。だが、それはこちらを魔族としてではなく、家族と思って必要としてくれているからこそ出る言葉。サキュバスのマリアではなく、成瀬万理亜として見てくれているからに他ならない。だから、

「……っ」

そんな刃更の言葉に、思わず震えを得ている万理亜に、

「へえ、面白いじゃない。万理亜、アンタはあたしの味方よね？」

「脅しに屈しなくて良い。私に味方してくれたら、澪にHな事するの手伝う」

澪や柚希までもが、当たり前のように言ってくる。

ここに居ても良いのだと――自分達は家族なのだからと。

だから――『どっちの味方なの？』と澪と柚希から同時に問われた万理亜は、

「っ……あ、えっと。そ、それはですね……」

瞳の端に浮かんでいた涙をゴシゴシと手で擦って、

「あの……刃更さん」

「ん……？」

こちらの呼び掛けに応えた刃更の唇を、不意打ちで奪ってキスをした。

『――――――』

そして突然の事に呆然となった澪と柚希に対し、見せつけるように舌を絡めて、二人よりも濃厚なキスを刃更にした後。

マリアは――否、成瀬万理亜は必死に笑顔を作った。

――すぐには無理かもしれない。

だが、それでも自分はこの場所へと戻ってくる事ができた。

だからこれから少しずつ贖罪を重ねて、いつかここを本当の自分の居場所にする事ができたらと――そう願うように想いながら。

「どっちの味方もお断りですっ。刃更さんは私のお兄ちゃんですからっ！」

満面の笑みで言い放つと同時――それまで以上の怒号と騒音が東城家に響き渡った。

## 2

――その場所は、酷く淀んだ空気が立ち込めていた。
外の音を完全に遮断する薄暗い空間――それは同時に、この場所の音が残酷なまでに外に漏れない事を意味していた。だから、
「……う、……ぐ……あ……っ」
床に転がったゾルギアが、どれだけ苦悶の声を漏らしても、助けが来る事はなかった。
――逃亡していた途中でラースに襲われたゾルギアは、すぐには殺されなかった。
兄や姉と慕っていた仲間を殺された復讐を果たすためだろう。魔力を封じる魔導具で拘束され、そのまま人気のないこの地下室のような場所へと連れて来られた。どうやら成瀬澪の監視任務のため、ラースが用意した潜伏先の一つのようだった。
そして――この場所へと連れて来られてから数時間後。
物理・魔法の両方を駆使したラースの徹底的な責め苦を受けたゾルギアは、もはや息も絶え絶えの状態にあった。
「くっ……お……が、は……あっ」

床に転がったゾルギアの全身を、灼熱にも似た激痛が襲っていた。成瀬添のせいで失った右腕や、ここへ来る前にラースに受けた脇腹への傷などは、まだ生易しかったと言わんばかりの大量骨折とおびただしい出血。そんな瀕死の身動きすらままならない状態で、

……ま、まだだ……っ。

それでもゾルギアは、この場から逃げ延びる事を諦めていなかった。少しでも長く苦しめたいのか、ラースは現在こちらへ苦痛を与える手を止めている。だからゾルギアは逃亡するための力を体内で蓄え、密かに脱出のチャンスを窺っていた。

そんな時だった。

「……やっと来たか」

ふとラースが呟くように言って、背後へと振り返った。

すると、静寂に満ちた空間にゆっくりと足音が響き始める。

「っ……誰、だ……？」

この監禁と拷問は、ラースの個人的な私怨による復讐だ。よって、この場所に第三者を呼ぶ必要性はない。呻くようにゾルギアが問うと、

「いや……実は、アンタが死ぬところをどうしても見たいって奴がいてな」

と、ラースが肩を竦めて笑いながら言った。その言葉に、

……まさか。

ラースの話では、穏健派の中には滞の養父母を慕っていた者は数多く居るらしい。それこそ中には、死んだ二人やラースが育った孤児院の出身者も居るだろう。そういったゾルギアを恨んでいる者達ならば、この場へ呼ぶ事は充分に考えられる。

――それとも、まさかゼストだろうか？

彼女を使えないゴミと罵り、始末しようとした自分の最期を見に来たのだろうか。

まずい、とゾルギアは内心で激しい焦燥を得る。誰が来るにせよ、ラース以外にも監視の目が増えればそれだけ脱出できる可能性が失われてしまう。

……っ、いいや……。

それでもゾルギアは己が生き延びるチャンスを諦めない。相手の数が増えるという事は、同時に揺さぶりを掛けて惑わせるチャンスも増えるという事だ。

そして、こちらに恨みを持つ者の感情ならば、冷静さを失っているため操りやすい。

……待っていろ。

血まみれの状態で、ゾルギアは心の中で暗く笑った。必ずここを出て、自分をこんな目に遭わせた連中を一匹残らず縊り殺してやると。

そのための蜘蛛の糸として、やって来た訪問者を歓迎しようとしていたゾルギアは、

「……な、に……？」

やがて姿を現した相手を見て呆然となった。

現れたのは穏健派の魔族ではなかった。だが、ゼストでもない。

そもそも――やって来たのは魔族ではなかった。ゾルギアの眼の前へ現れたのは、

「……東城……刃更……っ？」

信じられないものでも見たかのように、ゾルギアは彼の名を呼ぶ。

「――――」

だが、刃更は瀕死の状態で床に転がっているゾルギアを一瞥すると、ラースの下へと向かった。そして二人は、まるでゾルギアの存在を無視するかのように話し出す。

「すまない滝川……少し遅くなった」

「本当だぜバサっち。もう少しで待ちきれなくなっちまう所だったぞ」

「悪いな……澪達の日を誤魔化すのに思ってたよりも手間取ってさ」

少し申し訳なさそうに言った刃更に、ラースが苦笑する。

「何だ……どうせまたエロい事でもしてたんだろ。ったく、色男は羨ましいね」

「……言っておくけどな、案外こっちは命懸けなんだぞ」

と刃更は嘆息。そんな二人の自然なやりとりを、

「……っ？」

床のゾルギアは戦慄の想いで見上げていた。ラースが平然としているのはまだ解る。ゾルギアをこの場所へ連れてきて、こんな目に遭わせたのは他ならぬ彼なのだから。

――だが、刃更は違う。

血まみれで、手足もあり得ない方向にねじ曲がり、今にも死んでしまいそうなゾルギアを見ているというのに。

東城刃更は、まるで何事もないかのようにラースと会話をしていた。

余りに異常な状況。

一体目の前で何が起きているのか解らなかった。すると、

「成瀬澪を監禁したお前の隠れ家の場所を教え、マリアの家族を救い出す交換条件として、俺にお前を殺させる――実はその他に、俺とコイツがした取り引きがもう一つあってな」

そう言って、ラースがこの状況について説明を始める。

「今回の件で、遅かれ早かれ俺の正体は成瀬澪に知られる事になる訳だが――俺は一度、彼女を刺激してウィルベルトの力を暴走させたり、バサっちをこっぴどく痛めつけた事があってね。当のコイツはそれを含めて俺と手を組んだ訳だが、バサっちを慕っている成瀬や野中はそうはいかない。だから今後の事を考えると、彼女らへのフォローは必須なんだ

よ。そして、それはバサっちにやって貰うのが最も効果的なんだ」

そして、

「対するバサっちは、一度倒した筈の敵に再び襲われるような可能性は完全に潰しておきたいらしい――それこそコイツ流の言葉で言うなら、ゼロになるまで」

つまり、

「お前が間違いなく死ぬのを、ちゃんと自分の目で確認させろってよ」

「っ――な、……お、前……っ？」

ギョッとなってゾルギアが見上げると、ようやく刃更はこちらと視線を合わせてきた。

「――――」

冷たい眼だった。こちらの存在の全てを否定するかのような、無機質なその瞳に、

「……っ!?」

目の当たりにしたゾルギアは、心臓が凍り付くような震えを得る。

……何と、いう事だ……っ。

ゾルギアは今こそ、己の失態を呪う。迂闊だった。自分は間違っていた。東城刃更を甘く見て――否、完全に見誤っていた。お人好しで正義感が強い、ただそれだけの青年だと思っていた。――だが違った。この青年はただ優しいだけではなかったのだ。

それも最悪の理由での停学だ。授業をサボって女子トイレに侵入とか、精神的ダメージが無理すぎる。しかし二歩目を踏み出した時には、刃更はどうにか思考を切り替えて、

「こうなってたんだな……」

そして刃更は、生まれて初めて女子トイレを見た感想を呟いた。

「どうです？　実際に見てみると、意外と想像と違っていたでしょう？」

「……まあな」

やはりイメージしていたものとは若干の誤差はある。その誤差を潰すのが今回の目的だ。

「では刃更さん、念のため個室のチェックをどうぞ」

万理亜に促され、止むを得ず刃更は個室の中を一つずつチェックしていった。鍵の掛かり具合や扉の建て付けを調べ、一通り問題が無い事を確認すると、

「終わったぞ……問題なしだ」

「あれー、もう終わりなんですか？　そんな～……何か気になる所とかありません？」

何で残念そうなんだ。軽く万理亜をしばき倒したい欲求にかられながら、

「特にないって……いや、一つだけ念のため確認しておきたい事があるかな」

「おおっ、刃更さんが女子トイレに興味をっ？　どうぞっ、何でもお答えしますっ！」

「その無駄に嬉しそうなのは何なんだ……いや、まあ大した事じゃないんだけど。どの個

その可能性に気付くチャンスはあった。理論不明の消去技を使える事を知り、ゾルギア自身が手に入れようとしていた青年の情報だ。当然マリアに報告をさせている。

己の能力を暴走させ、仲間達の骸を消してしまった過去を持つ元勇者の一族の青年。

だが先代魔王の血を引く澪と出逢った刃更は、彼女を守ろうと再び剣を手に取った。

そして――過去の悲劇が、刃更に二度と大切なものを失わせないと誓わせた。

自分が守ると誓った存在のために必要ならば、どこまでも残酷に徹する――そんな凄惨な覚悟をもたらしていたのだ。だが、その決意がラースと手を結ばせたのだとしたら、

「そ、それならば……っ、東城刃更……私とも、取り引きをしないか……？」

ゾルギアは必死に、刃更へと取り入る事を試みる。

「っ……高位魔族として、永い時を生きてきた私なら……現魔王のレオハルト陛下や、他の高位魔族で構成されている枢機院について情報を回せる。それも、そこのラースなどでは決して知り得ないような深い情報だ」

だから、

「ウィルベルトの力がある以上、成瀬澪は今後も狙われ続けるぞ……あの娘を守る事を第一に考えているお前ならば、私の持つ情報がどれほど有用か――」

解るだろう。そうゾルギアは口にしようとした。だが言えなかった。こちらを見つめる

刃更の瞳の冷たさが、それ以上の言葉を許さなかったからだ。そして、
「さて、この胸くそ悪い面も見飽きたし。そろそろ始末するか――良いよなバサっち」
「ああ……」
刃更の了承を得た滝川が、ゆっくりとこちらへ近づいてくる。
一歩、また一歩とゾルギアの死が迫ってくる。それなのに、
「――――――」
ここまで来てもなお、東城刃更はゾルギアに対して何も言わなかった。
罵倒も、侮蔑も、嘲笑も、何一つ与えてくれようとしない。
ただ黙って、ひたすらに冷たい瞳でこちらを見つめ続ける。ラースによってこれからゾルギアへと与えられるものが、一片の疑う余地もない絶対の死であるように。
……クソっ、何か……何か方法は……っ？
ゾルギアは必死に逃げ延びる術を探すが、終わりの時はすぐ眼の前に迫っていて。
「っ――――……！」
絶望に眼を大きく見開いた――その直後。
ラースの手から放たれた衝撃波が、ゾルギアの長きに亘った生涯を終わらせた。

# 3

「――ゾルギアの霊子反応が消えた？」

魔王レオハルトがその報告を聞いたのは、西域の視察から王城へ戻ってからになった。

発見された遺跡の価値が本物だと判明した後。自分の役目は終わったとばかりに即座に自分の館へ戻ったゾルギアに対し、レオハルトは残って周辺の視察を行なったためだ。

「まさか……死んだというのか？」

長い廊下を歩きながら怪訝に問うこちらに、

「まだ詳しい事は何も。今しがた入ってきたばかりの情報ですので」

レオハルトを出迎えてくれた、信頼できる側近のバルフレアが後に付きながら答える。

――レオハルトを新たな王とする現魔王派の勢力は、現在の魔界では最大の反面、一枚岩ではないのが現状だ。その中には若いレオハルトをお飾りの傀儡とし、意のままに操ろうとしている者達もいる。そして、そうした抵抗勢力のひとりがゾルギアだった。

そのためレオハルトとしては、前に成瀬洛に手を出そうとして監視役の任を更迭した際、可能ならばゾルギアを極刑にしておきたかったのが本音だった。ゾルギアが抱いていた

野心や野望は、放置すればいつか必ずレオハルトにとって看過できない障害となるからだ。
しかし残念ながら、ゾルギアが属する枢機院内の抵抗勢力の反発にあい、最終的には謹慎という甘い処分しか与えられなかったのである。しかし、
……どういう事だ？
ラースの報告では、こそこそと隠れて何やら動いているようだったが、自分と同じ高位魔族であるゾルギアがそう簡単に命を落とすとは思えない。用心深い性格の持ち主だし、何よりその力は本物だ。そんなゾルギアが死んだとしたら、余程の事があったに違いない。
「詳細を調べて報告しろ――至急だ」「――畏まりました」
レオハルトが放った命令に、バルフレアが頷きと共にスッと姿を消した。
対するレオハルトはそのまま歩を進め、玉座の間の前へと至ると、衛兵が姿勢を正して重く巨大な扉を開け放つ。
「――ご苦労」
レオハルトは彼らに短い労いの言葉をやると、玉座の間の中へと足を踏み入れた。
そして、背後で扉が閉まる音を聞きながら部屋の奥へと歩き出し、
「――――」
ところがすぐに足を止め、スッと眼を細めた。広間内の異常に気付いたのだ。

――中で控えている筈の衛兵らが、ひとり残らず床に倒れ伏していた。

死んではいない。気を失っているだけで呼吸は穏やかだ。しかし、

……二十を超える親衛部隊が全滅か……。

ただの兵士達ではない。魔王である自分の警護を任されている親衛部隊だ。そのいずれもが精鋭揃い。そんな彼らが、外の衛兵に気付かれる事なく倒されている。

だとしたら、恐らくこの状況は密やかに、しかもごく短時間で行なわれた。そんな真似ができるような実力の持ち主は、レオハルトが知る限りではごく一握りしかいない。

「……」

警戒を強めたレオハルトが、外の衛兵を呼ぶ選択肢を思い浮かべた時。

ふと視線の先――自分しか座る事が許されない筈の玉座に、悠然と腰掛けている男がいる事にレオハルトは気が付いた。本来ならば、そのような蛮行をレオハルトが見逃す筈がない。だが眼の前の男は、レオハルトに気付かれる事なくそれをやってのけていた。

完全な気配の消去。レオハルトでも気付かなかったのだ。親衛部隊では、姿はおろか気配すら察する事ができないまま昏倒させられたに違いない。すると、

「ようやくお帰りか、新しい魔王さん……お？　何だ、今度の魔王は随分と若いんだな」

レオハルトの玉座に座っている男が、こちらを見て驚いたように言ってくる。

――現在。この魔界において、レオハルトの顔を知らない者はほぼいない。
だが、男の反応は明らかにレオハルトを初めて見た者のそれだった。
そして――こちらを知らなかった眼の前の男の名を、しかしレオハルトは知っていた。
こうして直接会うのは初めてだが、その顔と名はよく知っている。
「……ジン・トージョー」
「へえ、俺を知っているのかい。新しい魔王にまで名前と顔が売れていたとは光栄だな」
呟くように言ったレオハルトに、迅は嬉しそうに笑った。そして、
「――だったら、俺がここに居る理由も解るよな？」
そう言って、ゆっくりと玉座から立ち上がる。首をコキコキと鳴らしながら、
「こっちには別件で来ていたんだが……どうやら俺の可愛い息子が、あっちで色々と頑張ってるみたいでな。そうすると、父親としては応援してやりたくなるし、良い所なんかも見せたくなる訳だ。まあ優しい親心って奴だな」
そして、東城迅が悠然とこちらへと向かって歩き始めたのをレオハルトは見た。
かつて史上最強と呼ばれた勇者が、歯を剝いた獰猛な笑みと共に告げてくる。
「ウチのガキ共に手を出してくれてどうも――ちょっくらお礼に来てやったぜ」

# あとがき

既に本編をお読みの方も、これから読まれようとしている方も、本書を手に取っていただきましてありがとうございます。上栖綴人です。

まずは前巻に続いて今回もこの話題から！『月刊少年エース』さんにて、みやこかしわ先生による本作のコミカライズ版が、4月26日発売号での告知漫画を経て、5月25日発売号から本編の連載がスタートしています。このあとがきの後ろにも告知ページがありますので、ぜひそちらをご覧になり、コミックの方もチェックしてみて下さい。

では話題を本書へ移して。今回の三巻は万理亜巻であると同時に、過去に養父母を殺された澪の巻でもあります。万理亜をメインに据えた事もあり、前半はこれまでで一番明るいドタバタやサービス満点でお送りできたのですが、実は今回も「エロが物足りねえ」と担当さんに言われていたりします。私がせっせと直したサービスシーンはいかがでしたでしょうか？　いかがというか、これ本当に大丈夫なんでしょうか？　コミカライズ始まるんですよ？　掲載誌は『少年エース』で、『成年エース』じゃないんですよ？

そんな一方で、中盤以降はこれまで少ししか説明していなかった澪や万理亜の背景を

描いたため、必然的に暗く重い感じになりました。ですが、お陰でこれまでヒロイン達の個性に押されていた刃更も、ようやくこの巻のエピローグで少し彼独自の色を見せられたのではないかと思います。まあ一巻のラストで滞達に黙って滝川と手を組んだりしていた時点で多少の伏線というか予兆はあった訳ですが、今後の刃更は大切な存在のためにどこまで優しくなれて、どこまで残酷になれるのかが色んな意味で鍵になりそうです。しかしそう考えると、刃更以上に様々な経験をしていながら、それらを乗り越えて今ああやって笑っていられる迅は、つくづく最強の勇者だったんだなーと思いますね。

では、本書の関係者の皆様に謝辞をー。イラスト担当のニトロプラス大熊さん、毎度凄まじいイラストをありがとうございます！　競泳水着について熱い打ち合わせができて良かったです。これからもぜひ色々とアイディアをいただければと。そして担当さんやその他の関係各所の皆さん、今回もご協力とご尽力をいただきありがとうございました。

さて、ラストで迅が笑いながら現魔王にケンカとか売っちゃいましたし、刃更達も強敵を倒してしまった以上、物語はさらに動いてゆきます。とりあえず、後ろのページにある次巻予告を見ながら四巻をお待ちいただければと。次回はとうとうあの人をクローズアップ。果たして、白衣＋水着＋美人＝正義の方程式は成り立つのか？　お楽しみに～。

上栖綴人

東城……あの女に
長谷川千里に

室の中にもある、小さなゴミ箱みたいのって何なんだ？　初めて見たんだけど」
「は……？　刃更さん、あれが何か知らないんですか？　高校生にもなって？」
「え？　あれって高校生なら知ってないとおかしいものなのか？」
全然知らないんだが。素で万理亜に問い返され、思わず刃更が不安になると、
「いえ、そういう訳ではないんですけど……あ、刃更さんって生まれた時からずっと迅さんとお二人だったんでしたっけ。なら知らない可能性もあるんですかね……」
考え込むように言った万理亜は、やがて赤くした頬に両手を当てて、
「うわ～まさか、こんな形で刃更さんの純粋な一面を知る事になろうとは。澪さまには、あれだけの事をしているというのにっ。あの、本当にあれが何だか知らないんですか？」
「悪かったな……生憎、と男子トイレにはあんなものはないんだよ」
「当然です。女性が使うトイレに置くものなんですから」
「そうなのか……？　でも、家のトイレにはあんなものないだろ」
「そりゃ刃更さんが居たら、澪さまと柚希さんは恥ずかしくて使えませんよ」
「……恥ずかしい？　何でそんなものがトイレにあるんだ？」
「いやーん、本当に知らないんですね刃更さん。ピュアボーイ炸裂じゃないですかー！」
「こ、こらっ、でかい声を出すなっ」

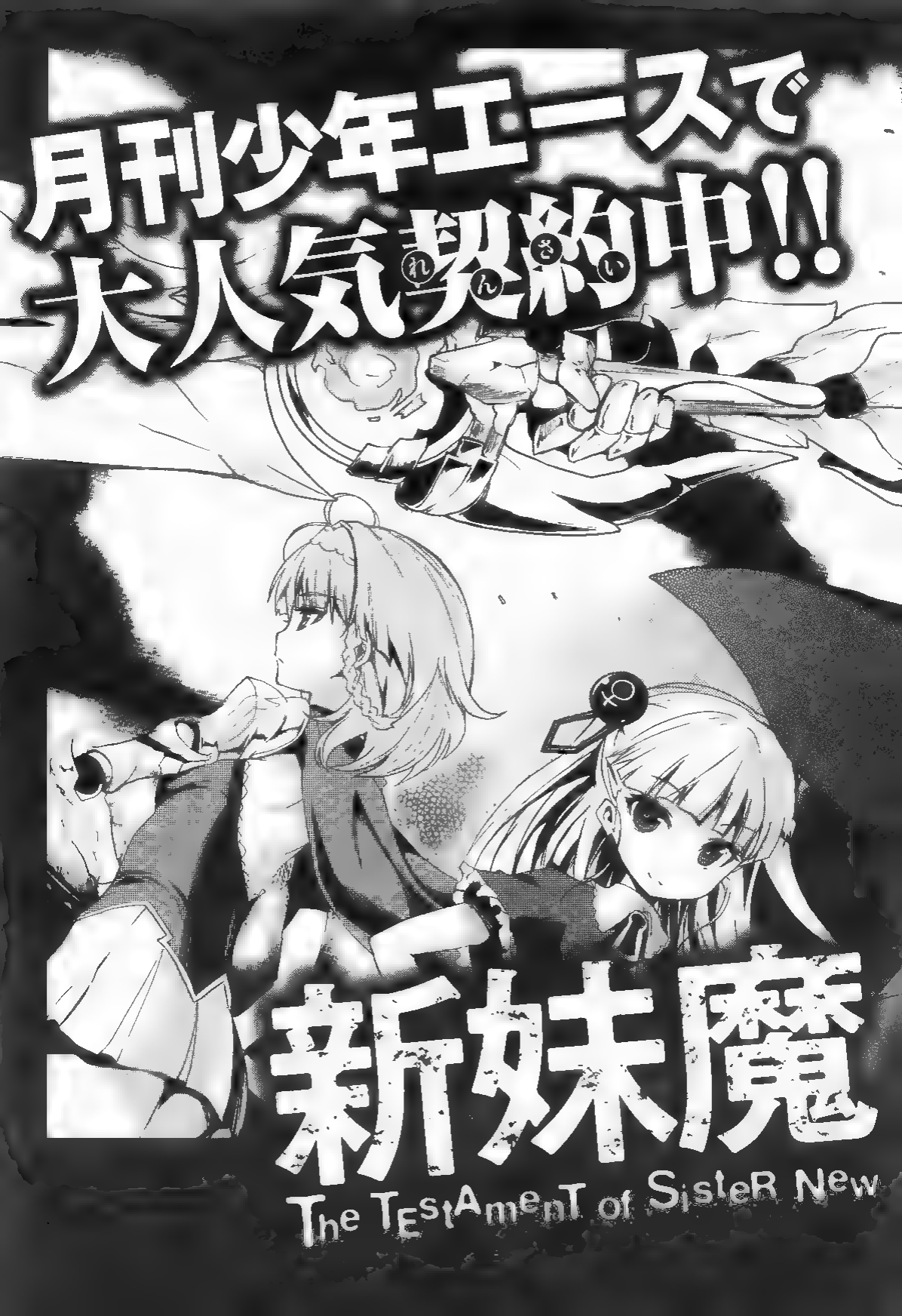
気を付けろ――
ゾルギアを倒し、一時の平和を手に入れた刃更達は、
穏健派の魔族とコンタクトを取る傍ら、
本来の学生生活に追われていた。そして開催される体育祭。
しかし、その裏に乗じて刃更達を狙う、新たな悪意が動き出す――
新妹魔王の契約者(テスタメント) Ⅳ
COMING SOON!

スニーカー文庫の超人気作が
みやこかしわの手でコミカライズ！
更に限界を突破する、
最強契約者の
ディザイア・アクション!!

俺は妹（コイツ）を守りぬく

# DEVIL の契約者（テスタメント）

[原作] 上栖綴人（うえすてつと）
[漫画] みやこかしわ
[キャラクター原案] 大熊猫介（おおくまねこすけ）（ニトロプラス）


月刊少年エースで
大人気契約中!!
新妹魔
The TESTAMENT of SISTER NEW

# 新妹魔王の契約者Ⅲ


著　上栖綴人

角川スニーカー文庫　17991

2013年6月1日　初版発行

発行者　井上伸一郎

発行所　株式会社角川書店
〒102-8078 東京都千代田区富士見2-13-3
電話・編集　03-3238-8694

発売元　株式会社角川グループホールディングス
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
電話・営業　03-3238-8521
http://www.kadokawa.co.jp

印刷所　旭印刷株式会社
製本所　株式会社ビルディング・ブックセンター



※本書の無断複製（コピー　スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また　本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

※定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本は、送料小社負担にて、お取り替えいたします。角川クルー　プ読者係までご連絡ください。（古書店で購入したものについては、お取り替えできません）

電話 049-259-1100（9:00～17:00／土日、祝日、年末年始を除く）
〒354-0041 埼玉県入間郡三芳町藤久保 550-1

©2013 Tetsuto Uesu, Nekosuke Okuma


KADOKAWA SHOTEN, Printed in Japan　ISBN 978-4-04-100860-7　C0193


**★ご意見、ご感想をお送りください★**

〒102-8078 東京都千代田区富士見 2-13-3
角川書店　角川スニーカー文庫編集部気付
「上栖綴人」先生
「大熊猫介」先生

**[スニーカー文庫公式サイト] ザ・スニーカーWEB　http://sneakerbunko.jp**

# 角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

「大丈夫ですっ。今の私の声は普通の人には聞こえませんから！」
「俺がヤバイんだよっ。つーか何でも答えてくれるんだろ、さっさと教えてくれ」
こっちは早くここを出たいんだ。授業中だって誰か入ってくる事はあるんだぞ。
「少々お待ちを。これは刃更さんの大人の階段にまつわるお話です。どういう形で真実を知っていただくのが一番萌える展開か、ちょっと脳内会議に掛けますので」
「馬鹿な事を言ってないで――」
と言い掛けた刃更は、そこでふと言葉を切った。
不意に万理亜が表情を一変させ、バッと天井を仰ぎ見たからだ。
「――」「ど、どうした……？」
その真剣な顔つきに何事かと刃更も天井を見上げるが、何の異常も見当たらない。だが、
「この気配は――」
そう言うなり、万理亜は弾かれたように女子トイレを飛び出してゆく。
「お、おい……万理亜っ!?」
慌てて後を追い掛けながら、東城刃更は焦燥と緊張を得た。
今はまだ一時限目の真っ最中。時刻は余裕で午前中だというのに。
……まさか、敵が来たっていうのかっ？

こちらの数歩先――階段を駆け上る万理亜の様子は尋常ではなかった。あっという間に階段を最後まで上りきると、しかし屋上へと続く扉の前で万理亜は不意に動きを止めた。そして片手をバッとこちらへ突き出し、刃更に静止するよう伝えてくる。

「……っ」

思わず息を呑んだこちらの眼の前で。

万理亜は真剣な顔つきで、ゆっくりと取っ手を回して屋上の扉を開けていった。

万理亜に続いて校舎から屋上へと出た刃更を迎えたのは、無人の空間だった。

――だが東城刃更は緊張を解かない。

冷却塔や給水タンクの陰など、死角となる場所は幾らでもある。そして何よりも、

『……』

微かではあるものの、刃更と万理亜以外の者が発する気配と息遣いがあった。

――どうやら相手は、巨大な外調機の向こう側に居るようだった。

だから刃更と万理亜は無言で頷きを交わすと、行動を開始した。

外調機の側面に回り込むと、まずは万理亜が顔だけ出して向こうの様子を窺い、

「（……ビンゴ。やっぱり居ました）」

囁くように発せられたその言葉に、刃更はゴクリと喉を鳴らした。気配から察するに、どうやら向こうは二人。滝川からは、ゾルギア以外にも油断のならない配下がいると聞いている。正直、爵位クラスの高位魔族二体と正面からぶつかって勝てるとは思えないが、……せめて、戦闘面での対策の手がかりだけでも……っ。

東城刃更は祈るような想いで、万理亜の頭の上から自分も顔を出し、そして見た。

そこに居たのは想像通り二体の高位魔族――ではなく、

「……なあ万理亜」

「何ですか、刃更さん。声が大きいですよ。向こうに気付かれちゃうじゃないですか」

「あれは一体何だ……？」

刃更は今、信じられないものを目の当たりにしていた。固まりながらそれを問うと、

「は？　見て解りませんか？　あれは『教室を抜け出して授業をサボり、屋上の陰に隠れてスリルのある色事に夢中になっている生徒同士のカップル』というものです」

「……そうか。俺としては、見間違いの可能性に結構懸けてたんだが」

微かな望みが絶たれたな。先刻までの俺のシリアスを返せ。ハァと刃更は嘆息し、

「まさかとは思うが……あれ、サキュバスのお前の魔法じゃないだろうな？」

「おやおや、見損なわないで欲しいですね刃更さん。私が魅了や催淫の魔法を使ったら、あんな初々しい真似なんかで済む筈ないじゃないですかー」

はっはっは。何の自慢だそりゃ。よし今度こそこのロリをしばこう――鉄槌という名の兄の愛を知れ。熱い息を右の拳に吐きかけた刃更は、しかしそこでふと動きを止めた。

あちらの様子を眼をキラキラさせながら覗いている万理亜の横顔は幸せそのもので、

……ったく。

東城刃更は脱力した。そして顔を引っ込めると、外調機の側面に背中を凭れさせ、空を見上げながら思う――自分は、少し気負いすぎているのだろうかと。

滝川に、ゾルギアが添を狙っていると聞かされてからというもの、どうも自分は余裕を失っている気がする。だが、それは無理もない事だろう。

――滝川の話では、ゾルギアはかなり力のある高位魔族なのだという。

中世の貴族階級にもある公・侯・伯・子・男――即ち公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵の五等爵は、魔族の間でも戦闘力や権力に応じて採り入れられている。

トップの公爵は魔王と同等クラスとされ、ゾルギアの侯爵はそれに準ずる階級だ。

真っ向から戦うには強大すぎる敵。もし戦うとしたら、どうにか弱点や隙を突く位しか勝てる方法はないだろう。だが避けて通れる相手でもないのだ。単にゾルギアが添を狙っ

ているだけなら、こちらが戦いを避けるという選択肢もあったかもしれない。

――だが、それだけはないと刃更は断言できる。

ゾルギアは澪の養父母を殺した。彼女にとって、何よりも憎むべき仇なのだ。

そして成瀬澪の戦う理由は――養父母を殺した、仇の魔族に復讐する事なのである。

……それに。

同じ屋根の下で暮らす澪が、夜中たまにうなされている事があるのを刃更は知っている。

ある日突然、普通の女の子として暮らしていた日常を、大切な家族を奪われて。そして自分が先代魔王の娘で、その力を受け継いだため命を狙われていると知らされた。

それが、どれほど凄まじいショックだったかなど想像に難くない。澪は決して強くはないのだ。生まれた時から己の使命を知らされ、修行を積んできていた刃更とは違う。それでも悲劇に屈せず立ち向かう澪を、東城刃更は何としてでも守ってやりたい。

たとえ勇者である事を止め、世界のために戦う使命と力を失ったとしても。せめて同じ屋根の下で暮らす家族だけは――澪と万理亜、そして柚希だけは守り抜きたい。よって、

「あー駄目、もう全然駄目です。生温いったらありません。よもや、ゆとり教育の弊害がこんな所にまで及んでいたとは。全く嘆かわしい。この国の未来が心配です」

うん……たとえ種族としての本能に忠実すぎても、このロリエロサキュバスは大切な家

族だ。ここは一つ、寛大な心で許そう――海よりも大きな兄の愛で。

「すみません刃更さん。私もう我慢できません。ちょっとアイツらに、メープルシロップを使った愛撫ってモンを教えてきます」

「待てっ。一体どこから取り出したその小瓶っ！」

物事にも仏の顔にも限度ってモンがあんだぞ。すると万理亜は眼をパチクリとさせ、

「え？　だって、ケーキの一つも塗りたくらない愛撫なんてクソじゃないですか」

「アホかあぁぁっ！　大体あれは夢の話だろっ」

「？　何の話です？」

「……へ？　いや、そっちこそ何だよその反応……」

万理亜が口にした「ケーキを塗る愛撫」というのは、刃更がこの聖ヶ坂学園に転入して柚希と再会を果たした日の晩、刃更が澪達を裏切らない事を証明するという流れで何故か一緒に入浴する羽目になった時の話である。だが、確かに澪や万理亜とは一緒に風呂に入りはしたが、澪に胸で背中を洗われた事で鼻血を噴いて倒れてしまったため、ケーキ云々については刃更が見た夢オチだった筈だ。ところが万理亜はふと思い出したように、

「……ああ、そうでした。あれは夢って事にしたんでしたね」

「ちょ、ちょっと待て……何だそれ？」

嘘だろ。まるであれが、本当にあった出来事みたいな言い方じゃないか。

「大丈夫ですよ刃更さん。理性を飛ばして本能を暴走させた興奮状態なんて……そんなのは深層心理が見せる夢と大差ありませんから」

「……」

「おや？　どうしたんです刃更さん。そんな漫画みたいに、がっくりと地面に両手と両膝をついたりして。制服が汚れてしまいますよ？」

「……悪い万理亜、ちょっと、人にしてくれると嬉しいんだが」

世界平和とか考えながら、自分自身を色々と見つめ直したいんだ。黄昏れさせてくれ。

「駄目です。今は校内における添さまの安全を確認している最中です。刃更さんが騒いだせいで、あのカップルも慌てて行ってしまった事ですし。次に行くとしましょう」

さあ、と成瀬万理亜は言った。

「今の私達に悩んでいる暇なんてないです――それより先にやる事があるんですから」

## 3

ドヤ顔で良い事を言った万理亜にあちこち連れ回され、最後にやって来たのは、

「……よりにもよって、ここか」

呻くように言った刃更の視線の先には、女子更衣室があった。

しかも、通常の体育の授業で体操服に着替えるための更衣室ではない。温水プールの隣に併設された、シャワー付きの女子更衣室だ。刃更が入口で立ち尽くしていると、

「どうしました刃更さん？　そんな所に突っ立ってないで、さあ早くずずっと中へ」

「本当に入るのか……？」

「何を今さら……既に女子トイレを制覇している刃更さんにとって、たかが女子更衣室の一つや二つ、物の数ではないでしょうに」

「人聞きの悪い事を言うな。誰がいつ女子トイレを制覇した」

そんな嫌すぎるフルコンプリートなんぞしてたまるか。

「……つーか、流石にここはマズイだろ」

奥のプールからは、水泳の授業中と思われる女子の声が聞こえてきていた。早い話が、

「すぐ向こうには、澪や柚希達が居るんだぞ？」

「だからこそ、安全を確認しなくちゃいけないんじゃないですか」

万理亜はえへんと胸を張って、

「もし私が澪さまを狙うとしたら、間違いなくここか女子トイレのどちらかですね」

東城迅【とうじょうじん】
刃更の父で、元・最強の勇者
滝川八尋（ラース）【たきがわやひろ】
刃更達のクラスメイトだが、正体は澪を監視する魔族
成瀬澪【なるせみお】
先代魔王の娘で、刃更の〝妹〟になった少女
東城刃更【ソバサラ】
澪と万理亜の〝兄〟。特異能力《無次元の執行》の使い手
成瀬万理亜【なるせまりあ】
刃更と澪を主従契約させた下の〝妹〟。ロリエロサキュバス
野中柚希【のなかゆき】
幼馴染の刃更が好きな、勇者一族の少女
長谷川千里【はせがわちさと】
刃更達が通う高校の、美しすぎる養護教諭
ゾルギア
澪の養父母の仇で、澪の持つ先代魔王の力を狙う
ゼスト
澪の養父母を殺した魔族〝ゾルギア〟の腹心

「そりゃお前はな……」

自分が特殊すぎるケースだって解らないんだな。頼むから己を知ってくれ。

「でも、この更衣室の安全確認は必要ないと思うぞ。柚希も一緒にここを使っているんだし。恐らく更衣室に入った段階で、澪は探知魔法で、柚希は『咲耶』に呼び掛けておかしな魔力の反応とか、危険がないか確認済みの筈だ。授業の間に敵が侵入しておかしな細工をされないように、魔法の発動に反応する結界も張ってるみたいだしな」

「ならば――安全確認は省いて良いとしても、やはり念のため刃更さんには女子更衣室の構造を知って頂いた方が良いと思いますよ。女子トイレと同じで、もしこの更衣室が戦闘の現場となった時に、刃更さんがとっさの判断を迷わせるような事があってはいけませんから。さあ急いで。あと十五分程で、一時限目が終わってしまいます。早くしないと澪さま達が戻ってきちゃいますよ」

ぐいぐいこちらの手を引っ張る万理亜に、刃更は渋々と、

「……間取りを確認するだけだぞ？　ぐるっと見て回ったら、速攻で出るからな」

そう言って、仕方なく女子更衣室の中へと足を踏み入れた。しかし、壁や天井のタイルの色等が異なるトイレと違い、更衣室には男女でさほど大きな差はなかった。

「これならもう良いだろ。早く出ようぜ……万理亜？」

刃更が発した呼び掛けに万理亜は応える事なく、とあるロッカーの扉を開け放った。

「お、おいっ！　お前、何をして……」

「いえ、念のため澪さまのロッカーだけは問題がないか確認しておきませんと」

サキュバスの嗅覚か。一発で正解を引き当てた万理亜はロッカーの中身を漁り出し、

「特に問題はなさそうですね……ややっ、ちょっと刃更さん。これを見て下さい！」

「な、何だ？　どうした――」

「――えいっ」

慌てて万理亜へと顔を寄せた刃更は、ズボッと頭に何かを被せられ、

「いやん、刃更さんてば何て破廉恥っ」「へ……？」

一瞬、何が起きたか解らなかった。しかし程なくして東城刃更は、自分が何を被せられたのかを理解した　澪のショーツだ。だからキレた。

「この……っ！」

刃更は頭のショーツを取るより先に、眼の前の万理亜の両頬を横に引っ張る事を優先した。それは最善の選択よりも、とっさの感情を優先した反射的な反撃だ。

「にゃー、ばひゃりゃひゃん、ひょんにょひょーひゅ、ひょーひゅれひゅにょー」

「やかましいっ、このロリエロサキュバスっ！　今度という今度は――」

許すものかと、そのまま持ち上げて振り回してやろうとした時だった。
『あーやっと終わった～！』『もう一時間目からプールとかホント最悪～』
などと、女子達の声が更衣室の入口の向こうから聞こえてきたのは。
「なっ……!?」
・時間目終了のチャイムは鳴っていない。まだ十分以上も時間は残っているというのに、なぜもう女子達が戻って来ている？　まさか体調不良者でも出たのだろうか？
……いや違う。そうじゃない……っ。
基本的な事を失念していた。ただでさえプール授業は、通常の体育よりもずっと着替えに時間が掛かる。それが女子なら尚更だ。ならば、授業は早めに終わる必要がある。
刹那に思考を焦らせた刃更は、
「――刃更さん、隠れてっ！」「えっ――ちょっ、おいっ？」
本来なら隠れられるスペースなどない更衣室で、不意に万理亜の手によってとあるスペースへと強引に押し込まれた。それは暗く狭い場所――澪が使っていたロッカーの中だ。
「（ふう……間一髪でしたね刃更さん）」
そう万理亜が言った瞬間、プール授業を終えたクラスの女子が次々に更衣室の中へと入ってきた。スチール製の扉の向こうが、あっという間に騒がしくなる。

「(こ、こんな所に突っ込んでどこが間一髪だ……てか何でお前まで入ってきてるっ!?)」
「(これは私とした事が。刃更さんだけを、こんな暗くて狭い場所にお一人にするのは忍びなくて、とっさに後を追い掛けてきてしまいました。いやー迂闊です。でも、お陰でこうして刃更さんとこんなに密着できますね。えへへ、刃更さーん)」
「(……随分と余裕があるみたいだが。こんな事をしている所を澪に見られたら、俺だけじゃなくてお前も半殺しにされると思うぞ)」
こちらの言葉を聞いてハッとなった万理亜の顔に、途端に大量の脂汗が浮かんだ。
「(っ……ど、どうしましょう、刃更さんっ？　もしや私は激しくピンチなのではっ!?)」
「(心配すんな……俺の方がお前よりよっぽどピンチだから)」
こっちは下手すりゃブタ箱行きだ。何せ手を下ろした状態で、無理矢理ロッカーの中に入れられたからな。こちとらお前に被らされた澪のパンツを取る事もできないんだよ。
「(うう、きっとまた折檻です……くっ、どうせ澪さまに怒られる事になるなら)」
「(お前、何をして……って、おいっ!?　何で服を脱ぎ出してるっ!?)」
「(どうせ半殺しにされるなら、刃更さんに沢山セクハラしちゃおうと思いまして。これぞピンチをチャンスに変える逆転の発想。こういう時、小さい体は便利で良いですねー)」
そう言って、極小のスペースで器用に服を脱いでショーツ一枚になった万理亜に、

「（よ、止せっ……諦めずに事態を打開する方法を）」

刃更は必死の説得を試みる。だが、万理亜は完全に据わった瞳でこちらを見上げて、

「（うふふふ。さあ刃更さん……諦めて、私と一緒にハァハァしましょう？）」

そう言うなり、小さな手を刃更の体操服の中へと入れてきた。

## 4

少し早めに水泳の授業が終わった後。

女子生徒達は順に身体を温めるためサウナ室へ入り、その後シャワーを浴びていった。

個室の一つでシャワーを浴びていた柚希は、

「……」

やがて蛇口を閉めると、用意していたバスタオルでそっと身体に付いた滴を拭き始めた。

心地の良い肌触り。思わず顔を寄せると、柔軟剤の匂いがふわりと香る。それは、

……刃更の匂い。

柚希は思わず眼を閉じた。自分が使っているバスタオルは、東城家で洗濯されたもの――

刃更の服などと同じ洗剤と柔軟剤を使用しているものだ。よって身体を包むと、

……刃更に抱き締められてるみたい。

胸も腰も、尻や太股も――全部を刃更に触れられる。彼の匂いになってゆく。

「ん……」

柚希は交差した両腕を背中へ回すように、己の身体を抱いた。そして、その状態でいる事しばし――やがて満足を得た柚希は、静かにシャワーの個室を出た。

裸の級友達の間を抜けるようにして、女子更衣室のロッカーの前へと戻る。

クラスの女子達が、明るい声で学校生活やプライベートの話題に花を咲かせている中、柚希は無言でロッカーを開けると、中からバッグを取り出した。

そして換えの下着を取り出そうとしたところで、柚希の横へと並んだ者がいた。

それは、こちらのすぐ右隣のロッカーを使っている少女。現在、柚希と同じく刃更の家で同居している成瀬澪だ。サウナからシャワーまで全てを済ませた最初のグループの柚希と、最後のグループでサウナから出たばかりの澪が、偶然同じタイミングでロッカー前に戻ったのである。澪の向こうには、相川志保と榊千佳が居た。同じクラスの中でも、澪が特に仲良くしている二人だ。彼女達と話す澪の顔には、弾けるような笑顔があって、

「――――」

不覚にも柚希は一瞬見惚れてしまう。

――成瀬澪は、この学校では最も有名な美少女の一人だ。

テレビでよく見るアイドルなど霞むような可愛らしい顔に、グラビアアイドルが嫉妬するような抜群のプロポーション。少し気は強いものの、性格は明るくて気さく。そのため、彼女を「澪姫」と呼び慕う男子生徒達のファンは後を絶たない。

同じように、柚希の事を「柚希姫」と呼んでいる男子達もいるようだが、口数が少なく余り愛想のない自分などよりも、澪のような女の子の方がきっと人気は高いだろう。

だが、その事は別に良い。周囲にどう思われようと、柚希には余り重要ではない。

柚希にとって大切なのはただ一つ――刃更がどう思っているかだ。野中柚希にとって、東城刃更という青年は特別な存在である。物心がついた時からそうだ。それは彼が勇者の一族の里を追われても、先代魔王の娘である澪を守ると決めても揺らぐ事はなかった。

……だけど。

野中柚希は思う。自分は今、不安を得ていると。

その理由を柚希は理解していた――成瀬澪が想像以上に強敵なのだ。

それは柚希が勇者の一族で、澪が先代魔王の娘だからではない。一人の女の子として、澪は強敵なのである。それは刃更達と同居を始めて、より強く感じるようになった事だ。

間違いない――澪も柚希と同じように、刃更に対して特別な感情を抱いている。

素直じゃない澪は、どこかまだ己の感情をきちんと自覚できずにいるようだが、程なく自分の刃更に対する感情が、どういったものかを理解する事だろう。

危険だ、と柚希は思う。何せ澪は、柚希にはない魅力を幾つも持っている。

その内の一つが、信じられないようなサイズのあの胸だ。サキュバスの万理亜が言うには、澪はあの胸を使って刃更をたらし込み、急速に距離を縮めつつあるのだという。

Gカップ。字面は柚希のCカップに〝「〟が付いただけなのに四サイズも大きい。そんな胸を、既製の競泳水着に無理やり押し込んでいるのだ。あんなのはもう、眼の毒を通り越して犯罪だ。あんなおっぱいで迫られたら、純情な刃更はひとたまりもないだろう。

「……水着がキツくて窒息すれば良いのに」「……？　何か言った野中？」

巨大なおっぱいを見ながらポツリと呟くと、相川と榊との会話を一旦終えた澪が、こちらに怪訝な顔で問うてくる。だから柚希は、澪の胸を見ながら言った。

「準S級監視対象……」

遺憾ながら現状、自分はこの魔王級おっぱいを黙って見ているしかない。こんな危険な胸など、さっさと準S級消滅対象にして速攻で滅ぼしてやりたいのだが。しかし、

「……」「えっと……何で笑ってんのアンタ？」

澪の言うように、柚希は小さく笑っていた。実は今、柚希には一つの希望があった。

それは自分と澪の間にある、バストサイズの格差問題への光明。サキュバスの万理亜が教えてくれたのである　女の胸は、好きな男性に揉まれる事で大きくなるのだと。

……それに。

同居を始めたその日に、改めて刃更達からは澪を取り巻く魔族の勢力の現状や、それらに対する刃更の関わり方も聞いている。そして、そこで柚希は重要な事を刃更達から聞かされた。それは刃更と澪が、魔法による主従契約を結んでいる事についてだ。

そして――その恩恵についても詳しく教えて貰い、その上で万理亜から提案された。

――よかったら柚希も、刃更と主従契約を結ばないかと。

澪の配下である万理亜としては、本当は彼女と契約して欲しいらしい。

だが、それだと柚希が納得しない事を万理亜は理解していた。だから間接的にでも澪を守る事に役立つよう、刃更と契約を結び、一緒に強くなって欲しいと頼まれたのである。

現に刃更と澪は、この契約のお陰で戦闘力を上げる事ができているらしい。

よって、柚希は即座に了承した。万理亜の提案に何の問題も感じなかった。

むしろ、柚希にとってはメリットしかない。互いの居場所が解るようになるのも、自分が刃更の配下となり、信頼を深める事で彼と共に今より強くなれる事も。

何より――澪だけが、仕方なしに刃更からHな事をされるという状況も、刃更と柚希、

が主従契約を結べば全てが同じ条件になれる。

後はただ、重要なのは刃更との主従関係の深さだけ。

――だが野中柚希は確信する。その点だけは、自分は決して澪に負けないと。

自分と澪なら、素直なのは間違いなく自分の方なのだから。よって、

「……今夜が楽しみ」

そっと呟くように言った柚希に、隣の澪が「え？」とこちらを見た。そして柚希が口にした言葉の意味が解ったのか、その表情がすぐに不機嫌めいたものになる。

しかし柚希は、そんな澪には構う事なく下着を身に着け始めた。片方ずつ足を入れたショーツをゆっくりと上げ、太股を滑らせるようにしてキュッとお尻を入れる。そして将来の有望株――ちょっと〝「〟が付いていないだけのGカップの胸をブラに収めると、さっさと制服を着て更衣室の出口へと向かった。悠然と歩を進めながら、野中柚希は思う。

……あと少しで。

今夜は満月――数時間後にはきっと、自分と刃更は新しい関係になっている。

更衣室を出て行く柚希の背中を見送りながら、成瀬澪は思う。

REC
【02m41s】
1080
24
「この位、ウチだって平気やもん……っ」
「――すぐに屈服させてやるからな」
「エロいお尻ですねぇ……澪さまのお胸と良い勝負です」
いつの間にか眼の前にまで来ていた万理亜が、笑みを含んだ声で言った。
見れば、万理亜はこちらに向かって家庭用のビデオカメラを回しており、
「っ――な、何を……っ」
録画ランプが点灯しているのを見て、柚希は激しい羞恥と共に困惑の声を上げた。

……な、何よアイツ。本気で刃更と主従契約を結ぶつもりなわけ？

万理亜から主従契約の説明を受け、澪がどんな目に遭っているかも聞き、その様子を目の当たりにした事さえあるというのに。柚希はあっさりと万理亜の提案を受け入れた。

……野中は平気なんだ。

主従契約魔法は現状、唱えられるのは澪か万理亜しかいない。だが、勇者の一族が敵対している魔族の魔法なのに、それでも柚希は刃更との契約を望んだ。刃更と一緒に強くなれる――そのためなら、柚希は少しも躊躇わなかった。そして、柚希まで巻き込む事に抵抗を覚えて渋る刃更に、普段の大人しさがまるで嘘のように強く説き伏せたのである。

万理亜が提案し、柚希が望み、刃更が承諾すれば多数決は確定だ。澪にはもう、刃更と柚希の契約を止める事はできない。だが澪の魔力で主従契約魔法を唱えると、配下側が主を裏切った時に発動する呪いの特性が、澪が力を受け継いでいるらしい先代魔王ウィルベルトの力に由来する可能性がある。よって必然的に選択肢は万理亜に限られるのだが、

……どうしよう。

今夜の事を思い、澪は焦りを募らせた。何せ柚希は凄まじく綺麗だ。その透き通るような美しさは、残念ながら澪も及ばない。「柚希姫」と呼ばれているのは伊達ではないのだ。おまけに柚希は刃更の幼馴染で、彼と過ごした時間は澪よりもずっと長い。よって刃

更とまだ付き合いの短い澪は、主従契約という繋がりがあってようやく柚希と互角だったのだ。それなのに、もし刃更と柚希が主従契約を結んで、澪と対等になって。

そして――刃更の眼の前で、柚希にサキュバスの呪いが発動したりしたら。

……きっと野中は、あたしより上手く屈服しちゃう……。

柚希は何かと刃更に対して積極的だ。そんな柚希が主従契約を結べば、恐らくあっという間に刃更に屈服し、澪を置き去りにして二人だけで関係を強めていってしまいかねない。

ただでさえ先日の『白虎』との戦いで、柚希の本来の力を見せつけられているのに。

「っ……あたしだって」

もう少し位なら頑張れるんだから――そう心の中で呟きながら、ロッカーの扉を開けた澪は、そこで全ての動作と思考を停止した。ロッカーの中に、澪が穿いていた白のショーツを頭に被り、そんなショーツよりも顔面を蒼白にした、体操服姿の刃更が居たからだ。

「……」「……」

突然の事に何もできず、かつてないレベルの気まずい沈黙が澪と刃更の間に流れた。

――さらに、もっと見過ごせないものもあった。刃更の体操服のTシャツの中へ頭を突っ込み、しかも何故かショーツ一枚で、小さなお尻を澪の眼の前で左右に揺らしながら、

「ハァハァ、そーら刃更さん。ここかー、ここがええのんかー」

と、馬鹿がエセ臭い関西弁で言っていた。きっと魔法で一般人には見えない状態なのだろう。自分や柚希が気付かなかった事を考えると、恐らく気配も消している。だから、澪は無言で一歩後ろへ退がると、眼の前の尻を月面辺りまで蹴り上げてやろうとして、

「――あれ？　どうしたの成瀬さん？」「きゃあああああぁぁぁっ!?」

突然の呼び掛けに飛び上がると、神速でロッカーの扉を叩き付けるように閉めた。

「……ご、ごめん。そんなに驚くと思わなかった」

過剰なこちらの反応に、横から声を掛けてきた相川志保が目を丸くする。

既に相川は、水着を脱いでシャワーへ向かう準備を済ませていた。隣にいる榊千佳もだ。

「成瀬さん、まだ水着脱いでないの？　早くシャワー行こうよ。あんまりのんびりしていると、時間なくなって入れなくなっちゃうよ？」

「あ、うん……そうね」

榊に言われ、とっさに言葉を濁す澪に、

「それとも――その大きな胸のせいで水着が脱げないなら、手伝ってあげよっか？」

と、からかうように相川。両手の指をワキワキする彼女に、澪は必死に言い訳を探して、

「ううん……それより、二人とも先に行ってて。あたし、ちょっと体調悪いかも……」

「え、大丈夫？　もしかして、また例の貧血とか？　保健室に連れて行こうか？」

途端にふざけるのを止め、心配してくれる相川に、

「た、多分、少し休めば平気だと思う。でも、一つお願いがあるんだけど……」

澪はこの危険な事態を打開するためのアイディアを告げる。

「まだ一時限目でしょ？　この後ずっと塩素くさいのは嫌だから、やっぱりシャワーは浴びたいの。それに保健室にも寄って行くかもしれないし、多分次の授業には遅れちゃうと思う。だから、その事を先生に伝えておいて欲しいの」

「オッケー、解った。無理しないでね」「先生には上手く言っておくから」

そう言って、二人は澪を置いてシャワーへ行った。

周囲に人が少なくなったのを確認してから、澪は眼の前のロッカーへ向かって告げる。

「……もう少ししたら、他に誰もいなくなるから。それまでそこで待ってて」

ただし、と底冷えする声で成瀬澪は続ける。

「頭に人のパンツを被った変態と、服を脱いでる馬鹿は、あたしが次にこの扉を開けるまでにまともな格好に戻っておく事」

良いわね？

「さもないと――このロッカーの中が、最新のオーブンより熱くなるわよ」

そして。シャワーから戻ってきた相川と榊を、絶賛体調不良中の言い訳でやり過ごし。

澪以外の女子全員が、着替えを終えて更衣室を出て行った後。

「――ふーん。つまり、あたしの安全を確認するためにこんな真似をしていたって訳？」

成瀬澪は、豊満な胸の下で腕を組みながら仁王立ちで言った。両足の開き具合は、勿論ばっちり肩幅――着替えはまだなので水着姿のままである。

――澪の眼の前、見下ろす視線の先には二つの正座があった。左頬に赤い手形の痕がついた刃更と、小さな頭にアイスの三段重ねみたいなたんこぶをこさえた万理亜である。

この二人が、本日の澪シェフのオススメ「変態と馬鹿の丸焼き、女子高生の殺意を添えて」を逃れてこの程度で済んでいるのは、再び扉を開けた時に努力の跡が見られたからだ。

口で脱がしたのか、刃更が被っていた澪のショーツは万理亜が咥えていたし、刃更は刃更で狭いロッカーの中で、万理亜が穿いていたスカートを途中まで上げていた位だが。

それでも命だけは助けてやる事にしたものの、やはりそう簡単に怒りは収まらない。

「アンタね……昨夜、あれだけあたしや野中で遊んでおいて、まだ足りないっての？」

昨晩。刃更が喜ぶからと柚希をそそのかし、競泳水着の股間部分の前当てをカッターで切り離させた万理亜は、水着の胸元に入れて装着するインナーパッドまで柚希に処分させた。横目で見ながら馬鹿じゃないのかと思っていたのだが、万理亜に「ご自分の身体に自信がないんですね」と哀れみの眼で挑発されると、カッとなった澪はつい対抗してしま

い。挙げ句、そんなHな競泳水着をつけている姿を刃更に見せる事になってしまった。

それでも刃更が、そういう格好になったこちらを見て慌てたり、意識して顔を赤くしたりするのを見るのはやはり楽しい。今だってそうだ。こちらを意識してしまうのか、顔を赤くした刃更は俯いたまま、水着姿の澪の足下しか見られずにいるのは可愛いし楽しい。

……だけど。

最近はそうも言っていられない状況になってきている。柚希も一緒に暮らすようになって以来、万理亜が事あるごとに澪と柚希の対抗心を煽って、Hな状況へと誘導しようとしてくるからだ。昨夜も、刃更に水着を見せただけでは終わらず――万理亜の甘言に乗せられてしまった澪達は、皆でお風呂へと移動。そこで刃更に色んな事をさせられた挙げ句、最終的に澪は、主従契約の呪いまで発動してしまい、とんでもない事になってしまった。

そうだ。柚希が万理亜の提案に乗って主従契約を結ぶと言い出した時も、言葉より実際に見る方が早いと言った万理亜が、いきなり刃更と柚希をくっつけて。それを見て怒った澪に催淫の呪いが発動し、最終的に楽にされるまでの一部始終を見られたのだ。

だから柚希も、いよいよ自分も契約を結ぶと言って聞かなくなったのである。

よって、そう簡単に許す訳にはいかない。幸い刃更に平手打ちをしても、主従契約の呪いが発動する事はなかった。契約も、ここは澪が怒っても良い場面だと言っている。

……でも。

澪はふと、僅かな不安を得た。言い訳する万理亜とは対照的に、刃更は最初に何度か謝ってくれてからは、何も言ってこなかった。刃更がこの女子更衣室に居たのも、澪のショーツを被っていたのも、間違いなく万理亜の仕業だろう。それ位の事は澪だって解る。

東城刃更は、成瀬澪が本当に嫌がるような事は決してしないのだから。それなのに、

「……刃更は？　何か言いたい事はないの……？」

女子更衣室に足を踏み入れた以上、刃更にも全く責任がない訳ではない。それでも濡れ衣とまでは言えないにしても、己の事情を説明する事ぐらいはできる筈だろう。だが、

「いや。理由はどうあれ、最終的に中に入るって決めたのは俺だから……すまない」

そう言って、申し訳なさそうにしながらさらに俯いた刃更を見て、澪は思う。

……言い訳してくれて良いのに……。

万理亜にそそのかされたとか。澪を守るために仕方なくとか。本当の事を言ってくれて良いのだ。そうすればこちらだって、矛を収める事ができる。

だけど刃更は生真面目で、己を甘やかしたり楽な方向に逃げたりする事をとにかく嫌う。

主従契約の催淫の呪いが出てしまった澪を楽にしてくれる時や、信頼関係を深めて強くなろうとした時でさえ、頑なに澪のためという免罪符を自分に与えようとしなかった。

……不器用すぎよ、馬鹿。

こっぴどく怒る事も、かといって許す事もできずにいる澪に、

「――とにかく、本当にすまなかった」

と改めて刃更は素直に謝罪した。そして、

「後で、柚希にもきちんと謝らないとな……」「――――っ？」

そこで刃更が呟くように口にした名前に、澪は敏感に反応してしまう。

――本当なら、携帯などで柚希に連絡を取って戻ってきて貰えば、もっと楽に事態を解決できたかもしれない。だが、澪にはそれができなかった。すぐに怒ってしまう自分とは違って、恐らく柚希は恥ずかしくても刃更を許すに違いないからだ。今夜には、柚希も刃更と主従契約を結ぶ。きっと自分の時とは違って、柚希はすんなりと主従契約を結び、澪よりも刃更の配下として優れている事を見せつけてくるだろう。よって、せめてこの場では、自分と刃更にはまだできないような二人の絆を見せつけられたくなかった。だから、

「何でもう野中の話になるの……？　今はまだ、あたしと刃更の話でしょ？」

思わず不満を口にする。だがそれは、主従契約の呪いを誘発する後ろめたい感情。嫉妬だ。だが「いけない」と思った時にはもう遅かった。

心と躰――成瀬澪の全てが、主従契約の催淫の呪いによって蝕まれる。

「や……あぁっ、あああぁぁっ……ん」
甘い声を漏らしながら、澪はぺたんと床にへたり込んだ。そのまま澪はふらりとなり、
「っ――お、おいっ!?」「澪さま……!?」
自分の方へと倒れ掛かった澪を刃更が抱き留め、隣の万理亜も心配そうにこちらを見る。
「お前、この状況でどうして……？」
困惑する刃更の腕の中で、主従契約の呪いの痣を首に浮かべた澪は身を悶えさせる。
「……っ、……あたしだって、解ってたもん……っ」
催淫の呪いの効果は凄まじかった。だから、澪はもう抑えていた感情を我慢できない。
「ちゃんと解ってるんだから……刃更がこんな真似するの、あたしのためって事くらい」
でも、と澪は喘ぐ。
「そうやって刃更に悪者になられたら、あたしもう……何も言えないよぉ」
本音を吐露する澪に、刃更は驚いたように眼を見開いた。そして、
「……悪い。でも、俺なんかに気を遣わないで怒ってくれれば良かったのに」
そこまで言うと、刃更はこちらが泣きたくなるくらい優しい顔をしてくれる。
「全く――お前は不器用だな」「っ……誰のせいよ、馬鹿ぁ……」
そして、いつものようにこちらを楽にしてくれようとする刃更に、

「――刃更さん、少しお待ちを。どうせなら刺激を強めていただけませんか？　今のお二人ならば、また一段階戦闘力を強化できるかもしれません」

制止の声を掛けてくる万理亜に、澪を抱いている刃更はスッと瞳を細めた。そして、

「お前、こんな時にまで――」

不謹慎な万理亜の発言に、責める口調で言い掛けたところで　しかし刃更が唐突に言葉を切ったのを澪は見た。その理由は、澪の目にも明白だった。

万理亜の表情が、驚くほど硬いものになっているのだ　そして、

「お叱りは後で幾らでも。ですが、信頼強化による戦闘力のアップは、そういつも行なえるものではないんです。折角のチャンスを逃すような真似は避けるべきかと」

そして、幼い顔を曇らせながら万理亜は己の発言の意図を説明してくれた。

先日、高志達との決戦を前に刃更と澪が戦闘力をアップできたのは僥倖だったのだと。

――信頼関係とは本来、意識してすぐ深められるような代物ではない。時間を掛けて醸成したり、何かの困難や障害などを切っ掛けにして強まるものである。

それでもあの戦いに勝つには他に方法がなかったから、万理亜は刃更に言ったのだ。

勝利のための唯一の「可能性」を諦めるべきではないと。だからこそ万理亜は最初、刃更にだけその話をした。澪にまで話して、それで二人が変に信頼関係をどうにかしようと

「やるわよ柚希」
「止すんだ……お前はそいつを殺しちゃいけない」
「その瞳が、絶望に汚れるさまを見せてくれ」
「――逃げられないんですよ、貴様」

意識していたら、深まるものも深まらなくなってしまう。結果的には澪が刃更と万理亜の会話を立ち聞きしていた事が判明し、刃更の本心を澪が知った事が功を奏し、澪と刃更は契約を深めて戦闘力を上昇させられた。だが本来は、発動した主従契約の呪いを解除した位で戦闘力が強化されるような事はない。その程度の事で強くなれるのなら、主従契約を結んだ者は全員、魔王を遥かに超越した魔神か何かにでもなっている。

そんな中　澪と刃更は今回、また強くなれる可能性を得たのだ。

その貴重な機会を無駄にできるような余裕は、自分達には――特に澪にはない。一度くらい戦闘力を強化できた程度では足りないのだ。刃更達の足手纏いにならないためには。

何よりも、成瀬澪が戦う理由――養父母の仇への復讐を遂げるためには。

――成瀬澪は覚えている。本物の両親と思っていた養父母が眼の前で殺されたあの時、彼らを殺したあの魔族が放っていた凄まじいまでの圧力を。

だけど澪は決めたのだ。必ずあの魔族を滅ぼし、養父母の仇を討つと。そして、そのためならばどんな苦労も厭わないと。だから――そんな自分と共に戦ってくれる刃更と一緒に強くなれるのなら、成瀬澪は構わない。たとえどれだけ恥ずかしくても。

……だって。

先代魔王の娘だと知ってもなお、刃更は澪を守ると言って、彼の命を懸けてくれている。

だから。せめて刃更がくれる想いに応え、そして返すために成瀬澪は言う。

「……お願い、お兄ちゃん」

澪が口にしたのは、それだけの短い懇願だった。だが、それで充分だった。

お兄ちゃん——そのたった一言で、澪と刃更の関係は一変する。

大切な家族から、忠誠を誓う支配者へと。成瀬澪にとって、東城刃更だけが絶対になる。

「……解った」

刃更がそう短く言うと、横の万理亜が提案してくる。静かな声で、

「念のためシャワールームの方へ行きましょう。二時限目に女子がプール授業を行なう事はないようですし、保険として人避けの魔法も使ってはいますが——それでもここだと、万一誰かが入って来てしまった時に見られてしまうかもしれませんから」

そして澪は、刃更と万理亜によってシャワールームの一番奥の個室へと連れ込まれた。

お姫様抱っこから床に下ろされた澪は現在、タイル張りの床に乙女座りの状態でいる。

「……ん」

全身を甘い熱に冒されている澪は、万理亜が刃更の耳元へ囁いているのを見た。恐らく、

こちらを強烈に屈服させるための相談をしているのだろう。

――戦闘力を強化するには、想像を絶する圧倒的なレベルの屈服が必要だ。前回はメープルシロップを使って胸を滅茶苦茶にされ、徹底的に快楽を心と躰に刻まれた。

……今回はあたし、どうなっちゃうんだろ……？

既に二時限目は始まっている。その気になれば、かなり長い時間を屈服に使える。

そう思い、口の中に溜まったとろりとした唾液をゴクリと飲み込むと、恐ろしく甘美な震えが澪の全身を駆け抜けた。疼きにも似た甘ったるい熱が、胸の奥と下腹部の底に溜まってゆく。その熱に瞳をとろんとさせ、意識をふわふわとさせているこちらに、

「……悪い、待たせたな」

ようやく刃更はそう言って、澪の方を向いてくれた。その右手には、いつの間にか壁のフックから取り外されたシャワーヘッドが握られていて、

「何……それ、どうするの……？」

「まずは熱くなってしまった澪さまの躰を、冷まして差し上げるんですよ」

こちらの問いに万理亜が答えると同時、控えめな勢いでシャワーヘッドから水が吐き出された。水温は最低。そんな限界まで冷やされた水を手に、

「――我慢できなくなったら言ってくれ」

刃更はそっと告げて、まずは滔の足下から濡らし始める。催淫の呪いで極限まで性感を高められ火照った滔の躰に、冷たいシャワーは想像以上に心地良くて、

「ん……っ」

爪先や足の甲、くるぶしや足首が、くすぐったさの中から敏感に快感を見付ける。

……何これ……ただのシャワーなのに……っ。

柔らかな冷水の愛撫による気持ち良さに、滔は驚きを隠せなかった。

だが、ゆっくりと水を掛けられる場所が上り始めると、徐々に得られる快感が大きくなり、それこそ爪先から太股まで下半身をしっかりと濡らされた頃には、

「……っ、ぁ……ふ……う……んぅ」

滔はもう、甘い声が漏れてしまうのを抑えられなくなっていた。そして、

……っ、どうしよう……。

滔はふと鼓動を速いものにする。太股まで水浸しにされた自分が、次にどこを濡らされてしまうかを想像してしまったのだ。

――成瀬滔は、東城刃更を己の主として信頼している。だからこそ、これまで色々な事をされてもそれらを受け入れる事ができ、主従の絆を深めて来る事ができた。よって、もし彼がそこを濡らしたいというのなら、滔はそれを拒む事はできない。

「え……？」

ところが刃更のシャワーは澪の最も敏感な場所を避け、今度は手を濡らし始めた。

どうして、と澪は思う。自分を屈服させるなら、そこが一番効果的なのに。すると、

「ふふ……違いますよ澪さま」

と、こちらを見透かしたように万理亜が言った。

「澪さまのそこは、ヤケドするくらい熱くしておかないといけない場所です。冷ますなんて真似する筈がないでしょう。大体、そこは熱いまま濡れるから良いんですよ」

「っ……」

顔を赤くするこちらへ万理亜がクスクスと笑うのに対し、刃更は無言のまま澪の手から肘に水を掛け、さらに二の腕や肩を濡らしてゆくと、やがて何もない状態でも感じやすい場所へとシャワーを向けてきた。背中に首筋――それに鎖骨だ。

「んっ……ふっ、く……ぅん……はぁ……っ」

弱い場所を濡らされた澪は、躰をピクンピクンと震わせながら、それでも唇を噛んで必死に声を押し殺す。たとえ催淫の呪いの発動中でも、シャワーで感じてしまうような女とは思われたくなかった。

だが、そんな強がりを思えたのもそこまでだった。

刃更の視線が、小さな水着の中ではち切れそうになっている澪の胸へ向けられたのだ。

「あ……」

澪はふと熱い吐息を漏らした。主従契約を拒んだ時も、高志達との決戦の前も、何度となく屈服させられてきた澪の敏感な場所。いよいよ、そこを濡らされるのだ。

水着の上からではあるが、そんなものは何の気休めにもならない。催淫の呪いが発動している時の澪の胸は、シャツの上から揉まれただけで軽く達してしまうレベルにまで性感が開発されている。今はもう、シャワーですらどうなってしまうか解らない。

そんな敏感な澪の胸を、刃更のシャワーが濡らし始めると、

「や……んっ、ぁ……っく、ぅ……はぁ、ん……っ」

途端に胸の奥に生まれた快感が全身を巡り、澪はもう声を我慢する事はできなかった。

……やだっ、あたし学校で何て声……っ。

こんなのはいけないと思うのに、それでも澪は乱れてしまう自分を止められない。

そんな澪を刃更が黙って見つめてくる。その視線が澪を余計に感じさせた。

そして——敏感な胸をたっぷりと濡らされた後。ふとシャワーが止められた。

「は……んぁ、……や……ん」

シャワーによる快感が収まり、甘い深呼吸を漏らした澪は気が付く。

……あ、あぁ……っ。

冷たくされて感じた胸の先が、水着を押し上げ、いやらしく快楽を主張していた。
すると刃更がこちらの腰を抱き寄せ、その胸の片方にそっと唇を寄せてくる。
「っ……だ、駄目え……お兄ちゃんまで、濡れちゃう……っ」
だから待って、と言う暇はなかった。甘く悶えるこちらに構わず、水着の上から一気に口の中に胸の先を含まれ、そして吸われた。その瞬間――女子更衣室のシャワールームが、成瀬澪が学校内で初めて絶頂した場所になった。その凄まじい背徳感に、
「――――」
澪は全身を快楽で痙攣させ、視界を真っ白に染められた状態で嬌声を上げる。
無意識に背中が反り、勝手に腰が浮いてしまう――そんな激しい絶頂。
屈服には充分すぎる程の快楽だった。それなのに、
「……っ？　やっ、お兄ちゃ……ま、待って……！」
刃更はまだ絶頂が収まらないこちらの背後に回ると、胸の横から水着の中へ両手を入れてきた。窮屈な水着の中へ刃更の手が侵入し、澪の胸を滅茶苦茶に揉み始める。
呼吸を整える間もなく、澪は刃更の腕の中で次の絶頂へと押し上げられた。
……やっ、どんどん躰が熱く……っ。
再び刻まれる強烈な絶頂に、澪は自分の体温が上がったのを感じた。

それでも刃更は止まらない。澪の胸と刃更の手が、濡れた水着の中でかつてないほど密着し、一つになった。そして、ピンと張り詰めている澪の敏感な胸の先端が両方共キュッと摘まれ、爪弾くように何度も擦り上げられる。快楽による屈服を思い知らせるように。

「お兄ちゃ――やぁっ、お兄ちゃ……あっ！」

幾度となく刻まれる絶頂に、澪は全身をわななかせながら甘い嬌声で刃更を呼んだ。少しでも屈服を強めようと己の主を何度も呼び、どれほど絶対的な存在かを意識する。

それなのに――一向に主従関係が強まった時に生じる、あの輝きが出てこない。

「……やっ、何でぇ……んっ、どうしてぇ……？」

「澪さまと刃更さんが今よりさらに上に行くには、もう胸を揉まれたり、吸われたりして達する位では足りないという事ですよ――たとえその場所が、学校であろうとも」

「う、嘘……そんな、そんなの……っ」

万理亜の言葉に、胸を揉まれ続けている澪は愕然と悦びの入り交じった声を上げる。

……こ、これ以上なんて無理っ。絶対無理ぃ……っ。

信じられなかった。こんなに感じているのに。こんなに屈服しているのに。こんなにも澪の心は刃更への服従を誓っているのに――それでもまだ足りないだなんて。すると、

「――――――」

ふと刃更が、澪の胸を揉むのを止めて両手を水着の中から抜いた。
どうしてと瞳で問い掛けた澪は、すぐに彼の考えを理解する事になる。
「っ……お兄ちゃ、何して――あぁあっ!?」
とっさに澪は、刃更によって軽い絶頂を刻まれた。
シャワーヘッドを強引に、胸の横から水着の中へと滑り込ませられたのだ。
「ば、刃更さん……っ？」
傍に居た万理亜が、慌てたように困惑の声を上げる。
それは、この行動が刃更によるアイディアである事を意味していた。
強引なアドリブ。だが、これで終わりではない事を成瀬澪はとっさに理解した。
シャワーヘッドは、澪の左胸――その張り詰めた先端に押し当てられているのだ。
……う、嘘……っ。
成瀬澪は、自分がこの後どうなってしまうのかを想像し、ぞくりと身を震わせた。
確信する。これから自分は、かつてないレベルの屈服をさせられてしまうのだと。
「っ……ぁ……あぁ」
その瞬間の到来が間近に迫っているのを感じ、声と躰を震わせたこちらに対し、
「――今、終わらせてやるからな」

刃更は静かな瞳で、澪を見つめながらそう言って。
そして刃更の右腕が、背後から躰の前へと回され、その手にグッと左肩を抱かれた。
「――――っ」
だから澪は、その腕にギュッとしがみ付いた。自分と刃更が今以上に信頼関係を強めるために、これは必要な事だと理解して覚悟を決めたのだ。
澪が全てを委ねた主――刃更は何も言わなかった。
ただ僅かな間の後、空いていた彼の左手が、シャワーを一気に全開にした。その瞬間、
「っ――――やあああああああああああっ」
水着の中で暴れ出したシャワーの奔流に、澪は本気の悲鳴を上げた。激しい水流に限界まで敏感になった胸を滅茶苦茶にされ、澪は一気に絶頂へと到達する。だが、その程度では終わらない。シャワーから勢い良く吹き出す水が、澪の胸を容赦なく犯す。
「やっ、はあぁっ!?　んっ、ああっ、ふあぁぁんっ、んあうっ、っあぁぁぁぁぁっ！」
連鎖する絶頂が快楽の嵐となり、成瀬澪の全てを包み込んでゆく。
長い髪を振り乱し、白い喉を反らせ、細い腰を淫らにくねらせながら、激しい快感に澪が全身を打ち震わせるのに、それでも刃更は澪をキツく抱きしめたまま離してくれなかった。片手で押さえきれなくなると、両手で澪を抱きしめる事でこちらを強く強く拘束する。

そうして、あっという間に肺の中にあった酸素を嬌声と共に出し尽くした澪は、

「……っ、あ……や……あぁ、っ……あぁ……っ！」

それでも次々に訪れる絶頂に意識と呼吸を溺れさせ、達する度にはしたない動きで腰を浮かせてゆく。そしてキツく抱きしめられた刃更の腕の中、息を吐く間もなく連続で訪れた絶頂が十回を数えた瞬間――その場に閃光が生まれて澪と刃更を包み込んだ。

澪と刃更の戦闘力が強化された事を報せる輝きだ。その瞬間、

「――――っ」

こちらをキツく抱いていた刃更が、即座の反応で澪を助けに動いた。

しかし、両手で澪を抱きしめたままの刃更にシャワーは止められない。

――ならば刃更はどうしたのか。その答えを、澪は己の身で味わう事で知った。

澪が暴れたせいで、最早シャワーヘッドは胸の谷間に入り込んでいる――そんな彼女を助けるため、刃更は澪の水着の肩紐を摑むと、その両方を一気に引きずり下ろした。

「やっ――っあぁぁぁぁっ！」

その結果、水着の中に溜まっていた冷水の飛沫を撒き散らしながら、刃更に己の胸の全てを晒した澪は、震えるような羞恥と共に今までで最も激しい高みへと押し上げられた。

それは――極限まで敏感になっていた胸の先を強引に脱がされた水着の布地に擦られ、

大きすぎる胸を窮屈な水着の外へといやらしく躍らせた少女の絶頂だった。

「――あっ……は、ああぁ……ん、やっ……ぁ……んぅ」

そしてようやく絶頂から解放された澪が、絶頂の余韻に浸りながら熱い息を吐くと、

「最後までよく頑張ったな……偉いぞ」

耳元にそっと囁きが来たのと同時、水着を脱がされ裸になった上半身を優しく抱きしめられた。温かくて柔らかな声と抱擁が、澪の全身に染み渡るように広がってゆく。

……ぁ……お兄、ちゃん……そっか。あたし、またちゃんと出来たんだ……。

良かった、と澪は安堵した。またお兄ちゃんが褒めてくれた……その事が嬉しい。

「ん……」

激しい快感の残滓に意識を抱かれながら、澪は刃更の逞しい胸へと頬ずりをした。

頑張った自分を兄に褒めて欲しい妹は、甘えるように何度もそれを繰り返す。

すると、背中を優しく撫でられた。それは言葉よりも欲しかった澪の望みそのもので。

凄く恥ずかしかったし、気持ち良すぎておかしくなってしまいそうだったけれど――その全てが報われた。だって、これでまた刃更の役に立てた。主である刃更と共に在るための絆と力を、また一つ強くする事ができたのだ。

そうしたいと思える主が――己の全てを捧げたいと思える主がいる事の喜び。

その幸せを目一杯に感じながら、成瀬澪はゆっくりと瞳を閉じていった。
そして、そこから先の事を澪はよく覚えていない。
ただ――刃更の温もりが自分を包んでくれていた事だけは、ぼんやりと覚えている。

## 5

刃更が与えた二桁を超える絶頂は、澪の意識を飛ばしてしまうには充分だった。
壮絶な快楽を否応なく刻まれ続け、屈服し尽くした心と躰が休息を欲したのだろう。
それでも呼吸と脈拍は安定しているし、万理亜の見立てでは問題ないとの事だった。
だから刃更は澪を抱き上げて更衣室へと運んでやると、風邪を引かないようにタオルで澪の躰を拭いて制服を着せてやるように万理亜に頼んだ。そして、自分は周囲に気付かれないように気配を消して男子更衣室へ戻って制服へと着替えると、再びプール用女子更衣室へと行き、二人と合流。気を失っている澪を抱き上げて保健室へと運び、養護教諭の長谷川に、少し熱があるようなのでベッドで休ませて欲しいとお願いした。そして一般人の長谷川には見えないように姿を消している万理亜に、意識が戻るまで澪の傍にいるように指示をすると、刃更自身は三時限目から授業に復帰した。

その後、昼休みになったところで澪は意識を取り戻し、万理亜と教室へと戻ってくると、午後からの授業にはきちんと参加して。そして――放課後になった現在、

「……ったく、どこ行ったんだ万理亜は」

東城刃更は、万理亜を捜して校内を歩き回っていた。

澪が教室へ戻ってきた時は、刃更達以外には姿が見えない状態で付いて来ていた。そして昼休みを共に過ごし、絶対に大人しくしているという条件で五時限目も教室内にいる事を許したら、案の定こちらが授業中で手を出せないと思って刃更に悪戯三昧だ。

よって五時限目が終わるまでどうにか耐えると、休み時間の間にこってりと説教。六時限目からは、廊下で何もせずに待っているよう言い渡したのである。

……先に帰ったのか？

否、それはないと刃更は思う。自分は、廊下で待つように万理亜に言った。もし先に帰るなら、少なくともその事をこちらに報せる筈だ。黙って帰宅するとは思えない。

だとしたら、体どうしたのだろう？　携帯も何度か鳴らしているのに応答がなかった。

……まさか。

もしもの可能性が思い浮かび、東城刃更は表情を硬いものにする。

屋上では、生徒同士のカップルが他の目を盗んで逢い引きしていただけだったが――も

しかしたら六時限目の最中に、本当に敵がやって来たのかもしれない。そして様子を窺いに行って見つかったり、ばったり遭遇したりなどして戦闘に入ったとしたら。

……いや。

それなら戦闘音が聞こえる筈だ。よしんば音を遮断する結界が展開されたとしても、間違いなく魔力の反応は出る。そうすれば刃更達も気が付く筈。

――ならば、万理亜が敵に不意を突かれてしまったとしたら？　そして何の抵抗もできず、刃更達に助けを求める事もできなかったとしたら？　そんな最悪の想像に、

「……っ！」

気が付くと、刃更は廊下を走り始めていた。その表情に余裕はない。

「クソっ……やっぱり、滞と柚希にも捜して貰うべきだった」

昼休みに教室へ戻ってきた滞に、刃更が心配しながらもう大丈夫なのかと問うと、平気だと応えた滞の態度はかなりぎこちないものだった。顔を赤くして、こちらと目を合わそうとしないのだ。恐らく、あそこまで激しく乱れてしまった自分を刃更に見られた事が恥ずかしかったのだろう。よって自然と刃更も顔を赤くし、気まずい雰囲気になってしまって。傍に居るとどうしてもお互い意識してしまうため、滞には先に帰宅して貰う事にして、一人にならないよう柚希にも一緒に帰って貰ったのである。

――だが本当に大事なのは、自分達の恥ずかしさなどより万理亜の無事だ。

それなのに……と放課後の廊下を駆けていた刃更は、

「っ――居た！」

ふと窓から見える外の景色に、捜していた少女の姿を発見して慌てて足を止めた。

「アイツ、何だってあんな所に……っ！」

道理で見つからなかった筈だ。あそこは普通なら足を踏み入れない、入り組んだ建物の隙間にあるデッドスペースのような場所だ。刃更はすぐに窓を開けて呼び掛けようとして、

「え……？」

しかし、窓の鍵へと伸ばした手を途中で止めた。中庭に居る万理亜が、一人ではなかったのである。だが、この学園内において、刃更・澪・柚希以外に万理亜が姿を晒せる人間はいない。かといって敵と対峙していた訳でもなかった――ならば誰か？

「……滝川？」

その名を、東城刃更は呆然と口にした。万理亜と一緒に居たのは滝川八尋だった。

「何であの二人が……」

信じられないものを見たかのように、刃更は呟いた。すると話が終わったのか、とっさに動けずにいた刃更の視線の先で、万理亜と滝川が分かれて別の方へと歩いて行く。

また見失う訳にはいかない――刃更は急ぎ、万理亜の後を追い掛けた。すると、一階へ降りて生徒玄関から外へ飛び出した所で、ばったり万理亜に遭遇する。

「あっ、刃更さん。やっほー」

こちらを見付けるなり、暢気な笑みを浮かべながら万理亜が手を振ってきた。

「『やっほー』じゃないだろ、ったく……何を勝手にウロついてるんだ」

「やーすみません。何もせずに廊下で待つって、想像以上に暇でして。水の入ったバケツ持って立たされるあれって、重さよりも退屈さの方が苦痛なんじゃないですかねー」

「お前な……少しは反省しろよ」

嘆息して言った刃更は、チラっと万理亜の表情を窺う。

……まさか、な。

その横顔は、いつもの万理亜と何も変わらない自然なものだった。だから、東城刃更は思う――屋上の逢い引きカップルを敵襲と勘違いした時のように、ゾルギアが澪を狙っていると聞かされた事で、自分は少しナーバスになっているのだろうと。

――万理亜と滝川が会っていたあの状況は、実は多くの複雑な可能性を孕んでいる。

何せ滝川は魔族であり――しかも澪を狙っている現魔王派が遣わした彼女の監視役だ。

しかし、本当の正体は澪を守りたい勢力――穏健派の魔族であり、現魔王派へはスパイ

として潜り込んでいるという。だが、それらの事実を万理亜は知らない筈だ。

滝川の正体を知っているのは、あくまで刃更だけ。だからこそ、その正体を見抜いた刃更は、極秘裏に彼と手を結んだ。いざという時の切り札として、敵を騙すにはまず味方からという格言に則る形で。よって澪や柚希がそうであるように、万理亜にとっても滝川は、単なる刃更達のクラスメイトの一員でしかない筈である。

無論、同じ穏健派なのだ。万理亜と滝川が顔見知りの可能性がないとは言えないが、

……でも。

そんな話は、万理亜からも滝川からも聞かされた事はない。そして今日の昼休み、澪と一緒に万理亜が教室へやって来たのを見るなり、刃更はすぐに滝川に事情を説明し、万理亜が見えていないフリを頼んで、実際に滝川にはそのように振る舞って貰っている。

よって万理亜と滝川を信じるなら、二人に接点はない筈だ。

ならば——先ほど二人が一緒に居たのは何なのか？　魔法で一般人には見えない状態の万理亜が、一般人のフリをしている滝川と共に居た事は一体どう説明できる？

……何かの拍子に万理亜が魔法を解いて、運悪くそれを滝川に見つかった……。

確かにその可能性はゼロではない。しかし、だとしたら滝川から万理亜に話し掛けたという事になる。そして——自分の正体を隠している滝川が、万理亜に接近するような真似

を果たしてするだろうか？　滝川がそうする理由を考えていた刃更は、

……あ。

そこで、今更ながらに気が付く。放課後になってからそれなりに時間が経過し、既に下校のピークは過ぎている。それでも部活動のため残っている生徒もおり、刃更達が現在いる生徒玄関は生徒の出入りが完全になくなる事はない。それなのに、先程から明らかに部外者の万理亜が居ても誰も気が付かないのは、万理亜が魔法で姿を消しているからだ。

そこにおかしな点はない。だが、万理亜が魔法を解いていないのなら――先ほど万理亜と滝川が互いに偶然を装って会話する事ができた唯一の可能性がなくなってしまう。

「？　刃更さん、どうかしましたか？」「っ……いや、何でもないよ」

疑念が一気に膨らんだタイミングで問われた刃更は、とっさにそう誤魔化した。

……クソっ！

とある可能性が脳裏に浮かび、東城刃更は胸の奥が一気に冷えるような緊張を得た。

それは最悪の状況――成瀬万理亜と滝川八尋の二人共が、刃更を欺いている可能性だ。

――いつまでも隠し通せるとは思っていないし、そのつもりもないが、刃更としてはせめてゾルギアを倒すまでは、滞達に滝川の正体を隠しておきたいと考えていた。

敵は高位魔族で、懐刀を務める配下も相当な強さと聞く。滝川がいざという時の切り

# 新妹魔王の契約者（テスタメント）Ⅲ

上栖綴人

角川スニーカー文庫
17991

札として機能しないと、勝算はかなり低いだろう。だから、もし二人が刃更に秘密で繋がっている事が、澪を守るために必要な措置だったのなら構わない。刃更が知らない事で、いざという時に打てる手もあるだろう。現に刃更も、同じ事を澪達にしている。

だが――もしも二人が悪意を以てこちらを騙していたのだとしたら。

刃更が滝川の正体を見破り、秘密裏に彼と手を結んだ事も。滝川の正体を万理亜が知らないというのも、それら全てがこちらを害するための罠だったとしたら。自分達は今、非常に危険な状況へ追い込まれている事になる。それこそ絶望的な程に。

――万理亜は大事な仲間で、そして大切な家族だ。疑ったりはしたくない。

だけど、このままなかった事にはできなくて。教室へ置きっぱなしになっていた鞄を万理亜と共に取りに戻った刃更は、クラスに誰もいない事を確認すると、ふと何気ない口調で万理亜に問い掛けた。

「……なあ万理亜。先刻、ウチのクラスの滝川と一緒に居なかったか？」

それは祈るような気持ちで発した、様々なものの命運を左右する問い掛け。すると、

「あれ？　見てたんですか刃更さん？　いやーそうなんですよ」

万理亜はけろりと即答した。

「しばらく来ないと、意外と構内の細かい構造って忘れてしまうものですね。あちこち探

検している内におかしな場所に入り込んでしまったのか、すっかり迷ってしまいまして。仕方がないので、一旦魔法を解いて、近くを通り掛かった方に道をお尋ねしたんです」

「……え？」

予想していなかった返答が来て、思考を停止させた刃更に、

「そうしたら運良く、刃更さんが仲良くされているご友人だったので本当に助かりました。学園内で人気の高い澪さまの事を知らない方はいないでしょうが、妹が居るという設定を知っている方は限られますからね。もし通り掛かったのが余り事情を知らない方だったら、下手をすると部外者を通りこして不審幼女扱いをされていたかもしれません」

間一髪です、と万理亜。それらを呆然と聞きながら、東城刃更は思う。

……一旦……そうか、それなら何もおかしくないじゃないか。

滝川から万理亜に話し掛ける理由が考えられなかったが、道に迷った万理亜が一時的に魔法を解き、自分から話し掛けたというなら話は別である。

状況としても充分にあり得る。澪の護衛役の万理亜が単独で構内をうろちょろしていれば、滝川が気になって様子を見に行ってもおかしくはないからだ。

「何だ……そうだったのか」

刃更がホッと胸を撫で下ろすと、

「――という訳で、私としては今後定期的にこちらへ来て、構内の構造の熟知に努めようと思うのです。その時は刃更さんもどうです？　また一緒にロッカーに入って、わざと涛さまに見つかって逆に調教とかしてやりましょう」

「少しは懲りろっ、ロリエロサキュバス！」

ぐぐっと握り拳で言った万理亜を、刃更は反射的にしばこうとして――しかし、

「……ったく」

そう言うと、ポフっと万理亜の頭の上に手を置いた。

「？　あの……ぶたないんですか刃更さん？」

キョトンとする万理亜に刃更は嘆息すると、先程からずっと思っていた事を言う。

「……心配してたんだぞ。いきなりいなくなったから、お前に何かあったのかと思って」

本気で心配していた事が伝わったのか、「あ……」と万理亜は小さく声を漏らし、

「……すみません」

瞳を伏せて俯きながら呟いた。だから刃更は、万理亜の頭を優しく撫でながら、

「解ってくれたなら良いよ。そうだな……もしまた学校に来るんなら、その時は先に言ってくれ。俺だけじゃなくて、澪や柚希も誘ってみんなで構内を回ろう。全員が居た方が、いざという時にそれぞれどう動くのかきちんと確認しておけるしさ」

「……はい」

少し言い過ぎてしまったのだろうか、こちらに頷く万理亜の表情は暗いままだ。

こんな顔をさせたい訳じゃないのに。刃更は頬をポリポリと掻くと、俯く万理亜の鼻をキュッと少し強めに摘まんでやった。

「ふぇっ――痛ぁっ!?」

突然の事に慌てる万理亜に、刃更は鼻を摘まんでいた手を離すと、ふっと笑った。

「そろそろ帰ろうぜ。あんまり遅いと、澪と柚希が心配しちまう」

何せ――俺達は今日、色々とやらかしたからな。下手すると、またどこか良からぬ場所に入り込んだと誤解されて澪の雷が落ちるぞ。比喩ではなくマジで。

すると、万理亜は「はい」と頷きを返して――そして二人で歩き出す。

無人の廊下を歩いている時も、生徒玄関で靴を履き替えて外へ出ても、万理亜はずっと無言だった。黙って刃更の数歩後ろを付いてきた。そして校門を出て少しした頃、

「……あの刃更さん」「ん？　どうした？」

ふと背後からの呼び掛けに刃更が振り返ると、

「手……繋いで良いですか？」

こちらを見上げる万理亜が、怖ず怖ずとそう問い掛けてくる。それは悪戯をして怒られ

た子供が、親に許して貰おうと距離を縮めようと試みる表情に似ていた。だから、

「……ああ、勿論」

刃更は笑みと共に、そっと手を差し出した。そんなこちらの手に、万理亜の小さな手が重ねられる。不安そうにしているその手を、刃更はキュッと優しく握ってやった。

もう怒っていないと伝えるように。すると、

「……えへへ」

嬉しそうに、それでもまだ少し申し訳なさそうに万理亜は笑って。

それから家に到着するまで、刃更と万理亜はずっと手を繋いで帰った。

西に沈む夕日を背負い、長く伸びる自分達の影を追い掛けるように。

そして――刃更達が向かう先の空は、もう夜になろうとしていた。

星の見えにくい都会の空に、ゆっくりと満月が浮かび上がろうとしている。

# 第2章　揺れる主従契約の功罪

## 1

主従契約魔法――それは主となる者への忠誠を誓うための魔法である。
契約を結ぶ事で互いの魂が魔法で繋がるため、念じれば相手の位置を把握可能。
また互いの信頼関係や絆を強めれば、主・配下共に戦闘能力を上げる事もできる。
その一方で配下の裏切りを防止するため、詠唱者の能力特性が呪いとして付加されており、配下側が主に対して後ろめたい感情を抱くと呪いが発動するようになっている。
……改めて考えてみると、酷い魔法だよな。
自室のベッドの上で天井を見上げながら、東城刃更はぼんやりとそんな事を思う。
――万理亜と共に帰宅し、澪や柚希も加えて四人で夕食を終えた後。刃更は、同居して

いる三人の女の子達から自室で待つように告げられ、言われた通りにしていた。

今夜は満月。この人間界で主従契約魔法を唱える事ができる唯一の日だ。

そして――これから刃更は、澪に続いて柚希とも主従契約を結ぶ事になっている。

当初、刃更は柚希との主従契約に対してはかなり消極的だった。

刃更は澪と主従契約を結んだが、そのせいで澪は刃更に対して後ろめたい感情を抱くと催淫状態に陥ってしまうなど、かなりの精神的な負担を引き受ける羽目になっている。

特に最初に快楽で配下として屈服させるしかなかった事もあり、澪にはこれまで何度も恥ずかしい想いをさせてしまっていた。昼間の女子更衣室やシャワールームでの出来事などは正にそれだ。だから、柚希までわざわざそんな目に遭わせる必要はないと思っていた。

……でも。

互いの位置が解るようになる事。そして主従関係を深めれば戦闘能力を上げられる事。

この二つのメリットは非常に大きい。現にこれまでも、これらのメリットのお陰で澪を助けられた事があったし、強敵との戦いを切り抜ける事もできていた。そして今後は、高位魔族というさらなる強敵との戦いを避けて通れなくなってくる。何せ澪が復讐を誓っている養父母の仇――ゾルギアが高位魔族なのだ。さらに向こうも澪を狙って動き出しているとなれば、遠からず激突は必至。よって、その対策は刃更達にとって急務だった。

――そんな中で浮上したアイディアが、刃更と柚希が主従契約を結ぶというものだった。

柚希は勇者の一族の《里》からは澪の監視任務を命じられているが、一緒に暮らして行動を共にしていれば、敵には刃更達の仲間にしか見えない――否、柚希は既に刃更や澪のために命令を無視して《里》を裏切るような真似までしてくれた刃更達の大切な仲間だ。

もしゾルギアが襲ってきたら、きっと柚希は刃更達のために戦ってくれるだろう。

それは非常に心強い一方で、柚希の命を危険に晒す事を意味する。そうしたリスクを少しでも減らすため、柚希とも契約を結んではどうかと万理亜が提案したのである。

主従契約のリスクを知っているため渋る刃更や澪とは対照的に、柚希はあっさりと万理亜の提案を了承した。その決意は、催淫の呪いが発動している澪を見ても変わらなくて。

それどころか、柚希は積極的に刃更と主従契約を結びたいとまで言ってきたため、最終的には刃更が折れた。それは先日、柚希と都心の繁華街へ出かけた時――柚希が買い物の途中で刃更達の前から姿を消した事があったというのが大きい。

あの時に得た焦りと恐怖を、束城刃更は忘れていない。柚希を失う事になる位なら、いっそ主従契約で配下にした方がマシだと心の底から思った。

そして今、自分達にはゾルギアという明確な脅威が迫っている。

ならば、少なくともゾルギアの件が解決するまでは、澪に続いて柚希とも一時的に主従

契約を結ぶという選択肢は間違いではないだろう。主従契約は満月の日であれば結べるだけでなく、両者合意の下で解除も行なえるのだから。

そこで、ふと刃更の部屋の扉が外から控えめにノックされ、

『……刃更。万理亜と野中が、準備ができたから下に来てって』

扉の向こうからの澪の呼び掛けに、刃更はベッドの上で身を起こし、

「ああ……解った」

静かに返事をすると、自身もまた覚悟を決めて扉の方へと向かって歩き出した。

廊下に出た刃更は、澪に先導される形で階段を降りていった。

すると先に一階へ降り立った澪が、見上げる視線と共にこちらを振り返り、

「言っておくけど……あんまり変な気とか起こしちゃ駄目だからね」

少しだけ拗ねたように、でもどこか不安そうな上目遣いで釘を刺してくる。

「解ってるよ……でも、大丈夫だろ。今回はお前の時とは違うんだし。普通にちゃんと契約を結べば、いきなり呪いが発動しちまう事はないんだからさ」

そう。澪との契約時に色々あったのは、本来の主従とは逆転して魔法が発動してしまい、

The Testament of Sister New Devil III

# ConTeNtS


プロローグ
**嘲笑う因縁の眼差し** ——— 005

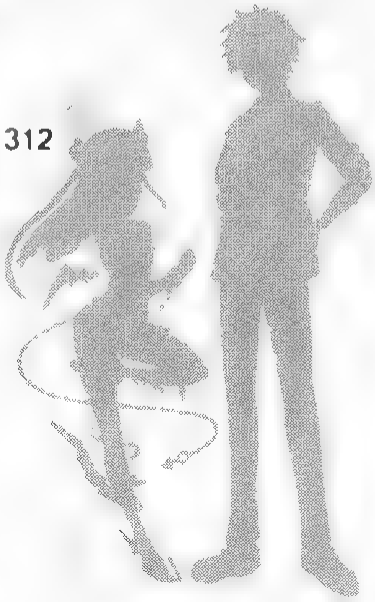
第1章
**暴走のロリエロサキュバス** ——— 012

第2章
**揺れる主従契約の功罪** ——— 081

第3章
**全てはこの時のために** ——— 181

エピローグ
**絶対を口にした者の覚悟を** ——— 276

あとがき ——— 312


口絵・本文イラスト／大熊猫介（ニトロプラス）
口絵・本文デザイン／濱崎正隆（NARTI;S）

澪が契約を拒んだからだ。普通の手順通りに行なえば何の問題も起きない。しかし、

「……信じてるからね」

澪はポツリとそう言うと、こちらを置いて一足先にリビングへ入っていってしまった。

どうしたのだろう、と思いながら後に続いた刃更は、リビングに足を踏み入れるなり、

「――――」

澪が発した言葉の意味を即座に理解し、思わずその場に立ち尽くした。

床に描かれたルーンによる巨大魔法陣の中央に、柚希が立っていた。それだけなら、刃更が足を止める理由はない。刃更の動きを止めたのは、柚希の格好のせいだ。煽情的な白のビスチェにガーターベルト――男を淫らに誘うための下着を柚希は身に纏っていた。

その壮絶な美しさに思わず見惚れてしまっていた刃更は、すぐに慌てて背中を向けて、

「っ――わ、悪いっ……じゃない、何だその格好っ!?」

困惑の叫びを上げるこちらに、背後の柚希が少し恥ずかしそうな声で、

「私が成瀬さんに負けたくないって言ったら……万理亜が用意してくれた」

「何だそのおかしな対抗心っ？　いや、それより何だってその格好なら澪に負けない事になるんだよっ。騙されるな柚希っ、そんな格好は万理亜を楽しませるだけだぞ！」

「刃更さん、それは酷い誤解です。私は柚希さんのお気持ちに応えただけですよ」

「嘘つけっ。お前、絶対にこの状況をドサクサで楽しもうとしてるだろっ」

ええい。学校から帰る時は少し落ち込んでたみたいだから心配してたのに、何だこの全開っぷりは。少しでもエロを差し挟む余地があれば、強引にねじ込んできやがって。

……こんな事になってるなら、先に教えといてくれよ。

刃更が咎める視線を浴に送ると、向こうは少し不機嫌そうな顔をしてそっぽを向いた。

どうやら浴も、この状況を止めようとして既に失敗に終わっていたらしい。そして、

「……刃更、こっちを向いて」「いやっ、その前に着替えてくれ柚希っ」

背後の柚希からのお願いを越える懇願を刃更がすると、

「……」「……あれ？　えっと、柚希さん？」

途端に背後の空気がむーんと不穏になり、束城刃更は焦りを得た。この沈黙――明らかに柚希が不機嫌になっている。恐る恐る問い掛けた刃更に、

「刃更……五秒以内にこっちを向かないと、一枚ずつ脱ぐ」「は、はい、すみませんっ」

即座の勢いで刃更は背後を振り返った。何で謝ってんだろ俺……と思うが、女の子の裸を人質に取られては逆らえない。柚希の煽情的な格好に、刃更が顔を赤くしながら視線を泳がせると、柚希は恥ずかしそうにしながらもどこか満足そうな顔になる。

……くそ、嬉しそうな顔しやがって。

澪や万理亜も時々、敢えて無防備な格好やポーズをしたり、スキンシップをしてきたりして刃更をからかう時にああいう表情をする事があるが、わざわざ恥ずかしい想いをしてまでからかいたくなるほど、刃更のリアクションは面白いのだろうか。

少し恨めしげな瞳で見ると、万理亜は余計に嬉しそうな笑みを浮かべて、

「ふふ。それでは、そろそろ始めましょうか」「……ああ、もうさっさと終わらせてくれ」

少し投げやりに刃更が応えると、その場の同意が完全になされて全ての準備が整った。

澪と契約を結んだ時と同じで、それぞれが所定の位置に立つ。

「……今回は主従を間違えないだろうな？」

「お任せを。万一、刃更さんを柚希さんの配下にしてしまったら、間接的に澪さまも柚希さんの配下になってしまいますから。今度は絶対にミスしません」

万理亜はドンと自分の胸を叩いてみせると、隣に立っている柚希と手を繋いで、

「――それでは柚希さん、行きますよ」「ん……了解」

柚希が頷きを返すと、すぐに魔法陣が輝き出した。そしてまず柚希の身体が、続いて刃更の身体も同じ光を宿してゆき――そして、程なくして刃更の右手の甲に魔法陣が浮かび上がった。それを見た刃更が、ホッと胸を撫で下ろして、

「よし……柚希、この後の手順は解ってるな？　俺の手の魔法陣に、お前がキスを――」

「……しない」

「そう。しない……って、へ？　な、何言ってんだ柚希……っ？」

思わずギョッとなったこちらに対し、柚希はふんすと鼻息を強くして視線を合わすと、

「最初から決めていた――普通に契約は絶対にしない」

野中柚希は、眼の前の刃更が明らかに動揺したのを見た。

柚希の大好きな幼馴染は、口をパクパクとさせた後、

「な、何言ってんだ柚希……っ？」

慌てたようにこちらへと近寄ってくる。そして魔法陣が浮かんだ右手を差し出して、

「万理亜から聞いただろっ？　早くしないと魔法陣が消えて、そしたら大変な事に――」

「――知ってる。でもそれで良い」

焦る刃更とは対照的に、柚希はしれっと言い放つ。刃更から滲へと視線を移して、

「ちゃんと言った筈……私は成瀬さんに負けたくないって」「……」

柚希の宣言に対し、そっぽを向いていた滲が無言のままチラっとこちらを見てきた。

その瞳には、刃更のような動揺の色はない。恐らく、柚希がこう言い出す事を予測して

いたのだろう。強敵だと柚希は思う。だが同時に、それ以上に思うのは、

……負けない。

刃更と澪が主従契約を結んだ時、澪がどんな状態になったのかを柚希は聞いている。そして、その後も澪が刃更に色々な事をされている話も聞いた。確かにそれは、刃更や澪を取り巻く状況を考えれば、仕方のない事なのだろう。だが、刃更を大切に想う気持ちは、柚希だって絶対に負けていない。だから、刃更と澪の関係を黙って指を咥えて見ている訳にはいかないのだ。まずは同じ条件にならなければ話にならないし、

……同じ条件になるだけじゃ駄目。

無論、刃更への忠誠心ならば絶対に負けない自信はある。だが、如何せん男女の恋愛関係などに関する知識については乏しい面がある事は否めない。そして、こちらは後を追う立場だ。澪よりも何倍も努力しなければ、追い付き追い越す事などできない。

だからこそ万理亜に頼み、こんな恥ずかしい下着姿にもなったのだ。それなのに、

……ここであっさり契約したら、意味がない。

澪が契約した時は、九回我慢したと聞いた。それ以降も、何度も刃更にそういう事をされ、挙げ句には今日のプール授業の後、柚希の知らない所で刃更にされていたと聞いた。

冗談ではなかった。だったら自分はこれまで澪がされた回数を、今日ここで超えてやる。

「柚希……」「平気……私にも成瀬さんと同じ事をして」

こちらを心配そうに見る刃更に、野中柚希は告げる。

「お願い刃更――私を支配して」

柚希がそう言った直後、刃更の手に浮かんでいた魔法陣が消えた――その瞬間、

「あ――……」

下腹の奥――女の器官に生まれた甘い疼きに、柚希はピクンと躰を震わせた。

と同時、その感覚は一気にやって来た。刃更と電車の中で密着した時も、昨夜に万理亜のアイディアで添と共に競泳水着で刃更にされた時でさえも、得る事のなかった感覚に、

「っ……あ……んっ、や……はぁ……ん……う」

甘く身を悶えさせた柚希は、そのままふらりと眼の前の刃更へと寄り掛かり、

「――っと」「っ――ふあぁんっ」

背中に両手を回して抱き留められ――それだけで柚希の全身に甘い痺れが走った。

……何、これ……？

刃更の腕の中で甘く鼻を鳴らしながら、柚希が驚いていると、

「さあ刃更さん……今度は刃更さんが柚希さんの気持ちに応えてあげる番ですよ」

万理亜に嬉々とした声で言われた刃更は、柚希を抱きしめながら、

「……解ったよ。こうなった以上はもう、やるしかないんだろ――ならやってやるさ」

いつもよりも少し低い声で告げてくる。

「ではこちらのソファへどうぞ。まずは柚希さんの弱い場所を探してあげて下さい」

「……」「……」

万理亜の言葉に、柚希と刃更はしばし無言で見つめ合った。

言葉は要らなかった。柚希が刃更へ体重を預けると、刃更は柚希を抱きかかえてソファへと連れて行って――そのまま柚希は、ソファの上へ仰向けに寝かされた。

そして、刃更がこちらへ覆い被さる格好になり、

「……触るぞ柚希」「んっ……」

全身を熱くした柚希が頷くと、刃更の手が柚希の躰に触れ始めた。

刃更の手は優しかった。すっかり敏感になった柚希の躰を気遣うような指使いに、

「っ……ふ、ぁ……ん……やぁ……あっ、ん……んぅ……っ」

男を誘う下着を纏った野中柚希は、ソファの上で甘く身を悶えさせる。

どこを触られても信じられない位に気持ち良かった。刃更に触れられる度にゾクゾクとした快感が柚希の全身を走り、腰の辺りがどんどん熱くなってゆく。そんな敏感な反応を示す柚希に、刃更が少し躊躇う瞬間があった――太股や胸を触る直前だ。それでも柚希が

全てを受け入れる瞳で見上げると、やがて刃更の手はそこにも伸びていった。

「やっ……あ、ふ……ぅ……はあっ……ふぁん、や……ぁ」

女の子の体の中でも特に敏感な場所を攻められ、快感を強くした柚希は徐々に声を大きくしていった。特に胸などは、契約を結んだ時に発見された澪の弱点だ。その時は、徹底的に胸を攻められた澪がどんどんと乱れてゆき、九回目で主従契約へと至ったと聞いている。その甘い気持ち良さは、柚希が今まで触れられたどの場所よりも強くて——でも、

……これなら……何とかなる、かも……。

気を抜くとあっという間におかしくなってしまいそうだったが、それでも勇者としての修行を積んでいる事で痛みなどの感覚に対する耐性があるからだろう。澪は九回揉まれただけでギブアップしてしまったらしいが、自分はそれ以上は耐えられそうだ。

これで澪に勝てる——彼女に一気に追いつける。そう思っていたら、

「？　……ん、刃更……？」

ふと刃更が、こちらの胸から手を離した。一体どうしたのだろう、と思っていると、刃更の手がスッとこちらの腰を浮かせ——次の瞬間、

「やっ——ああぁぁぁぁぁっ!?」

胸など比較にならないような快感に、野中柚希は全身をわななかせた。

……な、何……これ……？

余りの事に快楽よりも驚きが勝った柚希に、こちらの様子を見ていた万理亜が、

「ふふっ、やっぱり柚希さんはお尻でしたね」「え……？」

楽しそうに言われた柚希は、やがてその言葉の意味を理解した。自分は今、己の弱点が一体どこだったのかを教えられたのだ。

「あ、あぁぁ……」

羞恥に顔を赤くして身を震わせた柚希を、刃更は仰向けから俯せにした。

そして、背後からこちらの耳元に囁くように、

「柚希……尻を上げてくれ」

命令する声で言われた柚希は、ビクンと躰を硬直させた。言われた通りにしたら自分が一体どうなってしまうのか、それ位はこの手の知識に疎い柚希でも解る。でも、

「っ……」

柚希は刃更の言葉に従った。澪が見ているのだ。彼女の眼の前で刃更の言葉を拒んだりして、忠誠心の弱い女だとは絶対に思われたくなかった。

だから柚希は、刃更に言われた通りに腰を浮かし、尻を突き出すようにして上げた。

「……っ……あ、ふっ……う」

まだ刃更は触れていない。それでも柚希の尻は、背後の刃更の視線を敏感に感じ取り、勝手にゆらゆらと揺れてしまう。まるで早く触って欲しいと言わんばかりに。そして、

「――すぐに屈服させてやるからな」

優しい声が嘘みたいに、敏感になった尻をぐっと摑まれた――その瞬間。

「――――――」

生まれて初めての激しい快楽のスパークが、野中柚希の視界を真っ白に染めた。

……嘘っ、こんなに……っ。

視界だけではない。思考までホワイトアウトするような、凄まじい快感。

信じられなかった。こんな快楽があった事も。澪がこれを九回も耐えられた事も。

「――――っ」

だが柚希は唇をキュッと噛み締め、必死に己を奮い立たせた。すると、

「エロいお尻ですねぇ……澪さまのお胸と良い勝負です」

いつの間にか眼の前にまで来ていた万理亜が、笑みを含んだ声で言った。見れば、万理亜はこちらに向かって家庭用のビデオカメラを回しており、

「っ――な、何を……っ」

録画ランプが点灯しているのを見て、柚希は激しい羞恥と共に困惑の声を上げた。

——あの日からずっと、この時のために生きてきた。
だからお願い、邪魔（じゃま）をしないで——私にはこれしかないから。